
花屑

霧香 陸徒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

花屑

【Zコード】

Z3891D

【作者名】

霧香 陸徒

【あらすじ】

気が付けばそこは荒野だった・・・。何も秀でていることの無いただの高校生だった俺は、成り行きで軍隊に入ることになった。その隊の名前は「花屑」。しかも、此処は俺の居た世界じゃない?そんな世界で出会った一人の少女「芽衣」。彼女との出会いは戦場の荒野だった。SFミリタリー・ラブストーリー?

第1話「MUSASHOZは掴み取る心」（前書き）

これが本編ですが、プロローグとして別に5個程話があります。
それを読まなくとも大丈夫のようになりますが、気になりました
したらゴメンナサイ。

第1話「MISSHOONは掴み取る心」

辺りには何も無い荒野。

街で生活しているとかなり馴染みのない風景なんでピンと来ないだろう。

だが、そんな想像力の貧困さなんて知つてこっちゃない。なんてつたつてその当事者…つまり今その荒野なんて馬鹿げた場所に立つている状況でそれを悠長に説明している余裕なんて無いからだ。

良く考えてみろよ。 砂場で遊んでいたらいつの間にか辺りが砂漠になつているとかになつてみろ。 冷静になんか居られるハズは無いだろう?

つまりだ。 今、この馬鹿げた場所に立つていらないといけなくなつた経緯は順を追つて説明するとして…

さて、どうしたものか……。

ああ、荒野つて言つたが周りに完全に何も無いわけは無いぞ?
壊れた人形や良く分からないな機械なんかは無数に転がつているから寂しくは無いな。 もつとも、その人形が「自分の5倍以上の大きさ」「だつたりするんだからサービス満点だ。…抱いて寝るのは無理だがな。

「・・・・・あの」

なんだ? 今どうしょも無い非現実さに呆れてる所なんだが…
…気安く話しかけないでくれないかな?

h
:
?

「……〇〇少尉ですか？」

何? しょうい? 何を言つてゐるんだこの『少女』は。

いや、見た所軍服を着ている所を見ると軍人のようだが……。この状況には似合い過ぎてるな……。

それに…今もし「〇〇」と書いてみたとするといふとなるたらうか？ 常識では考えられないような状況で、常識で考えてはいけない。違うと答えた瞬間に打ち殺されているかもしね。そんな状況も「あり得る」。

。 だつて、此処は・・・今まで知つていいた世界とは違つのだから・・

「君、名前はなんて言つんだ？」

• • • • •

返答は無い。 ただ、無言で先導するかのように前を歩いている。 その背中を見つめながら「小さな背中だ」と思った。 先程「似合ひすぎている」と言つたが、それは「軍服が」であり「彼女自身が似合つてゐる」かとは別の話だ。 見た所まだ年端もいかない少

女のようだが……。

「なあ、聞いえてるんだろ？ 名前を聞いているんだけど？」

「…………それは上面とじての命令ですか？」

上官？ ああ、そう言えば少尉だと言つてたな……。 兵隊の階級にはあまり詳しくないけど確かそこそこの階級だつた気がする。 大將、中將、少將、大尉、中尉、少尉で六番目だつけ？ 間違つていいかも知れないが……。

「別にやうつけじゃないが……」

「…………やつですか」

何だ？ 答えたくないのだろ？ まあ、名前を聞いたからといつて別に何があるわけじゃない。 それより聞きたい事はほかにもある。

「これから、何所へ行くんだ？」

「…………報告書はお読みになられないのですか？」

「…………まずつたか。 そんな物は讀んでいるわけがない。 なんとか少尉本人じゃないのだから。 ……こには一芝居打つしかないか……。

「いや、君が正しく任務を理解しているか聞いているんだよ」

「…………」

また黙ってしまった。なんだこいつは？人の皮を被ったアンドロイドか何かか？何かのバグで話す事も出来なくなっているといふのかもしれないな。

「…………これから私達の基地へと案内します。そこに着任すると聞いておりますが……」

「基地？着任！？軍隊に入れって事か？……マズイな……」
「このまま連れて行かれたら偽物だとばれてしまつだらうな……」

「…………少尉？」

「あ、いや、すまん。了解した」

「ひかりの返答が無いので怪訝な顔をして覗き込んでくる少女。
危ない。下手な素振りを見せると速攻でばれてしまう。

「…………さて…………どうしたものか……。」

現状は少し分かった。少尉と呼ばれる者が居て、ソイツはこの少女の所属する部隊だか何かに着任する予定だった。それを迎えに来たのがこの少女というわけだ。だが、少女は少尉の顔を知らなかつた。だから、今連れて歩いている者が本当はどんなヤツなのかは知らない。

参ったねこれは……。

「俺」は「ただの高校生」だったのにな。

「こんな荒野等絶対に無い「平和な時代」のだ。

俺は普通の学校の普通の高校生だった。

勉強はそこそこ。運動はまあまあ。姿勢は・・・聞くな。まあ、デブだとか、ハゲているとかは無いからそんなに酷い事は無いかも知れないが、特段カッコイイわけじゃない。

そんな学生だ。

特技は・・・。

・・・・・・・・・・

なあ？ 特技って何だ？ 良くあるよな？ 履歴書だとかそういう所に書く「特技」ってやつ・・・。そこに特に運動部に入っているわけじゃないただの一般人に書く余地はあるのか？ あえて書くとすると「健康」ぐらいだろう。

人より秀でている特技を持つていない奴なんて多分いっぱい居るだろうからあれは差別用語だと俺は思うんだ。うん。決して俺が面白くない人間だというのを露見しているんじゃないからそこは間違えないでくれ。

そんなわけで俺はいたつて普通の人間だ。反論は却下だ。

だからそんな奴に「軍隊に入れ」なんて言つのは間違つてゐるだろ？

俺も事実を説明して、何とか生かしてもらおうと思つたんだ。

普通ならば、誠心誠意を込めて話せば分かつてもらえるハズだろ？

だけビ、この世界はそんな所まで狂つてゐるようだ。

「 少尉。 貴方はこの「花屑」NO・6の隊員として配属されます。 TAM - 06 の機乗者として・・・よろしくお願いします
なの」

少女に基地に連れて来られ長髪の落ち着いた雰囲気のある女性に面会した。

結局少女の名前を聞き逃してしまつた。 まあ、彼女にはまた会える予感がしたのでその時は氣にもしなかつたが…。

それより…

何の何番がどうだつて？

「ちよ・・・待つてくれつ！？ 俺はこの世界の人間じゃないんだぜ！？ それは今説明したでしょー！」

そうなのだ。俺はこの長髪の娘が顔に似合わず上官だと認識して事情を全て話す事にしたのだ。状況が状況だけに笑い話にされてしまふ可能性の方が高かつたが…。先程の少女といい何か「警戒心が緩む」雰囲気を持っていた。

先程の少女の場合は傍目には「冷たく感じてしまう」だろう。だが、何かそんな一面だけを見て判断出来そうな気がしなかつた。

なんというか…「こんな軍事施設には有り得ない程不釣り合いな言葉だがアツトホームな感じだ。

「あ、ごめんなさい。ええと…ドミノさんでしたっけ？」

「そんな擬音みたいな名前じゃありません…。ああ、それより樟葉さんでしたかね？俺としても意味が分からぬんだが、世界が俺の知っている世界とはまるで違うんだ。人型のロボットなんてせいぜい歩くか踊るかぐらいの事しか出来なかつた。そこは明らかに違う」

「…ドヨン少尉、私は菜乃といつ名前があるの。名前といつのはとても大事なの」

「…言つてゐる事と言つてゐる事が違う。…いや、「言おうとしている事と言つてゐる事が違う」が正しいか。俺の名前はドミノ君でもドヨン君でも無い。

「…もう好きに呼んでくれ！ そんな事より菜乃さん… アンタ人の話を聞く気があるのか！？」

「…ええありますよ。 ただ、貴方も理解しなくてはな

りません。此処はもう貴方の住んでいた世界では無いのです。
そんな世界で過去の世界の事を言つて何の意味があるのですか?」

「クツ・・・・・・！」

先程まで妙に呑気な女だと思っていたが、その態度が急変した。口調もハッキリとしていて、その眼差しも優しさの欠片さえ無かつた。それをあえて何かに例えるなら御誂え向きな言葉があるが・・・軍人の目。・・・洒落にもならずそのままだが、その目を見た瞬間にそう思つてしまつたのだから仕方が無い。

「本日の予定では 少尉を我が隊に迎えて、戦力の増強を図る予定でした。ですが、貴方が現れてしまった。貴方は 少尉の代わりに現れて、代わりに 少尉は消えました。その意味が分かりますか?」

「・・・・・ 分からん。 教えてくれ」

「・・・いいですか。 貴方があの場所に現れた、その代わりに一人の人間が消えた。 それだけ見ればプラスマイナス〇ですね?」

「おい・・・まさかアンタ・・・」

「やつと察しが付きましたか? 貴方が何者なんだというのは問題ではありません。今私達は一人でも多くの戦力を欲しております。お分かりになりましたか?」

「・・・拒否権は?」

「もちろんあります。 ただ、戦闘が繰り返される地でサバイバル

「ライフをお楽しみしたいなら止めませんよ？」

「…………」

「ああ、言葉が悪すぎましたね。戦わずして死ぬか、戦つて生き延びるかというのはどうですか？ ちょっとカッコイイなの」

「…………糞野郎」

「あら？ 野郎に見えますの？ よービ少尉」

「人を卵みたいな呼び方するなー！」

「え～先程「好きに呼べ」って言ひたのは嘘なの？」

「…………もおいい！ 分かった。どの道右も左も分からないんだしやるだけの事はやってやる。それでいいんだろう？ ええ！？」

「了承」

「…………何処のお母さんだアンタは……」

結局、樟葉菜乃という女の説得（？）に負けて俺は軍隊の、しかも少尉として入隊する事になつた。ちなみに名前はその「居なくなつた」少尉と同じでは都合が悪いという事で俺の本名のままでいらしかつた。それでも・・・決して正しい名前で呼ばれなかつたが・・・。

「しかし、得体の知れない者を入れさせるなんてアンタ滅茶苦茶だ

な・・・

「あら？ 確かに正直良く分からぬ。でも、貴方は悪い人には見えないし、それにこれぐらいで動じてたら隊長なんて務まらないな」

「恐れ入ったよ全く。あ、そうだ。一応アンタって上官になるんだから敬語にした方がいいのか？」

「いいえ～？ ウチはそういう所はゆるゆるなの。形的には上下の差はあるけど、それ以前に私達は仲間なの。そこに遠慮は要らないの」

「ふむ。その意見は俺は好きだな。了解ナノ隊長。呼び名だけは形式でさせて貰うぜ？ でないと忘れそうだから」

「うん 改めましてようこそ！ 花肩へ！」

俺のその日の一日は、良く分からないままに一つの形に纏まった。

・・・これで良かったのだろうか？ やはり話を断つてどうにか生きていく術を探した方が良かつたんじゃないのか？ それか元の世界に戻る手立てを探すのも良いな・・・。

今更こんな事言つても空想だけが一人歩きするだけで不毛だが・・・。

俺はTAMという人型兵器だが何かのパイロットとして使われる

わけだ。

そういえば……。最初に会った少女はこの基地の関係者なんだよな……。此処にお世話になるんだし、名前ぐらい知つておいた方がいいかもしない。

そう思つて俺は慣れない基地の中をウロウロと歩くと目的の者をすぐに発見する。

廊下の窓から外を眺めている後姿を見つけた。

「よひ。ええと、今日からやつかいになるんだが……」

出来るだけ好意的に話しかけたつもりだった。小さな子だったし、あまり怖がらせても困るし……。いや、相手は俺より先輩の軍人か……。全然見えないけどな。

「…………」

「おいおい。一いつ匁一匁一瞬振り返つただけかよ。他に何か言えよ……。」

「俺、嫌われてるのか？」

「なあ、今日から仲間になるつてのこちよつと無理想過ぎやしないか？俺があ前に何かしたか？」

さう言つと少女は振り返つて首を左右に振る。違ひじりじり。

しかし、ここから言葉を口に出して聞えよ・・・。

「じゃあ、どうしてだ？ 話すのが苦手か？」

「…………違つ」

先程会つてからそんなに間が空いていないが、何故か久しぶりに声を聞いた気がする。 虹自身は可愛らしいんだが・・・。 如何せん無表情でとつつきも悪い。

なんだこの女・・・。

「せめて名前ぐらい教えてくれよ。 不便だろ？」

それでもなおも食い下がる俺つて結構しつっこいのか？

いや、別に口説いてくるわけでも無く、ただ名前を聞いているだけなんだから俺が正しい。 正義だ。 ジャステイスだ。

「…………め……い」

「ん？ めい？ 今何て言つたんだ？」

とても小さく少女が呟いたので俺はそんな2文字の単語しか聞き取れなかつた。 なんと言おうとしたんだ？

「…………名前」

「は？ ……メイつてのが名前なのか？」

「クン。

頷いた。どうも元々2文字しか喋つてなかつたらしい。全く・

・・扁桃腺が腫れた子供かコイツは・・・。

メイか・・・。中々良い名前じゃないか。可愛らしい。

「そりがそりが。俺は つておこつ！？ 俺にも名乗らせろー？」

「メイ」は名前を言つた事で満足したのか、それとも俺が無性に臭いからか分からないがすぐに踵を返して歩き出した。・・・念の溜に言つておくが別にワキガとかじやないぞ？ 今のは単なる比喩だ。本当に臭くなんて・・・

「・・・いや、死つな」

そういえば今日はまだ風呂にも入つていなかつた。此処は風呂はあるんだろうか？

「おーい！ 風呂とか何処だー！」

呼び止めて立ち止まる気配が無いのでとりあえず風呂の場所を聞こうとメイの背中に叫ぶ。すると、メイは立ち止まり俺を指差してきた。・・・いや、正確にはその後ろにあるんだろうが・・・お前はいいから喋れホントに。

「サンキューー！」

まあ、それでも教えられた事は確かなのでメイに感謝の言葉を送った。

俺の一曰くして終わり、次の朝を迎える・・・。

・・・というのが一番理想だったに違いない。

あまりこれ以上面倒な事が起きるのも疲れてくるからな。

もちろん、今日が始まった時点からそんな俺の心やかな平和の願いは粉碎されて粉々だったのだが・・・。

何故か長い一日になる予感がした。

【花肩 第一話 終わり 第2話に続く】

第一話「マジナムゾは廻る心」（後編）

作者のブログにて盤場キャラクターのイラストもあります。
良かったら寄ってこつてみて下さいね。

『モルゲン』（ブログ）

<http://9922.at.webrly.info/>

第2話「ACTIONで舞い踊れ体」（前書き）

俺はただの高校生だったわけだが・・・。だから軍隊なんてものは
まったく規定外なわけで・・・。
でも、この隊がある意味規定外なんだが・・・。
隊長は若い女だしな。

特に物語が加速することもないミリタリーストーリー 第2弾

第2話「ACTIONで舞い踊れ体」

湯に漬かる事を考え出した人というのは誰なのだろう。きっと
その人も疲れていたのかもしれない。

疲れた体を暖めつつ癒してくれる効果的な行為だと思つ。

「風呂」というものはそれだけ良いものだ。
それは分かつている。

だからと書いて、これはなんてエロゲ?

「ほりほら、ドンちゃん近いしお寄れ。 そんなに放れるとお姉さん悲しいぞー？」

「ドシカ合つてないない！ なんなんだアンタは！？」

風呂は「大浴場」と書かれた木の看板が掛かっていた。 その「大」という表現にピッタリと合つ規模の浴場で、単純に広さだけ見れば25mプール程の広さがあった。

そんな中にたつた一人しか今は入っていない。

俺と・・・見知らぬ女だけだ。

「たはは～。 香良洲 魅夜少尉とは私の事だよドンパ君

「少尉？ ああ、なら俺と一緒にじゃないか」

カラスミヤと名乗つた変な人は少尉らしい。 同じ階級だという

事は特に遠慮する必要は無いのかもしない。

いや、それより同じ湯船に女の子が入っているのが問題だ。

いいか？ こんな状況を羨ましいとか思うんじゃないぞ？ 見ず知らずの男女がお互い裸で居るというのがどれだけ気まずいか想像に易しというものだ。もちろん間違いがあるわけじゃないのだが、意識してしまって落ち着けるわけがない。

それに、この女は何を考えているのかわざから肘があたるぐら
いまで接近してくるんだぞ？

理性が爆発しても俺のせいぢゃないだろ。

湯船に漬かっているので流石に見えないがな。

「そう、一緒なのだよ。だからこの後火照った体を更に熱くさせ
ても問題無いと思わないかな？」

問題しか見つからない事を言いながら、彼女は俺の腕に最後の接
近を試みてきた。

その腕に「暴走ボタン」と書いてあるかもしないのに・・・。

・・・・・

・・・・・

・・・・・

ああ、なるほど。

「これは問題無い。」

「ん？」

ミヤといつ少女は多分生物学的には女なのだらう。だが、それが必ずしも絶対では無い事を俺は認識した。

俺の腕に当たる感触がなんというかペタつという感じだったからだ。それがふにいだつたら「ファイナルフュージョン」承認していたかもしれないが。

まあ、だからと重りて密着している事には変わりは無いわけだが。

俺はこんな事を言えば白い田で見られるかもしれないが「大きい方」が好きだ。

「・・・貴様・・・。 女慣れしているのかー？」

「まさか。 ミヤさんに慣れただけだ」

分かりやすこと言えば分かりやすいしな。 元気な子だけ、俺はつるべたには興味は無いだけだ。

「どういつ意味だー？ 会つてまだ間もないのに・・・。 まさか！？ B-L嗜好だったりするー？」

「ばかもん。 誰が男色趣味だ。 なんていうか、ミヤさんも警戒しなくて良い雰囲気だったからだな」

自分で言つてみてその台詞には納得してしまつたが。さつき会つたナノ隊長やメイとは氣色が違つが、敵意のような物を微塵に感じないからだ。むしろ人懐っこい。本当に此処は軍隊なのか？

「も？ ふむ・・・分からんが、分かつたぞ。それと「さん」は要らないよ。ミヤでいいわ。それにしても、そんなに信頼されると今夜夜這いに行つたらどうなるかちょっとワクワクしてくるなあ～」

「・・・女に見られたかつたらもう少し発言に気をつけて頂きたいもんだ」

「ん？ 何か言った？」

「いや、なんでも無いぞ。ミヤ」

呼び捨てでやると嬉しそう//ミヤは笑う。その顔は可愛らしいんだがなあ・・・。勿体無い。

そう思つても、何処かで相手を女だと認識していたのかもしれない。

・・・・・

気付けば熱膨張してたりする。・・・これは湯船から出る事は出来ないな・・・。

「じー

「？ うわっ！？ 何処見てるんだ！？」

「ん？ 釣り竿」

「竿とか言つたな！ ていつか見るな！」

「減るもんじゃないだしいいじゃないか。 あ、ある意味減るんだ
つけ？ 減らしてあげようか？」

「すまん。 日本語で喋つてくれ・・・」

「君の × を で × つて させてあげるつて言つたんだ。
こんな美少女にしてもらえるなんて幸せ物だなお前は「

「誰が具体的に言えと言つたんだ！？ 児童法とか完全無視だなお
い！？」

「児童法？ なんだそれは？」

キシリ・・・。

何かが壊れた音が俺の頭の中でした。

「法律無視上等って言いたいんだな？ まったく・・・流石軍人だ
な」

それだけ日常と離れているんだろう。 その時俺はさう思つてい
た。

だが、ミヤの田は別に「冗談とかを言つてゐる感じでは無く、本当に分かつていらない田だつた。

まさか

「違う。その児童法とか言つのを本当に知らないんだ。そんな法があるの？」

その言葉で俺の中の一つの簪が音を立てて崩れ去つた。

こんな状況に居ても心の何処かでこれは何かの芝居か何かで、他の者も演技をしているだけだと信じていた。だが、今の彼女の言葉でこれは本当に現実に起こつていて、俺はそこにたつた一人になつてしまつた事を自覚してしまつた。

もう、両親にも友達にも会えないのだと・・・。

それなのに俺に戦争の手伝いをやれつて？俺がそれで死んでも誰にも気に留めてくれる事の無いこの世界で？？

馬鹿らじしそぎる。

良くある物語で異世界に飛んでその世界の秩序と平和を守つたりする話があるが、そんな物語の主人公は寂しくなかつたのだろうか？自分の世界に帰れなくなつても良かつたのだろうか？それは物語の中だから疑問に思わないだけで、実際にそんな事になつて香氣に暮らせるとなんて正氣の沙汰じやない。

俺は一生こんなふざけた時代に生きていかないといけないのか・・・

・。

「んん~？ デリしたあ？ ママが恋しくなったか？」

そんな顔をしていたのか心配そうとこうより面白そりヤは顔を覗き込んできた。俺の視界にはそうされても彼女が映っていかつたが。

「…………そつか。まあ、恋しめるママが居るだけいいじゃないか。私達は全員居ないぞ？」

「…………え？」

声のトーンが少し低くなつた事に気が付いて、今の彼女の台詞を反芻する。全員居ない？ ……私達は？ ……ママが？

「菊池文史とかは知らないけど、TAM機乗者は全員戦争孤児つてやツだね。聞いて……無いやな。今日違う世界から来たばかりなんだし」

「TAM？ いや、それより俺の事聞いてるんだ？」

「狭い基地の中じゃもうみんなの噂だよ。大抵は「男の子がきた——」って色氣づいてるみたいだけど

「…………すまん。次から次へと聞きたい事ばかり増えていくが……此処はもしかして女ばっかりなのか？」

「整備員の下つ端トリオ以外はほぼ全員そうだよ。いいねえ~ハーレムハンドのフラグ立つてるよ~手当たり次第で産休続出させる

のは勘弁してくれよ君～

「するか！ つていう事は身近な問題として此処つて男子トイレも男子更衣室も無いんじゃないだろうな？ この浴場も入り口一つだつたし・・・」

「おおう頭の回転中々速いじゃない～お姉さん氣に入つたよおはつはつはつもちろんそんな物必要無いからね。男女の差なんて付いてるか付いてないかだけなんだから」

「・・・女性として恥じらいが無ければそうでしょうね」

笑いながら言つて胸を張るニヤを冷やかに見てやる。そんな事をするので湯船からその小振りな山が見えてしまつたが、想像通りだつた。

しかし、想像と現実とでは視覚的刺激が全く違うもので、流石に見てられないで目をそむけた。・・・まあ、それが間違いだつたのだが・・・。いや、俺は間違つてないハズだ。間違つてるのは・・・

「おお！？ 照れでますな～？ ビラしたどつした～見惚れたといふならばやぶさかでは無いぞ～？」

そう言つて湯船から立ち上がりつて何かポーズでも取つてゐる。（見てないので多分だが）
本当に勘弁してくれ・・・。

ガラガラ・・・

そんな事をしていると大浴場に誰か入ってきた。先程のミヤの話が本当ならかなり高い確率で女性のハズだ。これ以上状況を悪化させないでくれ神様。

「あつれえ？ ミヤ一人？」

多分この世界に居るのは邪神だ。

入ってきたのは・・・。男の子？ いや、タオルとか何かで前を隠してなかつたから分かつたが女の子だ。・・・この墓地には痴女しか居ないのか！？

小柄な少女だった。メイに会つた時にも思つたがこんな年端もいかない少女が軍に入つているというのはどうなんだ？ ついでに言えばどうしてそんなにツルペタぱっかりなんだ。

「お～せんちゃんいらっしゃ～い。今新人君と楽しくお話ししていきた所だつたのだよ。せんも仲間に入りなよ」

「新人さん？ あ～噂になつてゐる男の子だ～。うわーうわー始めてみたよ～」

「そりや今日来たばっかりなんだからそりでしじゅうこ

「あつそりだよね～あはは～」

・・・・・

言つておくが俺はロツコン趣味は無い。だが・・・「せん」と

呼ばれた少女が可愛いと思つてしまつた。なんといつが「女の子」つて感じがする。もちろんミヤが可愛くないわけじゃないが、ミヤの場合言動と行動が「おっさん」っぽくて損しているな。

「紹介するよ。この子は醍醐 千代曹長。今年で15歳になるんだつけ?」

「うん、15になつたばかりだよお よろしく～ええと～・・・お名前なんだつけえ?」

「チヨ? あれ? さつきせんつて言わなかつたつけ? ん? 愛称? ああ・・・。ああ、俺は」

名乗るつとした。ただ名前を名乗るつとしただけなのだ。それなのに、俺の頭に「デツキブラシが突き刺さつているのは何でんだ? デツキブラシは刺さる物じやないハズだ。いや、そんな事より、そんな物が刺さるほどの勢いで「ぶん投げた」のは誰だ!?

「と・・・殿方がどうして此処に居るんですか!」

顔を茹でたタコか海老のように赤くしてツインテールの少女が浴場の戸口に立つていた。水兵さんのような服を着ていた。水兵さんの服が分かりにくいならセーラー服だと言えばいいだろうか。硬い軍服では無いそんな姿はちょっとといいかもしねない。

「コイツがデツキブラシの犯人か。それにしても、なんだなんだ!?

「おーカグラも来たのね~。何で服着てるのだ君は? そんな物はちゃつちやと脱いで一緒に入ればいいのに」

「ミヤ！ 貴女はまたそんな事を言つて！ 大体男女が一緒に裸になつてなんて駄目に決まつてゐるでしょ、う！」

ミヤが一いや一やはて手招きするのを激しく激昂する一股髪女。何かさひせりやが言つてゐる事と違つ氣がするのだが……。

「そんな狭意に囚われてゐるといこの時代ではやつていけないよ？ 男だらうと女だらうと裸の付き合ひは大事じゃないか」

「貴女の世界で物事を話さないで！ 貴女は男だらうと女だらうと見境無しに襲つていいだけでしょうが！」

「あ～分かつた。カグラちゃんは嫉妬してるのでちゅね？ かわいいでちゅね～。後で慰めてあげるから大人しくベットに裸で待つているんだよ？」

「ぶつ・こ・ろ・す！」

「あはは～まあたはじまつたあ～」

何やら浴場の洗い場（？）で戦闘が始まつてしまつた。それを見て手を叩いて喜ぶせんちゃん。一応ミヤはタオルを体に巻きつけて戦つてくれたので（気まぐれか？）視覚的に危ない事は無かつたが、服のまま浴場で暴れるカグラと呼ばれたツインテール娘は湯気等を吸つて服が少し透けてきている。なんともいやらしい。

殴る蹴るの攻防をしながらカグラの短いスカートからチラチラと見えちゃいけないものが見えてしまう。なんというかある意味ミヤを応援したくなつてしまつた俺が居る。仕方ないだらう。俺も男だ。

それにしても、一人の攻防だけ見ていると、とても身体能力が高いのが分かつた。華麗に蹴り等の連続攻撃を仕掛けるカグラに、笑いながら捌くミヤ。カグラが怒りに任せて攻撃しているにして

も、それを難なく流すミヤには正直驚いた。傍目から見てカグラが劣っているわけでは無い。多分俺がミヤの代わりにやつたとする

と最初の数秒でKOされていただろう。

そんな重そうでそれでいてブレの無い攻撃を受けるというのは相当の手慣れだ。

改めて軍人だという彼女達を再認識した。

後、カグラの言動から別に俺の居た世界とは違う認識が万栄しているわけでは無いというのが分かった。男だろうと女だろうと恥じらいは無いといけないよな。うん。

「えいや！」

「きや！？」

防御に徹していたミヤが一転して攻撃に回った。だが、それは一瞬で、カグラを吹き飛ばすのに十分の威力があった。

吹っ飛んでいくカグラ。

マズイ！ いくらなんでもそのまま壁でも床でも激突したら危険だ！

ジャバーン！

俺は考えるより先にカグラを受け止めるために動いていた。カグラを受け止めて、そのまま浴槽の中に飛び込んでしまった。

「いたた・・・怪我は無いか？」

「あ・・・。ありがとうございます」

受け止められた瞬間は何が起こったのかわからなかつたのだろう。俺と目があつて助けられたといつ事に気が付いたよつで、顔を赤くして礼を言つてきた。

なんだろう。 やつを今まで強気にミヤと争っていた姿を見た後だから知らないが、妙に可愛く見えてしまった。 ・・・ 気が多いな俺・・・。

それにしても、このかぎりって娘は他の子よりなんどこいか
発育がいいな。

濡れてしまつた服から地肌が透けて見えていいのだが、よくぞそこまで育つて・・・。お父さん嬉しいぞ。

「あいたーーー？」

まるでマンガの様に平手打ちを食らってしまった。食らつていながら何だが、これが普通の女の子の反応だよな？ ミヤみみたいなのが変なだけなんだよな？

「ひ・・・ほ・・・ホントに変態―――いや―――！　おか
ーさ―――ん！」

やう思ひと嬉しくなつてしまつたのか、そんな顔が出ていたのか
もしれない。

・・・殴られて笑つてゐるのを見たらそりや気持ち悪いよな・・・

だが待てよ！？ そういう趣味があるわけじゃないんだが誤解するなつ！？

「おい！ 待てよ！ 今のは別に変な意味じゃ・・・」

「いや――――！」

・・・・・

弁解も聞かずに走つていつてしまつた・・・。

後で基地内に噂されるんだろうか・・・。 ああ、死にたい。

「あー。 カグラを視姦するなんてケダモノだねえドーチンは」

「お前のせいだろ？ それに俺はそんな地人みたいな名前じやないわ！」

「ミヤ・・・コイツのせいで俺は変態扱いになつてしまつたんだが・・・。 幸い俺は『たとえそう見えなくとも』女を殴るなんて事はしない。 本当は思いつきり殴りたいんだがな。 この変態を。

まあ、これ以上何かあつたらそのタガも外れてしまうかもしけないがな。

・・・・・ 今度ハリセンを用意するか。

「まあ、そんな事よりもミヤ。 TAMとか色々分からんんだが、そっちの説明はしてくれないのか？」

「えーそんな色氣の無い話は私バス。
ロトークで話してあげてもいいけど……」

「分かった。これ以上喋るな」

「ふー」

ミヤは咄てにならん。なら・・・

「ほえ?」

俺に見られて「?」を浮かべているせん。

・・・どうしてだろ? まだ話してもいないので、マイツは馬鹿だと感じてしまった。

なんというか、そのあどけない目を見ていると「頭の中はからつぽ」だと言っているかのように見えてしまつ・・・。失礼な話だが、そういうヤツはにじみ出るんだよな・・・馬鹿さが。

しかし、そうなると・・・。他に聞くやつが居ない。一瞬頭にメイの事が浮かんだがそいつも駄目だ。あの無口な奴を喋らせるのにどれだけ労力を使うか知れない。

・・・他に居ないのか? ナノ隊長に聞く・・・いや、彼女はなんとなくそういう話をするのは嫌だな。またあの冷たい目を見そうで怖い。さつきのカグラつて子は多分取り付く島も無いんだろうし・・・。

まあ、いずれ分かるだろ?

そう気楽に考えて俺はそろそろ湯浴みを終えようと脱衣場へと歩

いていく。

背中に「私の部屋は 部室だよー」ヒヒヤが言つてこるのが聞こえたがそれは全力で無視しておく。

脱衣場。

脱いだ服を入れる籠が数個あって、俺が服を入れている籠の両脇にミヤとセンの物であろう服が入っていた。

見るつもりは無かつたが、自然と田に入ってしまったのは俺の落ち度じゃないハズだ。

それを手にとつて匂いをかいだりとかするわけじゃないので別にそれはいいだろう。

だが、同じ場所のしかも両脇に衣服が入っているのになんとなく違和感を感じてしまった。

いや、違和感というより悪意か。センはまだか知らないが、ミヤは絶対にわざとだ。あのヤロウ・・・。

「・・・ヒヒ、あれ？」

ミヤの籠の隣にもう一つ中身の入った籠があつた。

さつき出て行つたカグラは別に脱いでいない。となると、誰か他に中に居た？

俺はその籠の前まで来ると、中身を覗いてみた。

中には茶色い軍服。それと女物の肌着と下着。何かを巻く布

が入っていた。

「・・・誰のか分からん」

今日来たばかりなのだし、服を見ただけで誰の物か分かるような知識はまだ無い。

それにしても・・・、女物の下着つて小さいんだなあ。こんな小さいのを履いてるのか・・・。

「・・・何をしているの?」

気が付くとバスタオルを体に巻いた少女が横に立っていた。真横に立つまで気付かないぐらい吟味していたわけじゃないぞ? 本當だ。それより、別に浴室から出てきたわけじゃないようだつたので、バスタオル姿で何かを取りに行つて、今戻ってきたという感じだった。

メイが。

「いや、誰のかと思つてみていただけだ。別にいやらしい気持ちじゃない」

手に下着を持ちながら言つには説得力の無い台詞だつただろう。だが、本当に何かやましい気持ちだったわけじゃないのだから仕方ないんだつて。むしろ、知識欲に負けてしまっただけで、それは正義だと言つても過言ではない。・・・いや、今回のジャステ

イスは負けそうだ。

「…………それは私の」

「そつか。すまんすまん」

出来るだけ自然に下着を元の籠に戻して愛想良く笑つてみる。
俺の笑顔はこの近所では中々定評があるんだぞ？ 間違つて蹴飛ばしてしまった八百屋の大根を折つた時だつてその威力は十分に發揮して半額で買うだけで済んだぐらいだからな。 ……その後他の野菜も買わされたが……。

それよりメイさん心なしか……怒つてません？

「…………変態」

ぐはっ！？

やつぱり怒つてる……。 それも普段無口な分その短い一言が
強力過ぎる。

「いや、待つてくれ！ 本当にそんなつもりじゃなかつたんだぞ
！？ おいー メイー！」

「…………氣安く呼ばないで」

「あ……」

拒絕の言葉だった。色々な暖かい人に会つて少し気が良くなつていたのかもしれない。今メイが言ったようにイキナリ呼び捨

てるような事は普通は無いだろつ。他の隊員が特別なのだ。彼女は間違つていない。

「……………分かつてる。貴方は悪いんじやない。た
だ……服を着て」

……………そついえば服をまだ着ていなかつた。

彼女は下着がどうこうを怒つていたわけじやなく、俺の姿に困つ
ていたのだ。

顔が赤いのも怒つているのではなく……恥ずかしいから？

俺も今更恥ずかしい。死んでお詫びしたいぐらいい。

下を向いてこつちを見なじよつにしてくれでいるので、急いで着
替えようと俺は籠に手を伸ばした。

籠から服を取り出そつとする、その籠の陰から何かが飛び出し
てきた。

水場が近いからあり得る事態だつたのだろつが……。空氣を
呼んで欲しかつたぞ俺は。

「あー。やつぱりこの時代でもコイツは生きてるんだな」

「？ ……」

黒い油虫。ゴキブリだ。

生憎叩く物が無いからどうしようも無いのだが、その虫を見た瞬間メイの動きが明らかに止まつた。俺も正直好きじゃない。

ソイツは何を思ったのかメイの足元を目掛けて走り出した。

「…………いや…………!?」

「うわっちょ！？ メイ！？」

初めて聞く彼女の大きな声。それが悲鳴とは皮肉なもんだ。
その反動で俺に抱きついてきているのはちょっと役得だぞ虫。
・意外にあるなコイツ・・・。

だが・・・、だがな？ その足をこいつに向けるとなぜかこいつを見だ！？

「どわああああ！？ いっちゃんな！」

「…………！」

メイは耳元で声にならない悲鳴を上げ続けるし、妙に強い力で抱きしつぶしてくるのでこちらは身動きが取れない。

万事休す

「何を騒いでいるんだお前等！」

その絶体絶命のピンチに救いの女神が現れた。

短髪の活潑そうな娘は俺達を一瞬見て、その足元に居る黒い悪魔を見て短く溜息をつくと、拳を握つて・・・

いや、待て。それは人としてどうかと思つぞ？しかも、見た所君は女の子だらう？ そんな事をすると君の手は・・・

「 チューストオ ！ ！」

気迫十分の声と共に、右拳を真っ直ぐ打ち据えた。距離的にまつたく届いていなかつたが「目に見えない何か」が黒い悪魔まで到達してそれを撃破する。

拳圧！？ 世紀末救世主かお前は・・・

「 おおう・・・。 助かつたぞ。 ええと・・・」

「ん？ 私は久々知 智亜子。 ちゃーこって呼んでくれていいいわよ。 階級は大尉だけどまあ、 それは気にしなくていいわ。 どつちみちナノ隊長だつて大佐なのに気にしちゃいないしね」

ちゃーこか。 憶えておこう。 それにしても大尉に大佐？ 階級つて少将の次は大尉じやなかつたのか・・・。 倭つてそうとう下つ端なのが？

「 ・・・・・ ありがとちゃー！」。 それに・・・ 貴方も

メイは黒い悪魔が居なくなつてやつと落ち着いたのか、ちゃーこと俺に礼を言つてきた。

「 んあ？ 俺？」

「コクン

頷いてくる。

俺は一緒に震えていただけなんだが……。まあ、礼を言われて悪い気がしないので別にいいけどな。

「あのさー。別にいいだけ年頃の男女が裸同然で抱き合つてるのはよろしくないんでない?」

「ちやーーーさん。そんな今見たような状況判断しないで頂きたい。どうしてこうなったかアンタ分かってるでしょうに。」「うん。

「…………うん。嫌だつて言つたのにこの人がムリヤリ……」

「メイさん! ? それは酷いんじゃないかい! ?」

「何を言つ出すんだこの女は! ? そんな冗談言つなんて、相当その男が気に入つたのね?」

笑つてるよこの大尉……。いやしかし、「冗談? なんでそんな事……。

メイを見ると何故か先程より赤い顔をしていて、目線を合わせてくれない。

「コイツは……とんでも無く可愛いんじゃないのか実は。

俺が見ていると、メイは脱衣所の隅の方まで歩いていきペタンと座り込んで頭を抱えた。

間違ひ無い。コイツはクーデレ資質だ。
普段クールなのに時
折見せる女らしい彼女。

なんだか惚れてしまいそうだ。

「ほらほら、メイが動かなくなっちゃうからせつねと着替えて出て行きなさいな。ええとドラン君？」

「この基地は人の名前を正確に言えるヤツはいないのか！？」

そう突っ込んでも多分無駄な気がしたが、一応突っ込んでおく。

なんにせよいつまでも裸ではアレなので、すぐに着替えて脱衣所を後にした。

卷之三

そういうのは、俺の寝る部屋とか何処なんだ？

まあ、今日来たばかりなんだから当たり前だが・・・。

鼻眼鏡をつけて白衣・・・いや、黒衣を来た女性だった。

なんというか、他の者よりは精神的に落ち着いている感じに美女

で、多分俺よりは年上だろ？。

「あ、こんにちわ」

別に打算も無く俺は挨拶した。別に美人だからといって挨拶したわけじゃないぞ？ この人がバスでもきっと元気良く挨拶したハズだ。

「おう！ 元気じゃなあ若いの。 お前が噂になつたる男じゃな？」

・・・・・・確かに年上に見えるが、そこまで年上には見えないんだぞ？ 見た目は二十そこらだと思つんだが・・・どうしてそんなおじいさんみたいな話し方なんだこの人？

「何やら湯浴みに行つたら違つ意味でのぼせてしまつてフランフランとするよくな感じじゃな？ ビラジや、これからおひつとウチへこんか？」

「え・・・あの・・・」

「別にとつて食つわけじゃないわい。 大方色々な事があつて混乱しどもんじやろ？ ワシが説明してやるからまあ来い」

「あ・・・恐れ入ります」

なんというか喋り方が板についていて声だけ聞いてると違和感がない。 別にからかっているわけではなくて、これが地なんだろ？。
「つ～ む勿体無い。」

色々と聞きたい事があるので、願つても無い事だ。

というわけで、俺の一日はまだまだ続くらしかった。

【花肩 第2話 終わり 第3話に続く】

第3話「SENSATIONで覚え忍べ記憶」（前書き）

「花屑」の入隊を簡単に済ませ、疲れたので俺は風呂に行つた。
そしたらとても変な隊員達に揉まれてしまう。香良洲 魅夜。醍醐
千代。天富印 香具羅。3人は俺と同じ隊員っぽいが・・・詳
しく聞けなかつた。 そうやって混乱していると長髪の黒衣の美女
が俺の前に現れた。 コイツは何者なんだ・・・。

第3話「SENSEATIONで耐え忍べ記憶」

『KIKUCHI medical affairs』

そんな看板が掛かっていた部屋に俺は通された。
めでいかるおふいす？・・・ああ、医務室か・・・。

部屋の中は医療関係特有の過酸化水素の匂いが充満していた。
オキシドール・・・消毒液だ。俺はあんまり好きじゃないが、慣
れたら大丈夫なものなのだろうか？

そう思つて部屋のデスクの椅子に腰掛ける菊池女史を見ると、こ
ちらの視線に気付いたように二口りと微笑んだ。・・・この菊池
という人、顔はいいんだが・・・。

「なんじゃ、そんなどこに突つ立つとらんで座つたらどうじや？
そこに丸椅子があるじゃろ」

これである。

何故か分からぬが菊池女史はこんな口調だつた。見た目は若く
知的な感じがするのに・・・外見とのギャップに若干戸惑いなが
ら、菊池女史が指差した丸椅子に座つた。

改めて室内を見渡すと、簡易ベットが2つ、デスクが一つ。薬品
などが入つた戸棚が1つ。それ以外にはドアがあつて、もう一つ
部屋があるようだ。そつちは少し大掛かりな手術でもするような
部屋なのか、ドアの上に赤いプレートがあつた。

・・・一人で手術するのか?

「「ホン。あ～・・・色々と聞きたこじや わいが、 キアリハリの質問に答えて貰おうか」

「質問？・・・ああ、「解」

色々と余所見してると菊池女史は一度咳払いをして注意を促して話しだした。

「お前さんは世界を飛んだよつじやが、その前の記憶はあるこじやな？」

「世界を・・・飛ぶ？」

「ああ、深く考えんでいい。今のこの世界とは違つ所から来たといつ直観があるんじや わ〜」

「ああ・・・。もうこいつ意味なら肯定だ。俺が知つている世界はこんなに寂れていな。此処は何処なんだ？ なんで廃墟ばっかりなんだ？」

「まだ、ひづりが質問しとるんじやせつかけじやのお・・・。まあ、その様子だと思つた通りのよつじやな。最初は困惑したじやる〜？」

「まあな・・・」

「の爺さん女、何か色々と知つてこるような口振りだな・・・。

「菊池さんは全部覗き出してもやめ」。

「菊池さん……でしたかね？ 貴女は状況の説明が出来るような口振りだが、あんた一体……」

「つぬれこのおつー、こちがしゃべつとると黙つていろだつがー。少しは黙つとかんかいつー！」

「はいっ……」

・・・・・

「どうやら話の主導権は向こうにあるらしい。ヒストリーな爺さん……いや、女は怖いな……。

「……お前さんが混乱しどるのはよく分かつじる。ワシも世界を飛んだ一人じゅからな」

「・・・・・」

「の人も？ 飛んだ？ 違う世界から来たって事か……。

俺は絶句して何も言えないと居ると、菊池女史は何かガツカリしたような顔をしてみせた。

「なんじゃつまらんの。もう少し驚くかと思つたの……。
お前さん意外に肝がすわつとるな」

「どうせ」

人を驚かす為に言つたんじゃないだろうな？ そんな疑惑が浮かんできそうだった。

「まあ、ワシから言える事は「元の世界」には戻れんよ。 それはワシが何度も試したからの」

「・・・・・」

「何故この世界に来てしまったのかまでは知らん。 ただ、ワシの時はこの世界に来て菊池女史と入れ替わってしまった」

「・・・なるほど。 たしか隊長もそんな事を言つてたな。 僕が此処へ来てしまったから 少尉つてのが消えてしまったんだって。 それじゃあ、元の人格は何処へ行つたんだ？」

「それはワシにも分からんよ。 ただ、言える事は元にあった人格は無くなってしまったんじやから、その者へ敬う心は忘れてはならん。 過失だとしても殺したようなもんじやからな」

「・・・・・まだ戦つてもいなのに殺人者か。 最低だな」

「ワシは元々医院で働いとつたんで菊池女史の技術をそのまま使えたんじやがな。 運のめぐり合わせかこの体の主も軍医だったそうじや」

「ふむ・・・・・」

「後、時間軸は多分未来じやの。 ワシが居た時代は平成12年じやが。 今はその29年後になるのよ」

「平成12年！？・・・俺は19年だ・・・。29年って事は俺からしたら22年後って事か・・・」

「ほひ？ 計算速いの。まあ、そういう事じや。ちゅうとやこしいが気にせん事じや。そんな事をわかつとつてもこの世界で何の特にもならんからな」

何か話を聞くと余計に混乱してしまったが、要はこう二つの事だ。

この世界と俺の知っている世界は違う。

菊池女史の言ひには「時間を飛んだ」という事らしい。それがパラレルワールドかどうか分からないが、つまりは時間旅行してしまったと言つ事だと考えて間違い無いだらう。

だつてさつきから聞いてこる言葉は「日本語」だし、菊池女史が言った年号は俺の知っている年号だったからだ。

だから、菊池女史が言つてているように「年後」というのは「未来の日本」だと言つてこると同義であつて、それがほんの数十年後の未来だと言つのだ。

どんだけファンタジーなんだくそつたれ！

「本当に・・・元の世界に戻る方法は無いのか？ ずっと俺はこの世界で生きていこゝのか？」

「それは現実的な意味かの？ それとも哲学的な意味かの？」

「？」

「ああ・・・、頭が良いと思つたがそつでも無いんじやな。 どつちこしひんな答えは「知らん」じゃ。 ワシはもつ諦めとる」

「――アンタはこの世界で死んでもいいってのかよー?」

「・・・いか若いの。 お前さんがどつ黙つてゐるか知らんが、 どんな世界であつても死ぬ時は死ぬんじや。 それが自分の納得いく死に場所になる事など普通の世界でも稀じやろう」

「やうじやない! 僕はやうこいつ事を言つてこるじやない!」

「やう熱うなるな。 ワシが悪かつた。 やうと意地悪したくなつただけじゃ。 混乱させてすまんの。 こいが、 良く聞けえ。 お前さんやうきから元の世界がどつとか言つておつたが・・・」

「な・・・なんだよ・・・」

菊池女史の眼鏡が光つた様な気がした。 そこから何かプラスチ的な者が放射されるのかと思つたが、 女子は眼鏡を指で直しただけで、 ただ、 眼光を鋭くさせただけだつた。 整つた顔立ちの彼女がそういう顔をすると威圧感と同時に恐怖に近い感じがした。

「甘えるなつ! 男じやろうが! お前さんは今この場に居る。 それが全てじやろうが!」

「――」

菊池女史がその姿では想像できない程の声量で怒声をあげる。

それは正直怖かつたが、その恐怖よりも、その後に何か清々しい気持ちが溢れ出てきた。

そうだ。何をウジウジ女々しい事を言つていいんだ俺は・・・。

菊池文史に言われるまでも無く、俺はこの世界に来て混乱していた。だが、それを悩んでも解決策は何も無いのだから意味が無い。それより、これからどうやって生きていくか考える方がどれだけ建設的か・・・。今までに知らない道になつたからと言つて逆走するレーサーのようなものだ。馬鹿馬鹿しい。

人は前にしか道が無い。

だから、進むしかないんだ。しっかりと前を向いて・・・。

振り返つてみるのはもつと後でもいいだろ? 俺。

パーン!

俺は自分で両頬を思いつり引きっぱたいた。その音が医務室に響く・・・。

「もう、大丈夫だ」

俺は痛む頬を押さえもせずに菊池文史に向き直った。

「おう! 男の顔になつたのあ 惣れそうじやぞ?」

菊池文史はそう言つて本当に田を薄めて俺を見てくる。

俺はやつられて照れるわけでも、口説くわけでも無い。ただ、菊池女史の瞳を見詰め、その視線に意思があるかのよつて語る。「俺は大丈夫です」と。

何か菊池女史と「男同士の友情」が芽生えた気がした。

俺が思うに、菊池女史の前の世界での姿は医院の院長爺さんが何かなのだと思った。

だから、それぐらいの高齢の爺さんにとっては、俺のよつな若者は教え甲斐がある生徒みたいなものなのだつ。

俺はその教えに応えた。そして、同時に菊池女史の信頼を得たんだと思う。俺はなんだかそう思つと嬉しくなつた。菊池女史もその目を見てこると同じ気持ちなんだと思つ。

やつ思つと、菊池「女史」なんて言つたら失礼か？ やはり此処はもつと違うよくな・・・男らしい呼び方をした方がいいんじやないだろ？

「それにしても、お前さん近頃の若いもんにしては中々見所があるのよ」

「あ、いや、ありがとつ」わざとせめぐ

つい敬語になつてしまつた。まあ、敬語といつのは相手を敬う時に使うんだから正しい使い方か・・・。

「なんじや？ 急にかしこまりおつて？ 別にそこまで気を張る事も無いんじやぞ。同じ同郷の仲間のよつなもんじやからのワシクは

「ありがとう、いや、サンキュー」

「うんうん。お前さんはワシの口調についても何も言わんかったしな。他のヤツラはオカシイとか言つがの。ワシは生まれも育ちも女じやが、女じやからと言つて女言葉になる必要など無いじやるうが？」

「え・・・・・・・そ・・・・・あ、うん。その通りだな！」

一瞬素頓狂な声を上げそうになつたが、なんとか堪えた。幸い怪しまれなかつたようで、菊池女史は笑顔のままだつた。

危ない・・・。さつきは元は男だと思つていたが違つらしいな・・・。しかもそれについてはポリシーがあるっぽいから「口調」については禁句だつたらしい。・・・・ナイス判断、俺。・・・もちろん成り行きだが。

「やうかそつか分かつてくれるか！　お前さんホントにいい男じやのう　よしよし。何でも聞くがいい。先程までは話すつもりは無かつたのじやが何でも教えてやるぞ」

何か好感度が大幅にUPしたようだな・・・。口は災いの元。逆に喋りすぎなければ好転することもあるんだな・・・。

「あ、じゃあスリーサイズを」

盛り上がつたのでつい「冗談を言つてしまつた。もううん本当に聞きたいわけじゃないが・・・。本当だぞ？」

「なんじゃ？ そんなものが知りたいのか？ まったく若いのぉ～

・・・・・

顔は笑っているが・・・目が笑っていないんだが・・・。上げた好感度をまた一気に下げてしまったようだ。

・・・この際、そのまま押し切らうか・・・。よし、やつあるか。

「いや、菊池女史があまりに美人でつい・・・

・・・口説いてどうするよ俺！？

「ば・・・馬鹿もんが！ 年上をからかうでないわっ！」

顔を赤くして怒る菊池女史。・・・爺さん女・・・ありかもしない。照れながら怒っているのが可愛らしい。

まあ、とりあえずやつとのマイナスポイントは挽回しただらうからこれぐらじこじこ。

「あ・・・それでは菊池女史。TAMとかについてなんだが・・

・

「うん！？ あ、ああ・・・。ん・・・「タム」の事じゃな。まだ実物を見てないんじゃろ？ それを見ながら説明しようかの」

急に話題を変えたのに驚いたのか一瞬妙に変な声を上げてなかつたか今？

「あ、はい。お願ひします」

なんだか分からぬが、現物を見ながら説明しないと面倒な物なのかもしない。TAM・・・その機乗者として選ばれた俺。

TAM - 06。

その後、俺は医務室から近くにあるTAM格納庫に連れて行かれ、その「TAM」を眼下に確認した。

それが人型の兵器だとちらつと聞いたが・・・。

昔見た事のあるアニメとかで出てくるような物にしては小さい。ああ・・・、そういえば、大体それぐらいの大きさの警察機構のロボットが出てくるアニメが昔あつたな・・・。

「コイツはTAM - 06オニコリ。TAM - 01ヒメコリの兄弟機じゃな。まあ、他のTAMも兄弟機みたいなもんじゃが、コイツは特別なんじゃ」

そのTAM - 06オニコリの足をポンポンと叩きながら空いた方の手でTAM - 01ヒメコリを指差す。オニコリは黒を基調としたカラーリングで、ヒメコリは薄いピンク地のカラーリングだった。形状はほぼ同じような形をしていたが、オニコリの方は機体の前方に8つぐらいの穴が開いていた。

「あの穴からビームでも出るんすか?」

「ああ、胸の辺りから並んでいる穴じゃな? あれは・・・まあ、そうじやな。ビームみたいなもんじゃ。攻撃用じゃないがの」

「？ 防御用シールドが展開？」

「ん・・・。当たらずも遠からずじや。その辺りの詳細については今度芽衣に聞くが良い。彼奴の方が詳しいからの」

ふうん。芽衣が？

確かに何か勉強家っぽいイメージがあつたが・・・

「芽衣は凄いんじやぞ？あの年で銃の組み立ては勿論、TAMの基本設計までこなしたんじやからな」

「へえ～凄いんだ」

なんとなく凄いんだといつのは女史の言い方で分かるのだが、それがどれだけの物か今ひとつピンとこなかつた。・・・車の設計するのと同じぐらいか？

「お、噂をすれば・・・じや。後は芽衣に聞くといいじゃひ。じゃあ頑張れよ若いの」

「え？ ああ、分かつた。期待に応えられるよう出来る限りやるよ」

女史の言つとおり格納庫の入り口に芽衣が立つていた。女史はそれを一瞥してから俺に向かつて親指を立ててきた。それに俺も親指を立てて応える。すると女史はまた医務室の時と同じように嬉しそうな顔をしてくれた。

「は？」

そう言つて女史は格納庫の入り口から振り返らずに出て行つた。

・・・・・

暗号が何かだらうか？

・・・と、とぼけてみる。何故か知らないが血肉が踊りそうだつた。

「お～い芽衣～！」

上氣しだした「何か」を抑えるようにしながら俺は芽衣を大声で呼んだ。

それに「ゴクン」と頷いてトトトと芽衣が駆けて来る。

・・・

その顔は何故かしかめつ面だった。

俺の前まで来ると、俺の目をじっと睨んでくる芽衣。

「・・・・・なんだよ？」

「・・・・・呼び捨てないでつて言つた」

「あ・・・すまん」

やういえばそんな事を言つてたな・・・。すっかり忘れていた
が・・・。

さつきの風田場でちやーこ（だつたか？）が言つてた「氣に入ら
れている」は嘘じやないか？

どうも距離感を感じてしまつんだが・・・。

「・・・・・何？」

おつと。知らず知らず見詰めていたらしい。小首を傾げて訝し
がつている。

「いや、なんでもない。といふで、このTAM・・・タムだつた
か？ これつてなんなんだ？」

「・・・・・technical automata。技術的
自動からくじ人形・・・」

・・・・・どつちかと言えばmechanical（機械的）じゃな
いのか？ まあ、そこの所の名称はどうでもいいが・・・。

「人を・・・殺す道具」

「・・・・・」

兵器だから当たり前の事だ。

どんな武器でも、それは人を傷つける為に開発され、そして大量の血を吸いながらまたより人を「殺しやすく」するために技術を改革させていく。

俺の時代でも世界の何処かでずっと続けられていた事だ。 どんなエゴをもっていたとしても、その行為 자체はいつの時代も変わらない。

兵器によつて死ぬ人が居て、その兵器によつて生き続ける人が居て・・・兵器によつて滅んでいく。

そんな退廃的な物でしか無い物を何故人は求め続けるのだろう。

一番最初に兵器を作ろうと思った人はきっと狂っていたのかもしれない。

ただ、それを止める事が出来なくて、作り続けていたのかかもしれない。

この世界が壊れてしまつたのももしかしたら、そんな人を止める事が出来なかつたからなのかもしけれない。

だが・・・その兵器を使う者の大半はそんな事情は知つたこつちや無い。

ただ明日を生き延びるために・・・、しかしを傷つけようとする者達を倒すしかない。

それが自分の拳で殴つてゐるわけでないこんな馬鹿げた兵器でも・・・その罪は同じであるハズなのに・・・。

「なあ、芽衣」

「…………」

呼びかけるが答えない。まあ、また呼び捨てにしてしまったのだが、そんな事はどうでもいい。それより聞いてみたかった。

「芽衣は」の兵器で……人を……殺してしまった事には抵抗は無いのか？」

「…………」

相手は軍人だ。そんな事を聞かれても鼻で笑われてしまうのだと思った。

だが……芽衣は違った。

「…………嫌」

「…………そつか」

その短い一言で俺は安心した。

芽衣のような軍人でもちゃんと罪悪感があるらしい。ただの殺戮人形じゃない。

それが分かつただけで十分だった。

「そう思っていても……やらないといけないんだよな？」

「…………」

芽衣は答えない。頷きもしなかった。

だが、それが答えであるかのよつこ。。。

うん。 そうだな。 何も軍人だからって。。。

「芽衣。 お願いがあるんだが・・・」

「・・・・・・・・うん」

「・・・相手を傷付けずに・・・なんていうか無傷で撤退せれる方法は無いか?」

「...」

「ん? どうした芽衣?」

「・・・・・・」

「芽衣?」

「・・・・・・」

「芽衣?? め・・・うわっ!/? なんで泣いんだよお前!/? 俺何か悪い事言っちゃったか!/? なあおい!/?」

その後、芽衣は何故か泣き止まなかつた。

ずっと声を殺して泣き続けた・・・。

俺はなんとなく芽衣の頭を撫でてやったくなつた。

それから・・・・・

「俺達」の日々が始まった。

第4話「INITIATIONは終わりを告げる夢」（前書き）

俺は一つ決めた事がある。決して悪戯に人を殺さない。それは軍人としてはあり得ない思想だったのだろうが、それに芽衣は同意してくれた。

俺達の日々は始まった。

第4話「INVITATIONは終わりを告げる夢」

人の良心とはどういったものだろう。

哲学的な意味では無く直接的な意味であるわけだが、善悪がどうとかいう問題で個人もしくはそれに準ずる人達の価値観に相当する。

少し喻え話をすれば服を着ない人がいて、多数の者がそれは変だと口にする。しかし、少数の者が「それが正当」だと答えたとする。それは「異常」であり、普通では無い。それなのにそんな意見を「絶対的な力」で押し込めてしまう事もあつたりする。では、そこに良心があるとすると人々の答えはどうだろうか？

答えは簡単である。『どちらが自分にとつて納得いくか』である。納得いかなければそれは「良心」には成り得ない。

さて、どうしてこんな事を言つのかと言えば、俺が考えて居るのは「少數の意見」であるのだ。

まあ簡単に言えばそれは「背徳行為」だったのかもしれない。

ただ、それは「軍にとつての」であり、俺個人としては何の罪悪感も無い。

普通の人間ならば普通に考え方小さくてとても幼稚な抵抗だ。

カツカツカツ・・・

黒板に白いチョークが走る。

それをしてているのは芽衣。そしてさせているのは俺。

たた一人だけの特別個人授業だ。もつとも、芽衣はいつもの軍服だし、俺は支給もされてないので単なる普段着だが・・・。

なんとなく深夜のミーティング室でやるのはちょっとだけ・・・本当に少しだけ後ろめたいといふかなんといふかなんといふか・・・。

だが、白毬堂々とやるわけにはいかない。

さて、俺達が何をやっているかといふと・・・

「TAMの起動时限には数種類あり、内部電源による緊急起動と周囲の気質による動力変換を実行する事による間接起動があります・・・
・そしてー」

普段無口な奴が流暢に喋るというドリームな状況だったが、遊んでいるわけではない。

徹底的にTAMの基本構造を教えて貰っているのだ。

俺は昨日まで普通の高校生だった。だからそんな玩具・・・いや、兵器の使い方など分かるはずも無い。

それらを教えて貰い効率良く動かせるようになるためなのだ。

効率良く・・・相手を無力化させる方法というわけだ。

芽衣曰く、技術も大切だが、このような基本構造を知つておかないと間違つて誘爆してしまふ恐れがあるからだつた。高性能で高出力を叩き出すようなロボットだ。もし肩等を打ち抜いたりしても、その当たり所が悪いと爆発してしまふかもしれない。だからこそ知つておかないと云ふのだ。

それで夜間授業・・・俺は土方の兄ちゃんか？

それにしても、芽衣の説明は分かりやすかつた。人にわかるようく説明するには人の3倍理解していないと聞いた事があるが、彼女も同じ様に頭を悩ませたのだろうか？ どうも、この娘の場合はちょっと違う気がする。

最初から知つているかのように見えた。

それは俺の直感だつたが、そのぐらい無駄の無い説明だつたという事だ。

ガラガラ・・・。

そうしていると、ミーティング室の扉が開かれた。

隊長だ。

「じーーーーミーティング室の無断使用は駄目なの〜。・・・あら？」
ドリモグ少尉？」

「俺は土の子かつ！？ 隊長俺の名前本当に覚えますか？」

「勿論なの」

とつても素敵な笑顔だった。

・・・・・この女めちゃくちゃ殴りてえ・・・・・。

「それにしても、こんな夜中に・・・TEAMの基本構造？ それなら明日からゆづくり説明しようと思つてたの。 動力系の説明だとかはまずは要らないと思つなの芽衣」

黒板を見て菜乃隊長は芽衣を嗜めた。 こんな夜中に、しかも初日からする事無いでしょ？ と言つた視線だった。 そんな目で見られて芽衣は少し小さくなつていた。

「す、すみません！ 僕が無理言つて教えてもらつてたんだ！ 芽衣は付き合つてくれただけなんだよ」

「あら？ 張り切るのはいい事だけど無理は禁物なの。 私は別に咎めているわけじゃないの。 こんな事をするなら明日の昼間にすれば良いって事なの」

それはとても柔らかな笑みだった。 昼間に見たあの冷笑を浮かべる姿が微塵も感じられなかつた。 あれは本当にこの隊長だったのかと疑う程に。

「それにしても、少尉はいつの間に芽衣と仲良しさんになつたの？ こんな夜中に一人つきりだなんて・・・さやーーアツアツなの」

・・・駄目だ。この姿からは想像が出来ん・・・。こんなのはほんとした隊長だつたんだなこの人・・・。

「・・・・・違つ・・・」

芽衣は困った顔で呟いていた。

「芽衣はウチの大事な子なんですからいけない事しちゃ駄目なのよ
少尉?」

「・・・・・だから違つ・・・」

・・・いや、芽衣よ。小さくて聞こえないから・・・。

「いやいやいや。隊長、そういう事は一切無いから誤解しないで
頂きたい。俺は純粋にTAMの事を習いたいだけなんだ」

純粋かどうかは知らないが、やましい気持ちじゃない事は確かだ。
上手くTAMを扱えなければ、俺は簡単に人殺しになってしまふ
から。・・・まあ、この体に居る時点ですでに人殺しだつたんだ
つけ？それはとりあえずノーカウントにしておくとしてだ。

「ふうん？それだつたら整備員を呼んできましょつか？彼等な
ら詳しい説明が出来るハズなの」

俺の言つた事の真意は分からぬなりに、隊長はそんな事を言つ
てくれた。

「いえいえ。まだ基本を教えてもらつている段階なんで、そこま

でして貰わなくとも大丈夫。 ありがとう隊長

「んん~ 残念。 私も何か役に立ちたいなの~」

本当に残念そうに肩を落とす隊長。 . . . 」の入ってこんなに人懐っこい性格だったのか?

くいくいっ。

芽衣が俺の服の袖を引っ張っていた。頭だけそちらに向けると隊長に聞こえないぐらいに小さな声で彼女は囁いた。

「 サツキは皆が見てたから

「 そつか。 隊長つて大変なんだな」

俺にはわからなかつたが、隊長と話をしていた所を他の者が見ていたらしい。 そんな体面の為に厳しくしなくてはならないという立場の彼女。 本当は優しくて暖かい人のようなのに . . . ちょっと悲しいな。

「でも、当分作戦も無いから焦る必要は無いな。 ジュン君」

「!?

「?」

また菜乃隊長が俺の名前を「正確ではない呼び方」をした。 ただ、その呼び名はどうちかと言えば「愛称」であり、いつもやつて呼ばれるには恥ずかしい呼ばれ方だった。

隣で芽衣が分からぬよう顔をして首をかしげているが。・・・
・「イツも俺の名前をちゃんと覚えてないみたいだな・・・。

「・・・その呼び方はやめてください隊長・・・」

「あい? ミツヒなの?」

「年上irkの名前で呼ばれるのはよつと・・・」

「恥ずかしい?」

やつ言つて一いち口りと笑つ隊長。・・・「ザビだ」の女・・・。
やつぱり性根が悪いぞ芽衣・・・。

「まあ、そんな事よりも寝てしまいなさいな。こんな時間に
お勉強してたつて言つても明日蹲になつてしまつかもしないな。
軍としての規律と体面もあるし、あまつじつ独断はやめた方
がいいと思つの」

「はあ・・・」

菜乃隊長はワインクしながら片手を顔の前で掲げてきた。「こ
めんだけどお願ひ」という顔だ。腐つても軍隊だ。規律には厳
しいのだらう。

「Jは彼女の顔を立てるべきか・・・。

「分かりました。今度からもう少し早めの時間にって事で・・・。
芽衣もそれでいいか?」

「…………了解しました。少尉」

虚ひな田で芽衣は俺の言葉に応えてきた。…………表情が無い。

俺達は菜乃隊長に促されるまま深夜の勉強会を解散した。

元々どっちかといえば無表情なのだが、芽衣の…………その顔が後から引っ掛けた。

「そういえば、俺が寝る場所って何処なんだ？」

芽衣とはわかれ、菜乃隊長と連れ添つて歩きながら聞いてみた。

「…………うへん…………」

「菜乃隊長？」

すぐに答えが返つてくると思ったのだが、菜乃隊長は何か考え込んでしまった。

何か問題があるのか??

「ええと・・・少尉はもつゞヤ・・・ええと、香良洲少尉には会つたなの？」

「え？ ああ・・・会いましたよ。 それが何か？」

「ああ・・・やつぱり・・・。 だったら・・・・ええと、ウチに来る？」

「は？」

「あ・・・えとね？ あのね？ 少尉の部屋を用意しようつと思つたら実は間に合わなかつたなの。 それで・・・他の部屋に合ひ部屋つて事になつてしまふの」

「うええつ！？ なんすかそれ！？」

「あ～う～夜中なんだから大きな声ださないでなのー。 危険なのー。」

「危険？？ 此処つて夜中に猛獸でも出るんですか？」

「あ・・・いや、あの・・・えへつ」

「えへつ つて可愛く笑つても誤魔化せないぞ？ まつたく・・・隊長何が隠してゐるな？」

「・・・私と一緒にるのがそんなに嫌なの？ グスングスン」

・・・・・

思いつきり泣き真似なのが・・・。 なんと卑怯な・・・。

俺は血濡れじゃないが女の子のお涙という物には滅法弱い。 といふ弱い。

何か可哀相になつてしまつてなんでも言ひ事を聞いてしまつたつになつてしまつ。

・・・まあ、勿論それは菜乃隊長が色々と標準以上なのも原因だ。

「」の基地の隊員つて・・・ブサイク居ないのな・・・。

今頃気付いたが、ホントなんとうギャルゲーだよコレ・・・。

まあゲームと違う所は、これが現実で、戦争中で、もしかしたら戦死なんて事もあり得る状況だつて事だが・・・。

それを差し引いても中々美味しい状況なかもしれない。

「・・・・・あ・・・・そう思つたけぢやつぱり私は遠慮しておくなの。 部屋は決まつてゐるみたいなの」

「・・・へ? あれ? どういつ事?」

考え方をしている間に菜乃隊長が何故か青い顔をして後ずさつている所だった。

「どうしたんだ? 顔色が悪いぞ隊長?」

「ええっ! そ・・そ・・そそそんな事は無いののの・・・

・

・・・・・何だか寒さに震える子犬のよつに震えながら言つてい
る。説得力が無い。なんだろう? 寒いのか? 今日はそんな事
は無いぐらい暖かい日だと思つが・・・。

「と、ととにかく! 」の道をまつすぐ行けばいいな! じゃあ
サラバなの〜〜

なんだ?? 変な隊長だな・・・。

何か急いで自分の部屋に逃げていつているよつに見えたんだが・・
・。気のせいいか?

隊長に言われたよつに基地の廊下を真つ直ぐ行くと、突き当たり
に一つ部屋があった。「MEI, ROOM」と書いてあった。

・・・メイるーむ?

・・・・・

マジか?

「・・・・・少尉。 いんばんわ」

ドアの前まで来ると、足音でも感じたのかキイッとすぐドアが
開かれた。芽衣が居た。

マジらじー。

「とかさつき会つたばかりだろつ！？　とかさつき分かれ一本道で何時追い抜いた！？　バケモノかこいつは・・・。

「とか、私室に居ても軍服なのか」コイツは・・・。

「・・・・・入つて」

「いや・・・・俺は・・・」

「・・・・知つてる。少尉は自分の部屋に何があるか知らない。だから此処に来た」

「？　俺の部屋に何があるのか？」

「それは知らない方がいい。早く入つて。見つかる」

何か分からぬが菜乃隊長といい、芽衣といい何かに怯えている。

此処は彼女達の基地であり、安全なハズなのに・・・。

本当に夜中に何か異質な者でも居るんだろうか？

いや、良く考えたら今は戦時だ。何処に居ても安全だと言えな
い。

この基地のセキュリティシステムがどんなものか知らないが、それすら突破する手段は多分いくらもあるんだろう。所詮は人の手で創った物は人の手でどうにかなるものだ。

そうなると、今日入隊したばかりの一般人に等しい俺など、一人で居たら明日の明朝には冷たくなつてはいるかも知れない・・・。

「ああ、すまないが失礼するぞ」

俺は自分自身の保身と、他の者へ迷惑を掛けない為に今晚の所は芽衣に守られる事にした。

男の癖に情けないとか言わないよな？　これは当然の選択なんだから。

部屋の中に入ると、なんといつか無機質な部屋だった。

仮にも女の子の部屋だから、ベットにクマのぬいぐるみや、テーブルに化粧品なんかが乱列しているのかと思ったが・・・。

何も無かった。

そこには簡単な白いシーツが掛かっているパイプベットと、何かの専門書等が綺麗に並べられた木製の机があるだけだった。

私物は・・・ほぼ無いに等しい。

〔軍人といつのはこんなもんか？〕

「・・・・・あまりジロジロ見ないで。 少尉」

「あ、いや・・・すまん。人の部屋に入るのは初めてでね。あ～女の子の部屋ね」

言つてしまつてからハツとする。言われた途端に芽衣は明らかに表情を暗くしてしまつたからだ。

「・・・・・・女の子っぽくなくて『めんなさ』」

「い、いや！ そうじゃなくて！ ええと・・・ほりつー人それぞれだし別にそんなに気にする事は・・・」

急いで取り繕うが、芽衣は俺の一言一言にどんどん暗くなつていく・・・。

纖細過敏なやつの娘・・・。

何か気の効いた台詞は無いものか・・・。

そう思つていると、芽衣は急に顔を上げた。なんと、その顔は普段通りの顔になつっていた。

「失礼しました。少尉。気にせずじゅつへりお休みください。此処は安全です」

「――！ ・・・・・分かった。じゃあ、休ませて貰うよ。芽衣・・・。そういうえば階級は？」

芽衣の表情は色が無かつた。先程まで少しでも好意的な印象だったと思つたが、それが氣のせいだと思つてしまつ程冷たい目をしていた。

物言いもハツキリとしている。

俺は・・・取り返しの付かない事を言ってしまったのかも知れない。

「軍曹です。少尉」

「分かった。では、改めて芽衣軍曹宜しく頼む」

「ハツー！」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

これが・・・・軍の中で生きるもの達にとつての普通の関係だ。

俺と芽衣は上司と部下である。

俺は確かに新参者だが、階級といつのはそれだけ絶対な物なのだ。

先程まで可憐らしい表情を見せていた少女を機械的に冷たくさせる事が出来る階級だ。

芽衣は俺にベットを譲つて自分は床で寝ると言い出した。

そんな事をさせたくないが、それが体面であり、規律であり、普通である。

芽衣は着ていた軍服を脱いで肌着だけになつた。

風呂場で魅夜が言つた「男女関係無く」といつのはあながち間違
いじゃない。

芽衣は脱いだ服をテーブルに綺麗にたたんでいた。

それが軍の本質であるのだから。

俺は少尉で、芽衣は軍曹。

芽衣は床の毛布を確かめてからそこへ横になつた。

階級によつて縛られる関係。

・・・だけど・・・。

静かに目を閉じる芽衣。

そんな物・・・欲しくない。

「軍曹。 一つお願いがある」

「なんでしょうか。 少尉」

床に毛布を引いて横にならうとしていた芽衣は、体を起こしてこちらを見た。そのままでは失礼かと思ったのかすぐに直立しあつと/orするのでそれを手で制した。

「そのままでいい。 いや、そのままは駄目だな。 芽衣、ここは部屋の主はお前だ。 僕はただ厄介になつている密みたいなもんだからな、その客が主人のベットを使つところのはこたえかどうかと思うのだが・・・」

「いえ、少尉。 それは当然の事です。 私は下級兵士であり、貴方は・・・」

「関係ない。 僕は男でお前は女だ。 それがどういう事が分かるか?」

「・・・・・ 分かりました。 少尉は私の体をお求めなのですね? 何分経験はありませんが、失礼します」

分かつてない。 なんて事を平然と言つんだこの娘は・・・。これにはちょっと頭にきたぞ。

「芽衣!」

俺は芽衣の頬を思いつきり殴つてやろうと手を振りかざした。 そうされても芽衣は俺が居るベットに上つてきていた。 そんな

肌着一枚で・・・・・ええいつ！』の馬鹿娘！

「…！」

「…？」

・・・・・俺は何をしているんだ？

殴ろうとしたハズなのに・・・・・俺の手・・・いや、両手は芽衣を抱きしめていた。

「・・・・・少尉。 やさしく・・・してください」

ほらみろ。 思いつきり勘違いしている。

それにしても・・・柔らかくて暖かいな・・・。 これが女の子か・・・。

つて違つ違う！ 一瞬そのまましぐずれそうになってしまったが、俺がしたいのはこういう事じゃない。 もう抱きしめてしまつたので、とりあえずこのまま喋ることにする。

「芽衣・・・。 いいか。 お前は軍人の前に一人の人間だ。 そして女の子だ。 俺が階級で上つてだけで、お前の方が先輩だろう？」

「それは・・・」

「黙つて聞けッ！」

ビクッ

耳元で怒鳴られて芽衣の体がビクッと震える。・・・何か苛めてこる気がしてきたが、これだけは言わなくてはならない。

「お前が軍の規律とか、そういうのを大事にするのは良く分かった。だけど、俺はそういうのは嫌だ。まあ、別に外でもってまでは言わないが、今はお前と俺しか居ないんだろ？　だったらそんなに懼まる必要は無いだろ？」「ひひ

「・・・・・」

「俺は間違つていいのか？」

「・・・・・」

芽衣は答えない。

「軍とか抜きに言つてくれ。お前はどういふんだ？」

「・・・・・」「めんなさい

それは答えでは無く、謝罪だった。何についてのかは分からないが、やはり答えになつていない。

「いや・・・やうじやなくてだな・・・」

「・・・・・・・・・・・少尉」

芽衣は虚ろな目で俺を見据えてきた。その目には若干の怒りの

ような物が見えた気がした。

「ん？ なんだ？」

「少尉は・・・どうして私の居場所を奪うのですか？」

「？居場所？ 何を言つているんだ？」

「此処は・・・花屑は私の居場所です。 私はこの場所でしか生きられません。 それを・・・奪つといつのですか少尉は」

「いや、奪つとかそういう問題じゃなくてだな人としてどうかって事を・・・」

「同義です。 私はこの場所で軍人としてでしか生きられません。 少尉は・・・軍人としての私を認めてくださらない。 ならば、私は此処にいる資格は無くなってしまつ。 少尉はそう言つているのです」

「・・・」

「・・・出過ぎた事を言つて申し訳御座いませんでした。

明日も早いのでそろそろ寝ましょう少尉

「・・・」

甘く見ていた。 芽衣の軍人志向は今日昨日始まつたわけでは無い。

そして、その立場という物も、彼女にとつて絶対であり、それ以外は何も価値が無いという事だ。

俺は何も言えずにただ布団に入る芽衣を見ている事しか出来なかつた。

無気力感に襲われながらも、俺も仕方なく布団へ入る。

・・・ん？

・・・・・・・・頭では納得したが、「コレはやつぱり間違つてゐるだろ！？」

「おい！？ やつぱりこれは不健全だろ！？　俺は床で寝るからなつ！？」

いくらなんでも一緒に布団に寝るなんて出来るわけがない。いや・・・正直その誘惑に負けそつだが・・・、俺は良識があるし、良心がある。だから、こんな事を許してしまつては駄目なんだ！

クイツ

俺はすぐ元に布団から這い出ようとすると、俺の服が掴まれていた。芽衣だ。

「・・・・・・芽衣。離せ」

「・・・・・・・・

聞こえていないのか離さない。

「・・・・・・芽衣。命令だ。はなせ

先程上下関係について話したばかりなので、これで離してくれるのはハズだと思った。

だが、芽衣の手は動かなかつた。

「…………」

「…………聞こえなかつたのか？」

「…………」

「…………仕方の無いヤツだな」

なんとも頑固なヤツだ。俺は根負けしてベットに舞い戻る。

俺は出来るだけ芽衣に触れないよう布団の中に入った。

これで密着なんてしたら理性が確実に飛ぶ。そつこねばさつき密着したか・・・。

頑張った俺。よくやつた俺。

布団に入つてから、やはり芽衣は無言のままだった。

身長差があつて芽衣は布団の中にすっぽり入つてしまつてこるので表情が見えないが・・・。

「まったく・・・。今日だけだぞ？こんな事をして明日噂になつても知らないからな俺は」

「・・・・・」

何か返答があるかと思つたが、芽衣は何も言つてこなかつた。

「・・・寝たのか？ まあ・・・俺も何か今日は疲れた・・・」

今日一 日色々あつた疲れがどつと来たようで、急に眠気が襲つてきた。

それにしても居場所か・・・。

さつき芽衣が言つた言葉が俺の頭の中で回つていた。

我知らずそんな考え事が声になつて出ていたが、他に誰にも見られていいわけではないので気にしなかつた。

「・・・居場所か・・・。俺の居場所は此処になるのか？ ・・・
まだ信じられないが・・・明日日が覚めたら家で寝てるなんて事は・
・・・無いだろうな。この疲れは本物だ。まつたく・・・。
今日出会つたコイツは色々難しいし、他のヤツも変なヤツばっか
りだし・・・。俺ってなんかバチでもあたつてゐるのか？ なあ、
芽衣。俺の居場所つて此処でいいのか？ 俺に何が出来るんだ？
俺なんかで本当にいいのか？ なあ、芽衣・・・。つてやつぱ
り寝てるか・・・。ブツブツ言つてないで本当に寝るか・・・」

喋つている間に起きてくる事を期待したが、芽衣は全く動かなかつた。それはそれであまり触れたりせずに助かるので良いんだがな。

俺はそのまま夢の中に落ちてこつた。

俺の一日は終わった。

第4話「HN>INITATIONは終わつを告ぐる夢」（後書き）

お疲れ様でした。このお話で一区切りとなります。
ここまでのお感想等ありましたら宜しくお願いします。
それによって次回の話が変化したり・・・するかもしません。
恐らく多分まあ適度にですが・・・
では、ありがとうございました。

第5話「汝歌うようて朝焼けを待ちたまつ」（前書き）

花肩での初日が終了した俺。とても疲れて悼んだと思つ。
・田が覚めたらこんな事になつてゐるなんて・・
そりや・

第5話「汝歌つよひて朝焼けを待ちたまひ」

皆は健康ぶりのよひに氣をつかへてゐるだりつか?

俺はまだ若いからと云つて、適当な生活習慣を過ごしてしまつのはどうかと思ひ。

何故ならそつこつ生活習慣は後になつて響いてくるからだ。

だから、俺は朝起きると軽く運動をするようにしてゐる。まあ、良くてジョギング程度だが。

そのジョギングも最初は嫌だが、続けていると、走らないと気持ち悪くなってしまうものだから不思議なもんだ。適度に体を動かす事はスタイル保持にも貢献すると思ひだ?

健康というのを考えたりする事は、実はあまり無かつたのだが、一度走り出したら止まらない。

結果的に「健康に気を使つてゐる事になつてゐる」わけだ。

だけどな?

俺はこんな健康法をしようと思つたつもりは無いんだぞ?

前置きが少し重くなつたが・・・。

「ぬうわあああんで全裸なんだあああああああつー?」

先に言つておいた。俺は別にノーパン健康法を実践したわけでは無い。完全に朝起きるとこんな状態になつていたんだ。道理で寒いとは思つたが・・・。

しかし、それきから・・・何か当たるんだが・・・。

「...ん...」

•
•
•
•
•
•
•
•

今のは俺の声じゃない！

女の声だつた・・・。

• • • •

までまでまでまで。
昨日俺は確か、芽衣の部屋で寝て……
成り行きで芽衣と一緒に布団に入ってしまって……って事
は……。

最低だ。

俺は寝惚けていたのかどうか分からぬが……。とんでも無い事をしてしまったのかもしれない。

……。あるいは、押し通すか……。

いや、良心がそんな事は出来ないと語つて居る。此處は

男として・・・責任を取るべきだ。

鹽にはビリの説話しうつ……。初田でこんな事をしてしまつた

んだ。〔冗談でもなく殺されるだらうな・・・。いや、もしかしたらこの世界では普通のことなのかもしれないし・・・。昨日芽衣があんな事を言い出したのもそれで納得がいく・・・。

いやいやいやいやいや。 クールになれ俺。 そんな事があるわけがない・・・。

と、とにかく誰かに見つかる前に服を・・・

「芽衣～朝なの～起きて～」

「ンンンンンン。

部屋のドアがノックされる。

「！？」

マズイ。 隊長の声だ。

こんな所を見つかつたら・・・おしまいだ。

言い逃れも出来ない。

「あれ～？ 芽衣～？ いないの～？」

返事が無い事に訝つて隊長が部屋のドアノブをガチャガチャと回す。

幸い鍵が掛かっていたようで、開かれることは無かつたが・・・。

相手は隊長だ。合鍵ぐらい持っているかも知れない。

「ん~?」

力チリ。

やはり鍵を持っていた。

ジーザス!

「芽衣? ・・・あら? 少尉だけ? 芽衣は?」

「あ、おはよ~! や~います。隊長。や・・・やあ?」

幸い布団の中に潜っているよつなので隊長からは俺一人に見えた
よつだ。

上半身裸（実は下半身もだが）の俺に若干目を背けているが、チ
ラチラと見てる。えつち~

・・・等と言つてゐる場合ではない。

何かのきまぐれで隊長が異変に気付かないとも限らない。 しかし
は早々に退場して頂こいつ。

「あ、あの隊長。俺着替えたいんでちよつと出て行って貰える?..

「あ、そつなの? じゃあ、ちよつとしたらまた呼びに来るな~」

「あい。」「了解」

大惨事回避。

「 というか、その盛り上がっているのはなんなの？」

「ぐはっ！ ぬかつたあ！？」

布団が不自然に盛り上がっていたのを目敏く隊長は発見した。
こんな事なら起き上がりて膝を立てておけばよかつた・・・。

「あー・・・・・少尉。 貴方昨日は服を脱いで寝ましたなの？」

「え？ いえ・・・・ 着てたけど・・・」

菜乃隊長は謎の質問をしてきた。咄嗟に正直に答えてしまつた
が、それを聞いて菜乃隊長は大袈裟に溜息をついて部屋に入つてき
た。

「ちょ・・・・隊長！？ ストップストップ！」

「『めんなさいな。 まさかこんな事になつてているとは・・・。
えいっ！』

「うわあああああああ！？ ・・・はい？」

隊長は俺の掛け布団を剥いでしまつた。その中には・・・赤い
髪の少女が下着姿で丸まつて寝ていた。

香良洲 魅夜さん17歳。

貴女は何故そんな所で寝ているのですか？

まあ、それはとりあえずおいといて、菜乃隊長がその魅夜では無く、俺の方を見ている事に気が付いた。・・・俺というか・・・まあ・・・「俺」なのだが・・・。

「あら、意外と・・・」

「意外となんだつ！？」

その「意外と」の後に続く台詞が非常に気になる所だつたが、俺はそれより彼女の手から掛け布団を引っ手繩ると、とりあえずそれを腰に巻いた。

「なんなんだ一体！？」芽衣はどうした！　おい、魅夜！　起きろ
つ！」

とりあえず幸せそうに寝ているこの馬鹿を起こすのが先決だ。体を揺さぶつてみるとことにした。

「ん・・・やだあ・・・らめえ・・・そんなにはげしくしゃ・・・

・・・

その日。俺は初めて人に殺意を覚えた。

寝惚けてやがるのがいいが、なんて事言つてるんだこいつは・・・

。

「少尉。　退いてなの・・・」

「ん？ うわああ！？」

菜乃隊長が妙に低い声で言つので彼女を見ると・・・なんとい
うか体全体からどす黒い霧のよつた物が出ていくよつた気がした。
その目は完全に据わっている。 そんな彼女に俺は正直ビビッて
しまった。

「・・・覚悟

「うわあい！」

菜乃隊長が呟いた瞬間、魅夜が飛び起きた。 ・・・狸寝入りだ
ったのか！？

！！

・・・・・

・・・・・

・・・・・

何が起こったのかわからなかつた。 一瞬何か光つたと思つたら、
足元にズタボロになつた魅夜が倒れていた。

「ああん・・・・・ 菜乃たいちょー 強引なんだからあ・・・ガクツ」

最後まで減らず口を叩きながら魅夜は力尽きた。

まあ、それはどうでもいいとして・・・。本当に一体何があったんだ？ なんでこんな事になつてているんだ？

「『めんなさい』なの。 私がもつと管理体制を強化していれば『んな事には・・・本当に『めんあさい』なの！』

「あ、いや・・・俺としては何がなにやひ・・・」

「『うなつてしまつたからには全部話すなの。 ええと、そこの魅夜は普段はとても優秀な子なの。 機械技術や情報技術はウチの隊では一番なぐらいに・・・。 でも、悪い所があるの』

「・・・・・・・。 なるほど、なんとなく察したが・・・」

「そうなの。 『の子見境無しに襲つちやうなの。 それで何人男子隊員が辞めていったか・・・』

なるほど。 全ての元凶は魅夜か・・・。 昨日俺が自分の部屋に案内されなかつたのはコレを見越してつて事だつたんだな・・・。

「にしても、男子隊員が辞めるほど酷かつたのか？ むしろ男だったら喜ぶような状況だらう？

俺は嫌だが・・・」

普通はどうだが知らないが、知らない間に裸に剥かれて既成事実なんて作られるのは俺は嫌だ。 [冗談抜きに魅夜が嫌いになりそうだなこれは・・・。

「そつなの。 でも、皆辞めてしまうの。 流石に問題だつたから今日は警戒したんだけど・・・」

「結局また、同じ事になつたと」

「うん。 本当にみんなわいなの少尉……」

申し訳なさそうに頭を下げる隊長。 僕も自分の不甲斐なさに申し訳ない……。

まさかこんな事があるとは思わなかつたし……。

・・・いや、まてよ？

・・・・・・・

・・・・・ふむ。 これは……。

あまり言いたくないが、なんともないようだつた。 ・・・特に何かが残つていたりしていい。

「いや、隊長。 こんな事を言つても信じて貰えるか分からぬが、俺は何も無いみたいだぞ？」

「え？ どうこう事なの？」

「いや・・・説明しにくんだが、ええと・・・使つたりしてないみたいだな」

「・・・・・少尉」

「仕方ないだろ？ 他に言い方があるなら教えてくれえ！？」

俺の説明を聞いて菜乃隊長は、なんといつかなんとも言えないような顔をして下さった。

「こんな事を言わした張本人をどうしてくれよっ・・・。

「分かったな。 後の処罰は少尉に任せることにする。 ただ・・・」

「了解。 ただ?」

「徹底的にやつちやつてくださいな」

「・・・イエス・サー」

隊長から初任務を下された。

任務の内容はこの変態をぶつとばす事。 以上。

隊長は「芽衣を探してくるなの。 セットと魅夜がどこかの部屋に移動させたと思うの」と言つて部屋を出て行つた。

俺はその背中を見送つてから服を探し出して着て、ズタボロの魅夜見下ろしながら「製作」を開始した。

・・・数分後ソレは完成する。
中々良い出来だった。

では、性能を試してみようか。

「おい、いつまで氣を失っている。起きる！」

スパコーン！

「ちうあーー？ つと、何するあるネ少尉！」

「やかましい！ 何処の中華人だお前は！」

出来上がった新兵器。名前は「対変態用強制教育型殴打機・パチキ1号君」だ。厚紙で出来た丈夫なボディに、その爽快な音を演出するフィルム。持つ部分にビニールテープで何重もまきつけてあるので握りやすく抜群の操作性を誇る兵器だ。

人はそれを「ハリセン」と呼ぶ。

昨日作ろうと思つてたがもう作る事になるとはな。

「お前！？ 昨日会つたばかりなのに・・・一晩流石に絆を深める
と違うのだねえ・・・しかも君だとは思わなかつたわ。 ああ・・・
・恐ろしい人・・・」

スパーク！

「恐ろしいのは貴様だつ！ 昨晩本当に何もしてないんだろうなつ

！？

第2撃を食らわせてやると、魅夜は何かフルフルと肩を震わせていた。

「うわ・・・強く殴りすぎたか？」

「に・・・一度もぶつた・・・親父にもぶたれたこと無いのにい！」

「人の話を聞けええっ！！ 大体お前親父居ないだろ？！」

「スペアアアーン！！

・・・「コイツの脳味噌はカニミソかっ！？」

「ううう・・・何度も殴らないでよおお。田代めちやうでしょ」

「

「何にだっ！？ それより人が聞いてる分かつてるかお前？！」

「でも・・・そんな貴方もス・キ」

・・・・・すいません菜乃隊長。 今日隊員が一人減つてしまふかも知れません。 撲殺で。

「でも、本当にそう思つてるのだよ。 今少尉は親父が居ないって言つたでしょ？ 普通だつたらそんなデリカシーの無い事言わないよねえ？」

「あん？ そんなもの気にしてるタマかお前が

「 ウフフ～ 本当に素敵 そつなのよ。こいつが気にして
ないっていうのに妙に心配したような顔されたら余計に腹が立つ
てこうのにね～」

「だ、だな」

何氣無く言つてしまつたのだが、結果オーライのようだつた。
魅夜の言つ通り親が居ないという事を気にする人は確かに居るだろ
うが、魅夜のように思つてゐる者も少なくないだろう。
俺は両親共に健在だが、なんとなくその気持ちは分かる気がした。

「おっしー 少尉には特別に私の知つてゐる事を教えてあげようで
はないか～」

「いや、お前やつぱり人の話聞いてなかつただろ・・・」

一番教えて欲しい事を言わずに何を言い出すんだコイツは・・・。

「あ、でもスリーサイズはヒミツだよ～？ あはは～」

「・・・それは一番知らんでいい」

無いに等しい物のサイズを聞いたつてなあ・・・。

「あー酷い酷い～！ 貧乳にも需要はあるんだぞー」

「コイツと話していると口が暮れそうだな・・・。

「分かつた分かつた。じゃあ、今までどうして今日みたいな事を

したのか教えてくれ。それで許してやる

「あ、ホント？ ウソって言つたら・・・」

「ああ、針でもなんでも持つて来い」

「じゃあウソだつたら一発つて事で ええとね～氣に入らなかつたのだよ～。前までに来た男連中は口クな奴が居なかつたから～」

「口ク・・・って・・・なんだかその昔の隊員が可哀相に思えてきたな・・・。」

「実際危なかつたんだから～。芽衣とかムリヤリ襲われそうになつてたんだぞお？ むしろ感謝して欲しいのよHツヘン」

「何！？ それが本当なら・・・偉いな魅夜」

さつき可哀相に思つた男子隊員を今度は真逆にぶん殴りたくなつた。

男として最低だな本当だつたら。

「そつなのだよ～。汚れ役つて大変なのだよ～？ もちろん芽衣とかは無事だつたけど、私がそうしなかつたら一生心に傷が残つたかもしれないのだよ」

なるほど。そういう理由ならコイツは何も悪くない。いや、むしろ礼を言われてもいいぐらいなのに、理由が理由だけに言い出せないって事か・・・。

ほんのせつめでただの変態だと思っていたが、それでも無こう
しい。

「ふむ……。……ん？ ジヤア、まさか今日のも……」

「あにゅ？ いや～今日は違つて。だつて少禰さんお風呂で何
にも無かつたし、そういう人じやないなあ～って思つたから悪氣が
あつたわけじやないのよ～」

「ほ？ ならなんでだ？」

「そりゃ、気に入ったから既成事実を……おうどつ」

「悪氣の塊だろンレフー？」

舌を出しつて頭をコシンと叩く魅夜。

ちゅうと見直したと思つたらすぐにわかコイツは。

「まあ、それにしても、良くそんな事が出来たなあ。女の手ひと
つて大事なもんだろ？ そういうの」

「あ、いやいや。流石にしてなによ。 そう見えるような状況を
作つて貶めただけなのだよ。だからまだ生娘なのですフフン」

悪女だ。 悪女がいる。

ん？ おい……。つて事はだ……。

「俺とも何も無かつたって事だな？」

ギシリ。

魅夜の動きが止まつた。 ああ・・・なんと分かりやすいリアクションをしてくれるんだこの汚れ芸人は・・・。

「オマイゴーっ！ 私の計画がこんな事で―――！」

何処の悪役の台詞だそれは。

まあ、良かつた良かつた。 それなら単なる悪戯で済む。 あんまり洒落にならない悪戯ではあるけどな。

悪が栄えたためしなし。 つてやつだな。

阿呆は放つといひや。

「さて、じゃあ後は芽衣だな。 芽衣は何処だ？」

「・・・少尉の部屋」

相当ショックだったのか今度はアッサリと口を割つた。 なにやら地面上の「の」を書いているがそれは無視しておぐ。

聞く事は聞いたので俺は芽衣を探して行ひアマに歩こうとした。

その瞬間。

パン！

そんな破裂音がしたと思つたらドアが乱暴に開いた。

そこから現れたのは芽衣で、涙目になりながら片足を上げていた。
・・・蹴り開けたのか。

「・・・・・魅夜。死んで」

パン！

また破裂音。良く見ると芽衣の手には何やら口径の太めな短銃を持つていた。

その音と共に魅夜の居るすぐ隣の床が粉々に割れた。床はコンクリートの固い床だった。

・・・芽衣。それ普通に人一人殺せるぞ・・・。

躊躇無く撃つている所を見るとゴム弾か？まあ、それでも打ち所が悪ければ簡単に逝つてしまつだらうが・・・。確かヘビー級ボクサーのパンチ並みの威力があるとかなんとか・・・。

こちらの視線に気付いたのか、芽衣は銃を掲げて見せて言った。

「・・・・・ひつと。ダムダム弾」

「おういっー？」

まあ・・・ダムダム弾がどういった物なのか説明すると長くなるので簡単に説明すると「とっても酷い惨状になつてしまつ弾」だと

「うところか。…………確か俺の知つている世界ではそのあまりに残虐な威力に禁止条例があつたハズだが……。

「…………はんざめごど」

「つるやこわつー?」

あのあー芽衣さん? 昨晩何か綺麗な事言つてませんでしたつけ? 「相手を無力化する」という俺の意見にも賛同したハズだが……。そんな物手加減無しに即死確定ですよ?

「落ち着け芽衣! いつたい何があつたんだー?」

「…………縛られた」

パン!

それだけ呟くとまた芽衣は魅夜に照準を合わせて……発砲。

それを驚異的な反射速度でなんとか避ける魅夜。

「あー芽衣ちゃん? ヒーは休戦協定を結ばないかなあー?」

流石に命の危険を感じたのか魅夜はそんな事を言つが……。

「…………」

パン!

それにまたたく感じずに再度発砲。

今度は避けられず魅夜は右肩に銃弾を受けてしまう。

「……ああ、腕が吹っ飛んでない。やつぱりゴム弾だつたんだな。」

「いたああい！ 腕飛んじゃうう～」

「……安心して。フルメタルジャケット弾も混ぜている」

「それの何処が安心していいの！？」

流石にたまらず声を上げる魅夜。

「……あのお、俺別にミリタリーオタクじゃないから分からないんですけど、それって全部真鎗で覆われたとっても危険な奴じゃなかつたでしたっけ？」

それをまともに食らって大丈夫な魅夜にも驚いたが、次々と色んな銃弾で応戦する芽衣に恐怖を感じてしまった。

流石に止めた方がいいか……。

「ま、まあ芽衣？ 一晩縛られたって言つても特に命に別状があつたわけじゃないんだからそれぐらいで許してやるのも大人の見解だぞ？」

なんだか圧倒的な暴力に、俺はちょっと涙目になつて魅夜をかばつた。

「…少尉。私は一晩…何も着てなかつた」

「一晩中裸でベットに縛られていた。　・　・　少尉。」命令を

色の無い瞳で俺を見つめる芽衣。俺は一度魅夜に振り返ってその姿を確認してから・・・

『スルトウノハナ』

親指を立ててGOサイン。

同情の余地無し。

「この阿呆は一度痛い目にあつた方がいい。
芽衣が怒るのも無理はないしな。

多分・・・芽衣も「仲間」を本気で抹殺したりはしないだろうし。

私は生粋の生身の普通の女の子よおちぬ・・・・ちぬりとお!?

! ? }

ほう。昨日、その普通の女の子が風呂場で超人的なリアルバウトを繰り広げていたと思つたが違つたか？

「ウストショート……………ファイア」

「へして・・・花肩に寄生する悪は滅びた。

俺達は」の事を教訓にして明日を生きていくのだろう。

ああ、香良洲 魅夜 ふおーえぱー。

「綺麗にまとめるな――――――

硝煙の匂いが充満する部屋で、魅夜の断末魔が木靈するのであった。

第6話「汝覚める夢の様に移りゆかん」（前書き）

少尉が入隊した二日目。

私は彼の事がそれとなく気になっていた。

昨日一日で色々とあつた気がするが・・・。

とにかく、私と少尉は花肩で過ごす。

軍人として・・・。

第6話「汝覚める夢の様に移りゆかん」

私の手には銃を握っていた。拳銃と言つては大きめで、ライフルというには小さ過ぎる。

そんなコルトパーカソンを構えて、目標に向かつて・・・引き金を引く、引く、引く。

パン！パン！パン！

その銃弾は射撃用の的の中心を大きく外れ両肩の部分に数発掠めるように当たった。

これは私にとつてはど真中だ。

「・・・・ふう」

防音用のヘッドギアを外して一息つく。此処は基地の地下にある射撃場。人型のロボットに乗る私達には無用な物に見えるが、こういう距離感等を正確に把握するのは実際に自分の手で撃つてみる方がいい。それに何らかの状況で白兵戦になつた場合、最後に自分を守るのは自分しか居ないのだから必要な技術だ。

同じ隊の中では射撃は隊長と香具羅は上手い方だ。逆にちやーこは苦手らしい。私と・・・魅夜は別格だつたが・・・。

そういえば昨日入隊した少尉はどうだろう？ 多分銃を触つた事も無いのだろうが・・・。訓練無しにこういう技術は無理かもしない。

それにして、彼には驚いた。始めてみた時には声も中々出なくなってしまった。

かつた。何故か懐かしい感じがして・・・とても「父親」に似ていたから・・・。

だけど、それは正確には違う。私には記憶の中に「父親」は居ない。実際に見た事が無い。だから、少尉を見た時に思ったのは気のせいだと思ったのだが・・・。

彼に・・・昨日の脱衣所で守つてもらつた時、分かつたのだ。

あの人は・・・私の大事な人なのだと。世界にたつた一人しか居ない運命の人なんだと・・・。
そう思つてしまつたのだ。

彼はTAM格納庫で「相手を無力化して生かしてあげたい」と言つた。それは・・・私がいつも思つていた事だつたから・・・不覚にも泣いてしまつた。あんな失態は生まれて初めてだつた・・・。

彼は不思議と安心できる雰囲氣があつた。だから・・・甘えてしまつた。

知らず知らずに女を意識している自分が居て・・・それが堪らなく悔しかつた。私は女である以前に花肩の一員であり、軍人だ。それを・・・彼は女らしくいふと言つ。

・・・そんな事できる訳がない！

パン！ ガチャ！

「あつ！」

我知らずに銃の引き金を引いていた。ヘッドギアを外していたのでその音が鼓膜が痛いぐらいに響いて銃を取り落としてしまった。

何をやっているんだ私は・・・。

「お、おい！？ 芽衣、大丈夫か？」

「・・・・少尉？」

私の肩を抱きながら、少尉が心配そうに顔を覗き込んでいた。顔が・・・近い。

「・・・・・大丈夫。 離して」

私はそう言つて少尉から離れると、取り落とした銃を拾つ。幸い暴発しなかつたようだ。多分暴発してたら私の足は吹き飛んでいた。ただの訓練でそんな事をしては他の隊員に申し訳ない。・・・本当にしつかりして欲しい・・・私。

「あ、いや、すまん。 ちょっと覗いたら丁度芽衣が見えたんでな」

「・・・・」

丁度見えたにしては、反応が早くなかったですか？ そんな目を向けるのだけど、彼は分かっていない。ただ愛想笑いをしている。他人の敵意に鈍感なかもしれない。

・・・・・敵意？ 私は彼を疎ましく思つてているのだろうか？

「あ、そんな疑いの目で見るなよ。 確かに此処に居るつて聞いて

きたんだがな。 莢衣、 皿はまだつるんだ?」

「…………食べる」

そういえばそろそろそんな時間だ。 では、 一の少尉は食堂の場所を聞きに来たのだろうか? わざわざ私に? 理解できなー。

「いや、 セリヤセリヤセリヤセリヤ …… あのは、 そういうのじゃなくてだな・・・」

「…………」

なんだろう・・・。 歯切れの悪い男だ。 言いたい事があるならハツキリと言えばいいのに・・・。 それは人に言えた義理では無いかもしぬないが、 人のを見ていると少しイライラしてくる。 近親憎悪かもしぬない。

「今の所俺にはお前しか居ないんだ。 一緒に食べるのは」

「…………わづ」

多分魅夜辺りなら普通に一緒に行ってくれると思ったのだけど、それを口にせずに私は頷いていた。 彼の気持ちは少し分かる気がしたからだ。

私は一の「花肩」に入隊して1年経つ。 だけど、 未だに香具羅や、 セン、 魅夜には慣れていない。 隊長やちやー一は昔から知っているのでそこまで気を使わないのだけど・・・。 それと同じとう事なのだろう。

私はここに配属される前は「学校」に居た。そのクラスメイトだったのが隊長とちゃー一だった。

隊長は年上だったので私より先に学校を卒業して、この部隊に配属された。私とちゃー一はそれを追つて入隊を希望した。それだけの話だ。

だけど、少尉には、過去が無い。正確には過去との接点が無い。

世界が変わる程の時間を少尉は飛んでしまったのだ。

彼が知っている者がこの世界でどれだけ生きているのかはわからぬが、彼にとつてはそれは孤独である事の以外の何物でもなく、彼の言った「私以外居ない」は彼にとつて勇気の要る台詞だったハズだ。それを言つ事によつて現実を認めてしまうのだから……。

「…………」

彼の手を取つた。彼はビックリしたように私を見ている。

「芽衣…………」

田を細めて私を呼び捨てる彼。昨日から何度も言つているのに辞めてくれないのでもう諦めているが、昨日程そうされる事は嫌では無かつた。

「…………食堂がある。行こ」

「おうー。」

彼は私に手を引かれて着いて來た。射撃場の出口から階段にな

つているのでそれを駆け足で登る。繋いだ手がブンブンと振れる。だが、離さない。

「ピクニックピクニックやつほ～やほ～

陽気に少尉が歌っている。彼は…とても強い人のようだ。こんな状況で歌いながら過ごせるなんて…少し見習いたいな。

「やほ～うやほ～」

私も少尉に会わせて出来るだけ聞こえない様に言つてみるが、何か違う。何が違うんだろう…少尉は何故か楽しそうなのに、私は楽しくない…。

「芽衣……それマジか?」

「……? 何の事?」

少尉は私を丸い目で見ていた。何かおかしかったのだろうかやつぱり…。

「……芽衣。 どれくみつて言つてみ」

「?? どおれ、みい～」

「…分かった。 芽衣軍曹は特別授業が必要だ」

「……?」

何を言つているのだろう少尉は…。私が少尉に教わる?

戦闘技

術も機械技術もサバイバル術でさえ知らない男に？

「勿体無いんだよ。声は良いつてのこ…」

「あ…あの…」

「歌うには腹に何も入って無い方がいいからな！ 頑張れば今日中にサクラぐらい歌えるようになるぞ」

「……私は歌える」

「現実は厳しいな芽衣…。お前はかなりの音痴だがすぐに歌姫になれる素質がある！俺が指導してやるんだから大丈夫だ」

少尉はとても失礼な事を言つて来た。私が音痴？ 仮にそうだとしてもそれがなんの不都合があるの？

「…・・それにつきのは知らない歌だつたから。 知つていれば歌える」

「ほう。 なら知つている歌を一つ歌つて見せてくれよ？」

「うん。 ・・・・草原にて一輪咲く花のようにて風に吹かれても揺らめいている私～」

「・・・・・・・」

歌いだした私を少尉は静かに聴いていた。

「貴方の～言葉で紡いでくれた～幻想譚に心躍らせて舞う～ロンド

」

「輝いてたゞ今、そこにあるもの手の平にたしつかめて」

少尉が合わせてきた。 . . . 上手い。

「誘われてたゞ月つ明かりに天にのぼつるゝ 風とつ」

釣られないよつにしながら私達はハモる。

『森のゝロンド』

・・・・・ どうだろつ?

「・・・・・ 芽衣。 それだけせつきと別人なんだが・・・」

素直に驚いているよつで、何か氣分が良かつた。

「・・・・・ だから嘘じやないと書つた」

そう書つと、何故か少尉は顔を赤くして皿を離れた。 . . . ?
私の顔に何か付いてる?

少尉は「あー」と言いながら咳払いをして、どこか遠くを見ながら言つた。

「あーその、なんだ。 . . . 芽衣は初見に弱いだけだつて事だな」

「・・・・・ たぶんそつ」

私自身そんなつもりは無いのだけど。まあ、彼がそう言つのだからそうなのかもしれない。

自分の事を一番知つてるのは自分だというのは傲慢でしかないから……。

彼の言葉と行動を鏡にして、私は自分自身を見詰めてみた。

殆ど喋らずに、反応も鈍いだろう。可愛い服も持つてゐるわけが無いし、化粧などした事は無い。得意な事と言えば銃の解体と組み立て。それとTAMの操縦。なんとも……面白みの無い女だと思つ。

もつとも、今の時代に「女らしく」「男らしく」というのはナンセンスだ。女だからといって家事が出来なければいけないという事は無い。ただ、出来る者がやればいいのだ。

私達「花肩」の隊員は、一人を除いて大抵の料理等は出来る。それも別に花嫁修業というわけでもなく、ただのサバイバルスキルの一環として身についているだけだ。バリエーションは……私は少ない。

だから、食事当番の日はあまり好きでは無い。

基地には最低限の人員しか居らず、給仕隊員など居ない。総勢11名ほつちの小さな基地なので、食糧確保もそこまで大変では無いが、自給自足であるため、メニューが偏りがちだつたりする。そういうえばちゃーこが「私の夢は大きい牧場を作る事！」と豪語していた。

彼女は動物が好きで、何処から連れてきたのか鶏や、牛等まで飼つていた。

・・・牛はやわらかく食べ頃だと思つてこるが、ちやーじが泣くのでやめておいた。

だが・・・その日のメニューはステーキだつた。

卷之三

食堂

「う・・・・・」
「あ・・・・・」
「え・・・・・」
「いつただきま～す」
「・・・・・えつと・・・・」
「・・・・・」
「ん? なんだ豪勢だな～。 中々良い肉じゃないか」「

空気を読んでない人が約2名。

泣きながら料理を取り分けていたちやーー」を悼まれない顔で手伝う隊長と、いつも騒いでいるが流石に言葉を無くしている魅夜と、何事も無いように出された端から食べ始めるセント、慰めの言葉を搜しながら考え込んでいる菊池女史と香具羅。後、分かつていな少尉。

そんな8人が食堂の大きなテーブルを囲んでいた。

女ばかりで普段は騒がしい食堂も、今日だけは氣まずい空気が流れていた。

「ん？ どうしたんだ？ 皆、食べないのか？」

そう言つて少尉も皆が（一人を除いて）食べ始めるのを見て手をつけなかつた。

「しょうじ～あのね～。この牛せんぢやー」けやんが大事に育てたんだよお～」

センが二口二口と笑いながらその説明するのを聞いて、少尉は口元を押さえちやーを見た。見られたちやーはその視線から逃げるように後ろを向いてしまつた。

「・・・やうか」

ちやーのその行動に少尉も気付いたようだ、料理から一皿箸を置いた。

そこにセンが全員に聞こえるような大きな声で言つた。

「うん。だからとおおおつても味わつて食べなくちゃ駄目なんだよ～ 美味しい美味しいって」

センは・・・分かつていてやつているのかもしれない。

それに少尉は頷いてからちやーの背中に語りかけた。

「やつだな。ちやー大尉。君が大事に育てた牛なんだな？」

「……はい……少尉」

「そつか……亡くなってしまった理由は俺は知らないが……まあ、それを俺達の前に出したという事は供養も兼ねてるんだろ？せつかく育てたんだ。さあ、皆もそんな暗い顔になつていたら、せつかくのご馳走が勿体無いだろ？最後の晚餐でもあるまいし、御相伴に預かりうじやないか

「少尉……」

ちやーは背中を向けながら肩を震わせていた。

「…………少尉。その通りだと思つ」

私もそれには同感だつたのですぐに頷いた。頷きながらも平気でそんな事を言える少尉に少し感心した。セン以外誰もが口を紡いでしまっていたのに……。それも、事情を知らないにしても、それを受け止めた上で言葉を選んで言つているようだつた。

これがつい昨日までただの一般人で、入隊したばかりの者の発言か？隊長のような落ち着きがある。本当にただの高校生だったのだろうか……。

「流石少尉じゃ。ワシの見込んだだけの事はあるのよ。ほらほら、菜乃、香具羅、魅夜。新参者に言われるまでも無いじやうづが？」

「うそ。 そりなの。 齧も食べまじょんなの」

「・・・分かったわよ。 ちやーい、頂くわよ?」

「んつふふ~ 好感度更にあつふつふう~」

各自にそんな事を口にしながらフライークとナイフを手に持つて、肉を切り分ける。

肉はとても柔らかく、丹念に焼かれていたが肉汁がたっぷり出ていてジューシーな香りが漂っていた。

そして、それをフォークで口に入れようとした その瞬間!

ドゴオオオ――ンッ――!

オープンオープンオープン!

『緊急指令! 緊急指令! 基地敷地内に敵国の物と思われるTA Mが来襲! TAM搭乗者は速やかにこれを殲滅してください! 繰り返す! 基地敷地内に』

「!?

「咄!...」

『はい!』

爆発音と共に警報が鳴り響いた。敵の攻撃が直接基地まで飛んできたよつで、食堂内は激しい衝撃を受けてしまつた。
すぐに隊長が階に号令を掛ける。

「…………」

「少尉！？ 何をしているの！ 早くTAMへ！ 初出撃にしてもあの中の方が安全なの！」

「あ・・・ああ、すぐ行く」

そう少尉は言つたが、椅子に座つたまま動こうとはしなかつた。
彼の目の前には散乱したテーブル・・・。

「・・・・・分かつたなの。 落ち着いたらすぐに来てね」

「分かつた。 隊長」武運を」

そう言つた彼の目は・・・焦点が合つていなかつた。・・・当たり前だ。 急に戦闘だといつのだから錯乱しても仕方ない。

今回は、Jの食堂を守りながら戦わなくてはならないだろひ。

・・・私達なら出来るハズだ。

少尉着任後の初出撃はそんな出撃だった。

第7話「汝愛を叫ぶ友と共にナウ」（前書き）

お皿にしようとしていた私達の基地に敵襲。 少尉は・・・動けないようなので食堂に待機だ。だから・・・絶対に私達が守り切る！

第7話「汝愛を叫ぶ友と共に」ナウ

「最近接近を許しすぎじゃない!? ビッグなってんのよセキュリティは!」

「あー・・・そういうえば私、昨晩切つて、セキュリティ起動をせるの忘れてたわ」

「お前のせいがーー! 馬鹿あああ!」

紫の魅夜の機体と緑の香具羅の機体が揉み合いながら飛んでいる。
・・・漫才は後にして欲しい。

今は戦闘中だから。

彼女の性格のような黄色い機体に乗るセンは・・・。

「あつははー敵さんどこかなあー?」

まるっきり緊張感が無い。いつも思うのだけど、どうしてセンはTAM搭乗者なのだろう・・・。特別操縦が上手いというわけでもなく、いつも敵が出てきても大半は逃げ回っていたりしているだけ・・・遊んでいるだけだった。

敵の数は検索結果から「旧式TAMが20体と新型が1体」らしい。

旧型は物の数では無いが・・・その新型といふのは・・・。 実

は前に戦つた事がある機体だった。

その時の結果は・・・引き分け。
これは衝撃的な事だった。

私達は6体。 相手はたったの1体だ。 それが・・・引き分け
るという事は相当のスペック機体と操縦スキルがあると思って間違
いない。

そんな相手に、先程牛のゴローさん（全部名前がついているらしい）の追悼晩餐会を滅茶苦茶にされたちやーこは、その傷心のままに出撃して大丈夫なんだろうか・・・。

・・・大丈夫のようだ。怒りがMAXになつてゐる。彼女の赤い機体TAM-02が更に真つ赤に燃えているように見えてしまつた。ただ、怒りに我を忘れてミスをするとマズイので援護射撃の準備はしておかないと・・・。

隊長は、反則的な兵器を使わずに普通に格闘戦をしていた。菜乃隊長の機体は超兵器を装備しているが、それは使用すると味方にも甚大な被害が出てしまうはた迷惑な装備だったから「切り札」にしかならない。

ここで少してTAMについて説明すると、TAMは人型の兵器で、各TAMには専用の装備等がある。例えば私のTAM-01ヒナギクだと射撃用のライフル等が2丁。短銃が1丁。それと接近戦用のナイフ状の装備が一つあつたりする。後、全機共通で頭部付近にバルカンや、腰の辺りに反応弾が装備されていたりする。

後、動力は基本的に電力だが、このTAMには人の感情を糧にするという困ったシステムが組み込まれている。

今のちやーこのような状態だと怒りがそのままパワーになつて機動力等は上がる。他にもそんな迷惑なシステムがあるらしいが、詳細はブラックボックスの様に詳しく分かつていないらしい。

さつきから困つた、とか迷惑なとかいう表現をしているのはそれが「意図的では無いのに発動してしまつ」からだ。

だから、私のように感情を制御するのは良い事らしい。

・・・・・制御してるんですよ？

「オラオラオラあ！ このククチチャーロ様が相手してやるつ！尋常に勝負しやがれえええ！！」

・・・・・

「ちやーこは熱くなると男言葉になる。それは彼女が「キレイ」証拠であり、あまりよろしくない状況だった。

「ちやー！」。冷静になつて。あの白銀の機体が居る

「うぬむこ抹衣！ 私はゴローさんの仇を討つんだ――――――！」

「――

・・・聞いてくれない。まあ、その勢いに任せて次々と相手のTAMを撃墜しているから別にいいのだけど・・・。あ、危ない。ちやーこの死角に1体居る。

「ちやーこちょっと右によつて。ヒナギク、前方11時の方角に

ステルススラスターをシューート

「ラジヤー。ステルススラスター発射」

私の乗るTAM-01ヒナギクのオペレーションシステムが軌道を自動で修正して特殊弾を発射する。弾自体にステルス迷彩処理が施してあるので、相手からはその音ぐらいでしか反応できないような物だ。

チユードーン！

弾は難なく敵に命中したようで撃破成功した。間近で爆発が起つた事にちやーーJは一瞬我に返ったように辺りを見渡すが、すぐにまた飛び回り出した。

・・・はあ・・・。ちやーーJの危機だから、高価な弾を使つたのに・・・。

それに・・・爆破してしまつた・・・。今回は仕方ない。それにも、すでに私の手は汚れている。最低限気をつけた事にしよう。

「ちやーーJあ！ 出過ぎなのー！ 一旦戻つてー！」

流石に隊長が悲鳴の様にちやーーJに向かって声を上げる。

その声にも応えずにちやーーJは前進を続けるが・・・

「JヒヒヒヒーーJー！ へつ！ 「イソラ口程にもねえ！ ドンドンいくぜ・・・・・・・うわっ！ な、なんだー？ 何処から撃つてきやがつたー！」

暴走を続けるちやーこを止めたのは敵の銃弾だった。それを受けたちやーこの機体はその衝撃で止まつたが、ちやーこの周りに敵は居なかつた。

「くそにやう・・・前のシルバーさんか！！」

ちやーこが吼えると物陰から白銀の機体が現れた。敵国の新型で、遠距離射撃が得意な機体のようだつた。しかし、その機体の手には銃は握られてない。機体に砲撃用の穴が開いているわけでもない。では、何処から撃つて来るのか？ 答えは簡単で最悪だ。

空中からだ。

空中に無数の発射ポッドが浮かんでいる。それがどういふ原理でか、動き回つて、狙い撃ちしてくるのだ。

相手は確かに一体だが、私達はその発射ポッドの数だけ相手しなくてはならない。

「芽衣！ 援護して！」

隊長が私に命令する。それを聞くまでも無く、発射ポッドを探してそれに数発打ち込んでやる。

・・・しかし、発射ポッドはそれに反応して避けてしまひ。

反則だ。

ならば本体を狙おうとするべくすぐに物陰から物陰に隠れてしまつてサーチシステムも追いつかない程の敏捷速度だつた。

機動力なら、チャーリーの機体も負けてはいないのだが、彼女は今
冷静さを失っている。逆に墮とされたことによるのがやつじだ
る。

やついえば、魅夜達は・・・。

「ほらー、白銀のー、来たわよーー？」

「ん~香具羅たんは私が守つてあげるからねえ~」

「たああーーもひーー離れて飛びなさいよーー！」

・・・・・隊長。私、あつひを撃ちたいです。

ヤンは・・・。

「わ~ーー、ぐるぐるよ~撃つてぐるよ~ もやつせおおいー」

発射ポッドに追われて逃げ回つてゐる。幸い一発も被弾してな
いようだが・・・。戦力外だった。・・・いや、ヤンの避けた
弾が敵の他のTAMに命中したりしてるので実質的には頑張つて
いるのだろうが・・・。

まともに戦つてるのは私と隊長だけ?

「・・・隊長ーー」のままでは・・・

「魅夜ーー、香具羅ーー、千代ーー遊んでないで真面目にやつなセーー。
さもないと帰つたらお仕置きですよーー！」

『い、イエッサー・ボス!』

流石に一喝されて3人は命令に従つた。隊長は怒ると怖い。

そう言つても、魅夜や香具羅はじゃれ合いながらも他のTAMを殲滅していたようで、残つているのは後、敵の新型TAMだけだつたようだが。

『はっはっはっは～花屑の皆さん流石にやりますねえ！ですが、私のG-TAM銀月には敵うまい！！』

・・・アホが居る。

敵の白銀の機体は何を考えているのか外部スピーカーで話しかけてきた。お互い敵同士なので、通信は出来ないから仕方ないのだらうが・・・。

どれだけ傲慢なのだろう。いや、ただの馬鹿だ。

「何なの？あの機体・・・。G-TAM？ギンツキ？名乗りたかつただけなの？」

隊長も流石に困惑してしまつたようだ。私もこんな相手してるとと思うと頭が痛い。

それでも、そつうだけの実力があれば、話は別だ。

『隊長機はそつちの赤いのだな？その命貰つたあ！』

「赤は隊長機」などと云ふ不思議な考え方をされたも困るのだけ
ど……。

いや、それより発射ポッドが全部ちやーーに向かって居る…

「ちやーー！ 危ないなー！」

「どわあーーー！」

発射ポッドが弾を打ち出すよりも早く、隊長の機体がちやーーの
機体を突き飛ばす。

発射ポッドから打ち出された弾はその両方を何とか外れたようだ
った。

しかし

「！？ マズイ！ あつちは・・・・！」

その流れ弾の一つが・・・基地のある方角に向かつて飛んでいっ
た！

「・・・少尉！ 菊池女史！」

なんと愚かだらう。 私や隊長はちやーーに釣られて前に出すべき
ていたのでそれを止められない。 魅夜と香具羅はその事に気付い
ていないし、気付いても遅い。 彼女達の反応速度より弾の方が早い
！ センはーー？

「わわっ！ そつち行つちゃだめえ！」

上手く軌道上にセンの黄色い機体が居た！ お願ひセン！ 止めて！

しかし、その想いも空しく、黄色い機体はその弾道を止める事は出来なかつた。

ドオオオオオンッ！

基地の一 角がそれによつて炎上する。

少尉！ 菊池女史！

「 「 「 「 少尉イイイイイー——————」

皆が絶叫した。

まだ着任2日目でこれだけ思われるも、彼の人柄のせいかもしない。

センや香具羅はどうか分からぬが、隊長や魅夜、ちゃーこは彼をすぐに認めてしまつたから。

それだけ、慕われていたらしい。

私も・・・彼がやられて悲しい。

それは今センが止めてくれなかつたからだとかでは無く、私達全員のせいであるからとても悔しかつた。

「ジュン少尉・・・。 貴方の事は忘れない・・・」

私は昨日の事や今日の事を思に出しながら一瞬だけ黙祷した。

今は戦闘中だ。

これ以上の哀悼は自分の身までも滅ぼす。

「皆一、少尉の弔い合戦なの・・・。 全装備を尽くして一斉にかかれ
なのおおおお...」

隊長が命令を下す。

「おおおおおおおお...」

ちやーじが先程の比で無い程の怒りを爆発させていく。

「少尉の仇ーーーって私も少尉だけどねえーー いくぞおーー」

魅夜は、彼女なりに怒っているんだろう。 口調がハッキリして
いる。

「の方は・・・とても良い人だったのにーー」

香具羅は・・・意外にもそんな事を叫んでいた。 初日に何か陥
悪な事になつたと聞いたけど・・・。 見直していたらしく。

「あはは～　とむらことむらこ～」

・・・セシはいつもと変わらない。いや、もしかしたらこの子
も・・・。

少尉は・・・凄いな。たつた一日でこんな・・・。

私は・・・出会つて間もない彼をそういう信頼関係にあったかどうかと言えば疑問だけど・・・、守れなかつた事は確かだ。

相手のTAM・・・・絶対に許さない！

私達は発射ポッドに構わずに本体の白銀のTAM田掛けて突貫した。

第8話「汝駆け抜ける風のよつよに定めせし」（前書き）

現れた強敵（？）との戦い決着。

第8話「汝駆け抜ける風のよつて定めせ」

敵のTAM 銀月はそれを逃げる事もせず、迎え撃つつもりだ。
舐められている！？

『何か知らんが全員捨て身となつ！ 失望したぞ！』

銀月は動かずに、周囲に散っていた発射ポッドを自機の周りに集め、一斉に砲撃を開始した。

突貫している私達はそれを避ける事もせずに・・・ただ敵を田掛けて前進する。

数発食らつて、魅夜、隊長、香具羅、ちやーーの順番に流石に止められてしまった。

だけど・・・まだ終わりじゃない！

『何つ！？ 馬鹿なつ！ 15のポッドを抜けてくるだつ！？』

驚愕しているがもう遅い。私のTAM-07ヒナギクは銀月に接近する。

『 が、G-TAMを舐めるなあ！』

そう聞こえたと思うと、今一瞬前まで目の前まで迫っていた銀月が・・・消えた。

「え・・・・・・

『後ろだ、小娘え！』

「！？」

なんと銀月は私の機体の後ろに回りこんでいた。信じられない加速だった。

やられー！

銀月の振り下ろす手刀をスロー・モーションになるのを感じた。それは最後の一瞬だったからか・・・。この手刀が私の機体に到達すれば、私は墮ちるだろう。

ごめん・・・隊長、ちゃーー、魅夜、せん、香具羅・・・。

そして少尉っ！

・・・・・・・・・・

あれ？

何も起こらなかつた。

田の前の銀月は振り下ろそうとした格好で動きを止めていた。

『ぐ・・・』のタイ ングで邪魔 入るとほつー。』

銀月の外部スピーカーからくぐもった声が響く。 機体にダメージを受けたようで、その音声も若干飛んでいた。 良く見ると、銀月の肩にTAM用ナイフが刺さっていた。

何が起こうしたのだろうか？ 隊長達は先程のダメージでまだ動き出していない。

なら・・・セン？

そういうばせんは何処？

彼女の黄色い機体をメインスクリーンで探すと、彼女のTAM-04キザクラは少し離れた場所で直立していた。 ・・・・・一緒に突っ込まなかつたの？

私の脳は少し混乱していたのかも知れない。

だつて、銀月の隣に・・・黒い機体が居たなんて信じられなかつたから。

「少尉！？」「

「全部通信聞こえてたぞ？　たくつ勝手に殺すな俺を…」

やはり少尉だった。彼は生きていた。理由は分からぬが、良かつた・・・。

「どうして…？　少尉は食堂に残っていたんじや…？」

「ああ、話は後だ。今は戦闘中だぞ軍曹！　ああ、そりゃう、ちやーー！　聞こえるか？」

面倒くさうに流して、少尉はちやーー！、TAMI-02へ通信する。

「！」・・・！「ちやーー！」－ 少尉！　御無事で何うつ

ちやーー！もなんとか無事だったようだ通信に応えてきた。

「ああ、そんな事はビリでもいこって言ひてんだろ？－　ええとな、その・・・なんだ」

やはり少し面倒臭そうにそれを流して、少し歯切れの悪い言葉を発した。

「はー」

しかし、その後の一言だけはハツキリと言った。

「肉、美味かつたぞ」

「！！ 少尉！ まさか残ったのって・・・」

「「うぬせーー 今は目の前の敵を殲滅するんだ！」

少尉が照れくさそうに叫んでいた。 それを聞いたちやーーは・・・

「はいーー 少尉！ 愛しますーー 貴方の為に絶対に勝ちます
ーー！」

・・・・・ 私は通信を切りたくなつた。

『貴様らー！ 僕を無視しているなつーー 祗めるのも大概にしうつ
ーー』

あ・・・ 銀月を忘れていた。 どうも少し放つておかれで氣分を
害してしまつたようだ。

カルシウムが足りないのだらう。

銀月は少尉の攻撃（？）で少しダメージを受けていたが、まだま
だ動けるようで、すぐに発射ポッドを開いてきた。

「少尉気を付けて！ あれは・・・」

「お～流石未来。 ビットか。 相手はエースパイロットでやつ
か？」

少尉は発射ボツドを見ても驚いた様子もなく、ただ感心していた。

発射ボツドは新しく現れたTAMに狙いを定めて・・・撃つた。

実戦を経験した事が無い少尉にあれを避ける術は・・・

「おつと」

・・・避けていた。

え・・・と?

「少尉！？ 昨晩操作習つたなの！？」

流石に隊長も驚いていた。 「うん。 昨晩はただ動力系の簡単な説明をしただけ・・・。

何故動かせる！？

「ん？ 隊長か？ いんやあ？ それよりあのビット邪魔だな。 莽衣打ち落とせるか？」

しかも、初めての戦場だといふのにとても落ち着いていた。 これは・・・誰だ？

「・・・ダメ。 狙つてもすぐ避ける」

「ほつ・・・？ ジやあ、手動で撃てばいいだろ。 そういうの無いの？」

「・・・・・え？」

少尉の口からまたそんな台詞が出た。 そんなに詳しく説明をした覚えは無い。

確かに今の設定は自動で照準と索敵をするようにしてあるが・・・。

「いいから。 僕を信じろ」

不思議とその少尉の言葉には力強さと安心感があった。

「・・・・・ヒナギク。 オート射撃からマニュアル射撃に変更。
照準自動補正カット」

「ラジヤー。 マニュアル〇二」

オペレーターシステムがオートモードからマニュアルモードに変更する。 これで実際に機体の腕を動かして照準を合わせなくてはならなくなつた。

「おし、 適当に目標を外して乱射しろ」

「・・・・・了解」

良く分からなかつたが、私は言われた通りに何も無い場所へと発砲した。

チョドーン！

•
•
•
•
•
•
•
H
I
T.
o

「よし、思つたとおり
ちゃーーー。憂いは無いぞ！
存分に暴
れろ！」

「了解少尉！久々知 智亞子、突貫しまーす！」

少尉の号令でちやーこが白銀のＴＡＭ目掛けて突撃する。発射ポッドは引き続き私が打ち落としていく・・・。面白くぐらぐらに落ちていく発射ポッド。

『馬鹿な！？ 自動回避システムを上回る射撃だとおー！？』

銀月のスピーカーから驚愕した声が響く。なるほど。自動で避けっていたのか。　という事はある程度自動で射撃もしていたのかもしれない。

人の思考で操作しているなら、そこまで早く反応出来るわけが無いと思っていたが・・・。

・・・それを少尉は見抜いた？

一瞬現状を見ただけで？？

「シルバーさんよお！　お前の相手はこの私だあ！　受けろ！　烈火豪襲拳！！！」

『何!? うわあああーー! !

ガキンッ！

冷静さを取り戻したちゃーこの速度に着いて行けず、TAM-02の燃える拳をまとめて食らう銀月。 ちゃーこの叫んでいるのは彼女が勝手に付けた技名で、実際に燃えているわけではないのだが・・・。

その衝撃で数100m程吹っ飛ぶが、すぐに立ち上がりてくる。

まともに食らってまだ動けるつ！？

「菜乃隊長！ トドメだ！ アレを！」

「え・・・少尉！？ そんな事まで！？ でも、アレは・・・」

「大丈夫！ 説明を受けた！」

「・・・分かつたなの！ ヒメコリ！ グラビティブラストウェーブ発射準備！」

「ラジャー、マスター」

隊長のオペレーターシステムがTAM-01の「切り札」を承認した。

「皆！ 僕の機体の後ろに着けえええ！！」

「なになに？ 少尉いつたいなに〜！？」

「…………えっと、『解

「あつせつせーとじめどじめー

「もう、なんなのよ！？　OK、着いたわよ」

登場してからまるで隊長のよつて命令を下し続ける少尉。

本当になんなのだわ。

『ぐ……の私が……負けるわけが無い！』

銀月が吼えながら隊長の機体に突進する。ダメージがあったので、その速度は先程より遅かったが、まだ十分動けるようだった。

隊長！

「遅いっ！ 合わせろよ隊長！ グリーンインバリットシステム展開！」

「うん！ グラビティブラストウェーブ……発射！……」

銀月が隊長の機体に到達する前に、隊長の超兵器が発動する。

「ド」オオオオオオオオン！！

TAMI-01を中心に絶望的な爆発が起つた。

「……あれ？」

その衝撃波は私達の機体にも・・・来ない?

良く見ると私達の前に緑色の薄い膜のような物が展開していた。それが衝撃波を防いでいた。

『な・・・なんだこれはああああああああああ！』

銀月のスピードから断末魔が聞こえてきた。

アレは昔100ものTAMをも殲滅させたような兵器だ。まと

•
•
•
•

數分後。

爆発の砂塵が収まるといつには動く物が無かつた。

私達7体のTEAM以外は・・・

「・・・色々と聞きたい事があるだろうが、とりあえず帰還しようぜ。ちなみに基地に飛んできた銃弾は食堂の隣に被爆しただけで大した事は無かつた。もちろん菊池女史も無事だ」

「…………そう。了解」

もちろんそれで済ましたくは無かつたのだが、今回の功労者は誰

が見ても少尉なのだから素直に聞くしかない。

「それと隊長。色々偉そうな事言つちまつてしまなかつた。状況が状況だったから勝手に指揮したぞ?」

「あ、うん。け、結果オーライなの。少尉、お・・・お疲れ様なの」

隊長でさえ、先程の夢のような状況を理解するには時間がかかっているようだ。

色々と分からぬ事ばかりだが、私達は全員無事に基地へと帰還した。

食堂に戻った私達は、全員困惑顔のままだった。

なにせ、先日入隊したばかりの少尉が、TAMを難なく動かして、しかも的確な助言までしたのだから・・・。

種明かしをしてほしかった。

食堂は出撃前より酷い状況だった。テーブルは倒れ、その上に乗っていたゴローサン（牛の名前）の追悼料理は床に散らばってしまっていた。

それを一切れ少尉は拾い上げた。

「ん・・・流石に硬くなつたな。まあ・・・食べれないことも無い」

そう言つて少尉はその肉を食べてしまつた。

「少尉！？ 肉ならまだあるからそんなのを食べなくとも・・・」

「ちやーじが慌てて止めるが、少尉は気にした様子も無く、更に落ちている肉を拾つていぐ。

「汚かろうが、これは大尉の大重要な物だら？ ちょっとぐらい汚れても人間大丈夫に出来るからな」

「・・・少尉・・・」

「・・・ちやーじの目がハートだった。

何故かそれを見ると氣分が悪くなつてくるのだが、何故だらう？

「そ、それよりも少尉～。どうしちゃつたのだあ？ イキナリ現れて何処のヒーロー漫画かと思つたぞ～？」

魅夜が誰もが聞きたい質問をすると、少尉は肉を拾つのをやめて私達に向き直つた。

「あ～・・・長くなりそつだが、いいか？」

「・・・はい」

「うんうん」

「だいじょうぶで～す」

「少尉お願ひ、話して。私氣味が悪いわ」

「聞かせて欲しいなの」

「うふふ。一人の夜は長いから大丈夫よ～」

スパーク！

「みやう～ん！？」

全員即座に頷いた。最後の魅夜の台詞に少尉は何処からかハリセンを取り出していたが、そんな事より早く話して欲しい。

「・・・「ホン。まあ、俺自身驚いているのだけどな。俺は時間を飛んだってのは皆知ってるんだよな？」

「はいなの。それは全員に話してあるなの」

隊長が代表して答えた。全員が話すと話が進まないと考慮したのだろう。

「そうか。それなら俺の体は・・・なんとかつて少尉の物だつてのは知つてるか？ああ、答えなくていい。この体は俺であつて、俺でないんだ。元々誰かの体だつたらしくてな。その体に俺が

入つているつて事らしいんだが・・・

「菊池女史と同じなの」

「そうらしいな。で、菊池女史の場合、元の体が軍医だつたらしくそのままその技術を使えたと言つていたんだが・・・。それは俺もそうだつたらしい」

「・・・どういう事なの?」

「つまりだ。前の体の少尉はTAMの操縦が出来たみたいだな。俺がオニコリに乗り込んだら懐かしい感じがして、後は適当に動かせた」

「て・・・適当で動かせたら世話ないわよつー」

香具羅が堪らずに声を上げる。うん。その気持ちは良く分かる。私も同じ事が言いたかつた。

「いや、それ以外にもな。操縦系統が・・・その、なんだ・・・。昔ゲーセンでやったゲームにそっくりだつたんだ」

「は?」

「いや、多分設計した奴がそれを真似たのかどうか知らないが・・・、ほぼ同じようなもんだつたぞ。二つある操縦桿を同時に前に倒すと前進。前と後ろに倒すと旋回。左右に広げると飛び上がった時には吹き出しそうになつたぞ」

少尉の言つてゐる操作は、実はその通りだつた。

操縦席の前に

一つの操縦桿が伸びていて、それを少尉の言つたように操作すると、
そんな動きをする。後は色々とボタンが付いているのでそれを押
したりするのだが、それは分からなくてそれだけ分かつていれば
十分動かせる。

・・・しかし、ゲーム？

そんな事で！？

「攻撃方法とか若干分からなかつたから芽衣とかに任せたが、それ
は仕方ないよな？ ああ、後、ジット・・・でいいのかな？ 空を
飛び回つてたヤツ。あれつて昔やつてたアニメであるようなヤツ
だつたからな。驚きより感動したぞアレには」

『・・・・・』

私達は沈黙するしかなかつた。

話を聞いているどゲーム？ アニメ？

ふざけ過ぎてこる！

「そのアニメには打ち落とし方もやつてたが、それよりどうせコン
ピューターで制御してるような物だと思ったからな。適当に・・・
予測不可能な撃ち方すれば騙しで当たるんじゃないかと思つたんだ。
まさか本当に落とせるとは思わなかつたがな 要するに芽衣の
射撃が正確過ぎたって事だ」

しかも、私にそんな駄目出しまでしていくる・・・。

今まで真面目に訓練してきた私達はなんなのだ・・・。

「そ・・・それにしても少尉落ち着いていたな。初めての実戦は怖くなかったなの？」

「・・・そりや怖いだろ普通。だけど、昨日から異常な事ばかりの連續だったからな・・・。そういう感覚がマヒしたのかかもしれない。要は慣れつてやつか？」

少尉はウソを言つているのでは無いのだろうが、私にまどうしてもまだ信じられなかつた。

昨日まで一般人で・・・ただの高校生だった者がどうしてそこまで達觀出来てしまうのだろう？ 彼は・・・何者なのだ？

「・・・・・少尉。アナタは本当にただの高校生だったの？」

「・・・・・」

私が聞くと、少尉は少し考えるより眉間に手を当てて、そうして肩を竦めてみせた。

「俺自身そだと思つてたんだがな？ 元々の世界じゃ色々と嫌な事もあつたし・・・そのせいかもな」

「・・・・・嫌な思い出は思ひ出さなくていい。『めんなさい』

私は少尉の目が一瞬生氣を無くした様に見えてしまつてそれ以上聞けなかつた。嫌な思い出・・・。私にあるから分かるつむりだ。

「まあまあ。 とりあえず少尉は即戦力つて事なのだよ芽衣」

魅夜が笑いながらそんな事を言ひへ。

確かに・・・少尉の機体は隊長の超兵器を使う事が出来るようこそ補助する機体だから、戦力は大幅にUPしたと言える。
今の所少尉は基本動作が感覚で分かっている程度のようなので、本当に混戦等になると分からぬiga・・・とても心強い戦力になつたのは確かだつた。

「あ、そうそつ。 その事なの。 少尉はこれでおしまいなの」

「一.?」

隊長が急に言い出した台詞は流石に驚いた。 しかし、すぐにそれは杞憂と分かるが。

「あ。 別に退隊つてわけじゃないの。 今回の作戦で少尉は大尉にしようと思つうの」

「おー！ イキナリ昇格ですか 流石少尉！ つて少尉じゃないのか、よつ大尉！」

「おお～、なら私と一緒に事ね」

ちやーこが嬉しそうに少尉の手を取つて喜んでいた。

・・・・・・何か発砲したくなつた。 何故だか分からぬいけど。

「あ～ちやーこ？ 貴女はこれから中尉なの。 今回の命令無視に

は久しぶりにトサカに来たなの

「ええ～～！？ 菜乃～～それって横暴よ～～」

「黙れなの！ 貴女のおかげで皆がどれだけ危険な目にあつたのか
思い出すなの！」

「あう・・・・分かりましたあ」

「めんちゃーー」。何故かいい氣味だと思つてしまつた。 中尉
降格おめでと～。

「え～とお～。階級がどうののはいいんだが・・・。隊長を
抜きにしたら俺が一番階級が高くなるぞソレ？」

少尉・・・いや、大尉も流石にこの急展開に着いて行けずに困つ
たようになるが、菜乃隊長は笑顔でとんでもない事を言つ。

「つうん大尉～。今回の作戦で貴方の指揮はとても良かつたの。
むしろ隊長を変わって欲しいぐらいだったの 適材適所だと思
うなの～皆はどう思う？」

「ここまで来ると答へなど求めなくともいいとは思つが、隊長は一
応聞いてきた。

「 私はもちろん賛成～」

魅夜、賛成。

「うんうん カツコよかつたからOKだよお」

せんも賛成。

「…………いいと思つわ」

香具羅も少し考えたが賛成だった。

「う～～～ああん！ もう！ 分かった賛成賛成！」

哀れなチャーリーも渋々賛成したようだ。

「…………」

私は……。

「芽衣ももちろん賛成なの？」

隊長は妙に笑顔で言つてくれる。

「クン。

思つところはあるが、認めないわけにもいかない。

・・・あの時、助けてくれたし。

「うん　じゃあ今日は大尉就任祝いとチャーリーの中尉降格祝いに
『ロー君を食べてしましょうな』

『はああい』

」つして、少尉はたつた一田田にして大尉へと昇格した。

彼が乗るにとになつたTAM-06オーネンの事など色々と不安はあつたが……。

今日は色々と疲れたのでそれはとりあえず置いておくことにしようと思つ。

「あ、そうだ芽衣。祝いつていうなら毎晩歌つた歌を皆に聞かせてやつたらどうだ?」

大尉は唐突に無茶な事を言い出した。皆の前で歌うなんて恥ずかしい事を私にしろと?

「嫌か? 上官命令だぞ芽衣軍曹」

昇格してイキナリ職権乱用する大尉。まあ、元々少尉であつても上官なのだが……。

「め、芽衣が歌うの!?」

「た、大尉! やめた方がいいの! 芽衣は」

ちやーこと隊長が何故か必死に止めようとする。私は所持している短銃のセキュリティロックを外そつかと一瞬考えてしまつた。

「おつ? なんだ隊長もちやーー」も聞いた事無いんだな? 普段音痴みたいだが、今から歌つのは一味違つぞ? 芽衣、聞かせてやれ

ハツキリ音痴と言つた大尉。

・・・・・・しかたない。今回だけという事で納得しよう。

「・・・・・大尉。一緒にお願ひ」

「分かつてゐる。元々デュエット曲だからなアレは」

歌う曲の名前は「風と森のロンド」。私が幼い頃に聞いた歌だつた。大尉の知つている世界では有名だつたのだろうか？私は、その曲を母が歌つていたのを思い出しながら・・・ビブラートを紡ぐ。

『～～』

歌声が流れ出ると、隊長もちゃーこも一瞬ビッククリしたように顔を見合わせるが、すぐに目を細めて謹聽してくれた。

「風と森のロンド」は、とある青年と少女の物語を歌にした物らしい。

その歌詞は私は好きだつたから覚えていたのかもしれない。

「花屑」墓地内食堂に一人の歌声が響き渡る・・・。

それは「ロー君のレクイエム」であり、私達の勝利の贊美歌となつた。

そうして、大尉の花肩での一日目が暮れていった。

第8話「汝駆け抜ける風のよつよつめな走り」（後書き）

第2話的な話終わりです。

次の展開は軽いお話ですので気楽に見てくださいね～。

<http://9922.at.webry.info/>

にて芽

衣のメイド服が見れます（何）

第9話「内部紛争勃発1」（前書き）

3月1日。

雨が降つた。

私達は野外訓練等も無く、室内でゆっくりする事にした。
昨日出撃したばかりだし疲れていたのかもしれない・・・

第9話「内部紛争勃発1」

ジュンさんが大尉に昇格した次の日。

私は昨日の事を考えていた。

昨日、晩御飯が終わってから大尉と少し話をした。

この世界の事、TAMの事、花肩の事、皆の事。
本当は大尉の過去の事が聞きたかったのだけど、その話題になると
彼はとても複雑な顔をしてしまつのでどうしても聞き出す事が出来
なかつた。 变わりに私の事もほとんど喋つてはいない。

私は過去の記憶がとても曖昧だつた。 自分の両親の事も曖気に
覚えているだけで、実は両親の顔さえもハツキリと思い出せなかつ
た。 だけど、良く歌つてくれた母や父の面影は覚えている。 思
い出は・・・基本的にソレぐらいだつた。

何か・・・雨では無く、そういう雰囲気の事で何かあつたような
気がするのだが・・・。 ある時を境に思い出せなくなつてしまつ
た。

痴呆症だらうか？

・・・・・ 降り続く・・・雨では無く・・・雨では無く・・・

ザー・・・・。

昨晩から雨が降り続いていた。朝日が覚めても外が暗いとは思つたが……。

ドスン！

私はまどろむ目を擦りながらベットから滑り落ちていた。

痛い……。

「何やつてんだよ寝惚てるのか？ 莺衣」

少……大尉が私を見下ろしながら歯を磨いていた。部屋に簡単な洗面所があるが、そんな私物を「私の部屋」に持ち込まないで欲しい。

大尉は昨晩も私の部屋に泊まった。

もう魅夜の奇行はバレているのだが、大事を取つて自室には向かわなかつたのだ。

いくら部屋に鍵を掛けても魅夜は簡単にピッキングしてしまうので意味が無い。初日も勿論鍵を掛けていたのに……。

大尉は昨日の作戦から皆からとても慕われた。だから別に魅夜だけが危険だとは言えない。……昨日の様子だとちやーこだつてもしかしたら……。

私は、そういう事とは無関係なので彼を受け入れたというだけの話だ。

昨日は大尉は床で寝たようだし・・・。私がどれだけベットで寝てと言つても聞かなかつた。 なんと頑固な人だろう。

それにしても・・・大尉は昨晩すぐに寝すだつたから、ちよつと心配だつた。

・・・・・大尉。
体は痛く無い?」

「ん、昨日はやり過ぎて腰が痛いが、まあ大丈夫だ」

一
・
・
・
・
・無理するから

「そりゃ言ってもなん？」俺も男だから頑張らんよと思つたんだよ

・・・・・満足した?」

まあ・・・そこそこ満足したかな?

ヤメテ言ひても聞かんしかば大尉は

あ
寝不足はなぜだまつたかな?
すまんすまん

別に嫌いやなかつた

「へうつううらあああーー！アンタ達何やつてたんだあああーー！」

そこに魅夜が現れた。

「・・・魅夜。セキュリティロック解除した？」

「そんなもの2秒お！ それより何？ やつたの！？ ねえやつたの！？」

何か興奮しながら私に詰め寄つて来る魅夜。

「？？ 何を言つているの？ 魅夜？」

「ん・・・昨晩の事か？ やつたぞ？ 力いっぱい」

大尉がそれに答えると、魅夜は大袈裟に頭を抱えて仰け反つて叫ぶ。

「ガーン！！ やつたのね！？ 私でもまだなのに！ 芽衣・・・恐ろしい子」

？？ 何を言つているのだろう魅夜は・・・。

「？ やつたのは大尉・・・」

「何言つてるの！ 二人とも共犯でしょう！？ 一人で出来るわけでも無いんだから！」

頭を狂つたようにブンブン振りながら拳を握つて上下させる。「そんなの関係無い」とでも言いたいのだろうか？

「・・・・・・腹筋は一人で出来ないか？ 芽衣」

「ううん。出来る」

魅夜の動きがピタリと止まる。

「…………は？ 腹筋？」

「ああ。 体力作りしたくてな。 寝る前にやつたんだが、背筋や
つてなかつたからか腰が痛くて仕方ないんだ」

「あ～～～～そななの？ ああ～～～～～～～～～～い、いやあ～
お、お邪魔しましたっ！」

バタン！

「？ なんなんだアイツ？」

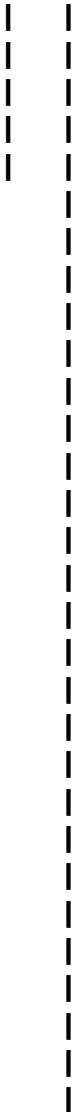
「…………知らない」

何か魅夜は顔を赤くして飛び出るよつこにして行ってしまったけど。
・。 どうしたんだろう？

私と大尉は一人で首を傾げるが答えも出ず困惑するだけだった。

基地内食堂にて

「ゆーつねー」



「YOU TUNE? ツネさんつて誰え? シャクシャク」

「あほー。 ゆううつって言つたのよ。 昨晚からずっと雨だから外で走り回る」とも出来ないじゃない? ・・」

そう言いながらテーブルに突つ伏すようにダレているのはちやーじだつた。 その対面にセンが座つてシンゴを齧つていた。

「ふ~ん。 ちやーじつてワンちゃんみたいだねえ~ ワンワン

」

降つて喜ぶのは確か雪じやなかつた? そんな突つ込みをするわけでもなく、ちやーじは犬歯を立てて唸つた。

「・・・・・ガルルルルル

「キヤー たべられる~」

その時の台詞はセンのこつもの通りの馬鹿な台詞だつたのだが、その後のちやーじの言葉が後に災いの元となる。

「そんな幼児体型誰も食べないわよ」

「ちやーじは何気なしに言つたつもりだつた。 だが・・・

「むーそんな事無いもん~。 だつたら大尉に食べて貰つ~

センが頬を膨らませてとんでも無い事を言い出した。

「…？ セン！？ 意味分かって言つてる…？」

「勿論だよお～。 ちやーじょりは絶対に大丈夫だもん」

「……………セン…………。 良く言つた…………。 良く言つたぜ！
！ 勝負だセン！ てめえつほえ面かくなよ…！」

「受けて立つよおおお！」

・・・・・ 大尉。 グッドラック。

センの意図は分からぬが、 じこにちやーじとせんの大尉争奪戦
が始まろうとしていたのだつた。

「……………馬鹿ばっかり」

私はそれを半眼になつて眺めて、 淹れたてのミルクティーをノン
ビリと飲んで過ごす事にした。

彼は誰にでも優しきる節があるから、 自分の蒼いた種といつや
つだ。

大尉は一度自分の軽率さを知るといい。

そう思いながら。

第10話「内部紛争勃発2」（前書き）

雨が降っていた。雨によつて制限された室内で、せんとちゅーじは何か言い争つていたようだが・・・。
俺は、そんな事より身体がなまつて仕方ない。
誰か誘つてちょっと動かしてみるか・・・。

第10話「内部紛争勃発2」

「…………」

「？ 何しているんだ魅夜？」

なんだか知らないが魅夜が気持ち悪い顔をしてこちらを向いていた。

「ううん。 なんでもない」

「ほひ。 なら、じつち見んな

「ふう優しくない」

俺と魅夜は外が雨だったので基地内にある格技場に来ていた。
100平方メートル程の広さで簡単な組み手程度なら出来そうな広
さだった。

もつとも、俺は格闘技なんてやつた事は無いからあまり関係無い
が……。

此処に来たのは魅夜に実際の型を見せて貰いながら特訓してもら
おつかと思っての事だ。

俺の見た中ではちやーー」を別にすれば魅夜は相当の手慣れっぽか
つたからな。

だが、魅夜はそんな俺の辛勝な心構えに応える事も無く、談笑し

てへるから困る。

「構つてやつてるだけマシだと思え色魔め」

また何か企んでるんじやないだらつな？ ヤツの顔を見るとかう思えて仕方が無い。

「え～魅夜はシキマじゃなこのだ～」

どの口が言つんだ、どの口が。

「まつ～」

といつあえず時間も勿体無いので適当に両手を振つたりしてみる。

間接がポキポキ鳴つた。・・・運動不足もいいところだ。

「皆の方がもつと酷いのだよ～大尉」

「皆？ もういえばＴＡＭ搭乗者以外つてこの基地にどれだけ居るんだ？」

ホキホキ

首の骨が景氣良く鳴る。ちょっと仮持ちよかつた。

隊長に、芽衣、魅夜、ちやーこ、せん、香具羅、それと菊池女史に会つただけだったので、俺には分からなかつたが、他にも何名かこの基地には居るらしかつた。

「あ～そういうえばまだ整備員達に会つてなかつたんだっけえ？　あの子達普段はずつとメンテルームに籠つてゐるからな～」

「整備員・・・それってこの前言つてた3人組つてのか？　男達だけ？」

魅夜に最初に会つた時に整備員が男だと聞いたが実際には会つた事は無かつた。

それだけ出歩かないという事か・・・。にしても、昨日食堂なんかでも会つてないって事は・・・よっぽど仕事に熱中しているのだろうか？

「うむ。　そつは言つても皆色恋沙汰には興味の無い職人馬鹿だけどね。　甘い！」

パシツ

棒立ちしてゐたと思つていた魅夜に軽くジャブをしてやると、簡単に受けられてしまつた。

「ちつ。当たらないか。　まあ・・・魅夜がそういうんならまともな奴等つて事だな」

俺はなんとなく、そのメンテルームと呼ばれる場所が俺にとつてオアシスなんぢやないかと思つてきた。別に男色趣味があるわけぢやなく、ただ「安全な場所」つぽかつたからだ。

「むむ～？　大尉は私をなんだと思つてゐるのかな～？」

「変態」

俺は拳を当てる事を諦めて、指を指しながらハツキリと言つてやつた。

「もお～や」は「可愛い女の子」って言えば〇・5秒で襲つてゐるのに～

その台詞さえも避ける魅夜。・・・やるな。

「それが悪いって言つたらなんだろうーー？」

「」の女と漫才をするのもまだ3日目なのだが、最近妙に息が合つてしまつている。

・・・人懐っこいと言えば聞こえはいいのだが・・・。何故か部屋の中が少し暑い気がしたが、別に何か意識しているという事ではない。何か・・・部屋の外側から感じるものがあるのだけど・・・。

まあ、そんな事より俺は話を戻すことにしてた。

「・・・で、監もつて、他に誰がお前以上に酷いんだつて？」

魅夜以上に酷いなんて事は無いだらつが、一応聞いてみる事にした。

「ん～？ ほら、せんとか」

俺はその名前を聞いた瞬間に右手にハリセンを装備した。

「ちゅうとー？ 今のはボケじゃなくてホントよ～。ある意味一番危険なんだからせんせいやんね～」

そういうえば、これだけ反射神経がいいならこのハリセンだつて避けれんだろうに？ ・・・シッコ!! は忠実に受けける芸人つて事か・。・。つづづく阿呆だなコイツは・・・。

「・・・にわかに信じられんつてんだよ。なんかあのへラへラ笑つてる子だろ？ まだあんまり話してないが・・・」

「ホントなんだつてばあ～。男が来るつて言つて一番最初に田を輝かしたのつてせんちゃんなんだから～」

魅夜は必死にそんな事を言つた。・・・じつも信じられなかつたが、その田は[冗談を言つて]いるような感じがしなかつた。

・・・あの子が？

いや、それより・・・

「やつしょれば魅夜。今「嘘」つて言つたな？ 他にもか？」

「ん？ 莺衣はわからんけど他は嘘そうだねえ」

「はい？」

「だから～隊長もひやーーー! も番兵羅もだつて事よ～」

「ー? マジか! ?」

「そだよ～？　ああ、大尉は「花屑」ってどういふ意味か知らないんだつけ？　花屑の「花」は「女」で、屑・・・女の屑って意味なんだぞ」

「・・・本当なら皆魅夜みたいなもんって事か・・・」

恐ろしい。これからばずっと芽衣の所に逃げ込むべきなのかもしない・・・いや、そつなるともしかしたら芽衣だって・・・。

「まあ、ウソだけど」

「何処までだオイッ！？」

俺は思った。魅夜とまともな話は出来ないのだと。そして、限りなく時間の無駄なのだと確信した。

俺の右手のハリセンが真っ赤に腫つたので、景気良く振り下ろす。

スバーン！！

うん。流石俺の自信作。良い音がする。

「ひいーとえ〜んど　あははっ　ごめんごめん　本当は・・・
・「落ちこぼれ」って意味なのだよ。花だけじ落ちこぼれてるの

魅夜の声のトーンが段々と少し低くなつたのを感じた。・・・
魅夜？

「私はこんな性格だからいいけど、隊長や香具羅は辛かつたんじゃないかなあ？ 隊長なんかね、二つ名でそのまま呼ばれてるのだよ。スクラップドフラーって。まあ、これは違う意味もあるんだけど……。香具羅は気が強いというか、プライドが高い所があるんだけど、入隊した時なんてもう顔に生気が無かったの」

「…………」

そう語る魅夜の今の顔も……生気が無いぞ？ さつきまでの元気は何処にいった？ ……何故俺にそれを言つんだ魅夜……。「此処に配属されるというのはそういうレッテルを貼られるという事。だから……皆笑う事が出来なかつた……最初は」

「……余計に信じられない話だな。 魅夜」

「あ、あははそうだね。でも、大尉には知つていて貰いたいな。私達がどうして此処に居るのかつて事を」

「……俺は……」

ただ新参者で、軍隊の事なんて何も知らなくて、ただ頭数に入れられただけの案山子みたいなもんだとと思っていた。それが昨日の作戦によつて持ち上げられているだけだと思ったのだが……。

花肩は……、彼女達は色々と事情があるようだつた。それがどういった物なのかは分からぬが、魅夜の表情を見ていると、あまり良いものでもなさそつだ。

ふと、芽衣の顔を思い出す。彼女の言葉が少ないのも……も

しかしたら何があったのかもしれないし……。

魅夜の言つ事だから全部が全部信用出来るか分からぬだらう。

「眞が～」うんぬんは他の者の株を自分と同等にして自分の評価を標準にしようとしているのかもしれないし、「花屑が～」うんぬんはもっともらしい事を言つて信じ込ませる為かもしない。

しかし・・・、わざわざ自分達を「落ちこぼれ」などと言つ必要があるだらうか？ 隊長の話等もそんな事を言つて魅夜に何か得になるとは思えなかつた。

そうなると・・・、何が本当で、何がウソなのか段々分かつてきたりような気がする。

「魅夜。 め前の言葉は分かりにくい」

「あは～〔冗談だから～〕」

とても笑顔で魅夜は言つ。 これもウソなのだろう。

本当に「冗談などでは無く、花屑の隊員」という事に何があるのだろう。

う。

俺はなんとなく魅夜の言動からそう判断した。

全くの外れでも無いと思つ。 だって

「・・・お前意外に嘘が下手なんだな」

「・・・うん。 困ったなあ～私も年なのかもね」

彼女の瞳の端が・・・濡れていたから・・・。

そういえば一度全裸に剥かれたような気がするが、それは美談にするために無視しておく。

それに、そうまになつたのにも係わらず、実際に何かされた事は今まで無かつたから・・・。

・・・・・。

「大尉」

「ん？」

そこにせんがやつてきた。

「あー！ 大尉魅夜ちゃんを泣かしてやー いじめちゃだめだよお

」

「い、いや。 別にいじめるわけでは・・・」

なんとタイミングの悪い事だらう。 こんな場面を見られたら誰だつて誤解してしまう。

「なんてウソだよお 分かってるよお 魅夜ちゃんに甘えられてたんだよねえ 大尉は優しいから魅夜もせんも大好きなんだよつ

」

せんは臆面無く大きな声で言つので、俺と魅夜は辺りを一瞬見渡してしまつた。

幸い他には誰も・・・、イナカッタ。ウン。イナイイナイ。
青い短髪の少女なんて見えない。

「ちょっとせん！ てめえ抜け駆けしやが・・・したわね！」

ちやーーは物陰から急に躍り出て、せんに向かつて真空飛び膝蹴りを浴びせようとする。しかし、せんはそれを予期していたのか上体を少し後ろにそらして避ける。

「わあーちやーーイキナリなにするんだよおービックリしたよー？」

「ウソつけ！ 私が本気で蹴りついたのに普通の奴が避けれれる・・・わけないでしょ！」

ちやーーは何故かチラチラヒトツヒトツを見ながら、せんを罵倒した。

口調が男言葉になつたり女ことばになつたり忙しくヤツだ。

「えーそんな事よりちやーーが変な喋り方だから大尉が呆れてるよおー？」

「へーひむといわねー！」

「男みたいに騒ぐと嫌われると思つてゐのー？ ちやーーは臆病だあ」

「ーーー」

「・・・」無駄だよお～「

せんの言葉に顔を真っ赤にしてちやーには殴りかかる。しかし、寸での所でやはり避けられてしまう。せんの動きが早いわけではない。だが、ちやーこの動きが遅いわけでもない。単純にせんに動きが読まれているちやー」。

「・・・せんって実は強いのか？」

なにやら田の前で私闘が始まってしまって、俺は若干その流れについていけずに魅夜に話しかけた。魅夜は、それを見ながらこめかみを押えていた。そして、呟く。

「・・・まつたく。せんの悪い癖なのだよ」

「どうこう事だ？」

「せんは決して運動が得意じゃ無いのだけど、その・・・なんていふか勘が鋭いつていうのかなあ。とにかく先を読んじゃうわけ。それなのに相手を挑発なんてして・・・遊んでる」

「ほう? それってやっぱり身体能力が高いって事じゃなくてか?」

「うん。普段はもつもつとした段差で転ぶぐらいに鈍臭いのだ。だけど、じついう時のせんは最強かもしれないやね」

「戦闘時?」

「そだね。前の作戦の時だってせんの機体は無傷だったのだよ。

前回だけじゃない。
せんはいつだってその機体に傷を負わすこ
となんて無かつたよ。
それだけ強運なのかと思つてたけど違つみ
たいだねえ」

「ふうん？ だけど、それって・・・」

「うん。ちやー」は絶対に勝てない。今ままなりね」「

魅夜の言つ通り、チャーチは何度もせんに殴りかかるのだが、せんはそれを危なげ無く次々に避けていく。

「無駄だつて言つてゐるんだよおちやーいお。雨で外行けないからつてせんと遊ばないでえー」

「へるせこひぬれこひぬれこひぬれこひー 今田ヒコト今田は絶対に貴様を倒すううううううー！」

怒れる狂戦士と化したちやーこは腕を振り回すが、その分動きが雑になつてしまつてせんは避けなくとも良いぐらいの大振りの攻撃を半眼になりながら避けていた。

「…………本当に大尉には困っちゃうよ。 ちやーー」をこんなににするんだから

ん？
せんは今何か言つたか？

「ちやー」お~いいこと教えてあげる~

「なんだあ!? 敵に塩を送るつもりか? せん!」

「ううん。反撃だよー。ひーーーJ達はね、大尉に依存して
るだけなんだよお」

「……？」

「ほひ、足がお留せだよお」

せんの葉に動きを明らかに止めてしまつたひーーーは、せんの
足払いを簡単に受けた転倒してしまつた。

「はー。せんの勝ちだよー」

「ちゅうとー何してるなのー?」

丁度そこ菜乃隊長が現れた。後ろに芽衣や香具羅も見える。
「の謔せり(?)」に詰まつてきたようだ。

「ちゅうと組手やつてただけだよお。菜乃隊長~」

「・・・・・・」

「・・・・・せん。貴女一体何をしたなの・・・」

転んだままで俯いてしまつているひーーーを見咎めて、険しい顔
をせんに向ける隊長。そんな田で見られてもせんは笑顔を絶やさ
ずに答えた。

「別に大した」とじゃないよー? ちやーーーも、魅夜も、香具羅も、
隊長も、芽衣もみんなみいいんな大尉をお父さんみたいに甘えてる
つて言つただけだもん

「

『！』

「おーおー。何言つてゐんだ？せん

せんの言つてゐる事が良く分からぬ。皆が俺を父親みたいに思つてゐる？知り合つて3日の俺を？

「大尉」。皆に言つてあげなよ。「なんでお前達は俺を名前で呼ばない？」って。全員が無意識にやう思つてゐる証拠なんだよお～？そのお陰で皆「軍人」じゃなくなつちやつたんだ　おかげしーよね～」

そう言われて隊長や特に芽衣等は黙つてしまつた。

まあ、どうだか知らないが、俺から言わしたら今まで一番その「軍人」ぽくなかった奴が言つ台詞じゃないとは思つんだが・・・。

「やうね。少なからず節度ある者の態度では無かつたかもしだいなの」

菜乃隊長は一番年長者としてか、一歩進み出て頭を垂れた。しかし、その声が・・・低い。

それがプライドによる物なのか、事実を言われた悔しさなのか分からなかつたが・・・。

せんのイメージが俺の中でガラツと変わつたのは確かだつた。会つて数日の俺でさえそつなのだから・・・。今まで一緒に居た皆はその比では無いのかもしけない。

「せん・・・貴女つて人は・・・」

誰かが呟いた。しかし、それを最後まで言わさず、隊長が激を飛ばした。

『皆。本日は自室で待機。これは命令なの』

『・・・・・』

「魅夜！芽衣！香具羅！ちやーー！大尉！千代！返事はどうしたなのー！」

『は、はいっー！』

うやむやのまま俺達は自室謹慎を言い渡された。不穏な空気が漂っていたので賢明な判断だとは思つ。

だが・・・

俺にはせんを中心にして皆がバラバラになってしまった気がした。

第1-1話「内部紛争勃発」（前書き）

せんの発言によつて氣まずい雰囲氣のまま血壓謹慎を言い渡されてしまひ。

醍禪 千代・・・。アイツはいつたい何を考えているんだ？ 同じ仲間を貶めるよつた事を言つなんて・・・。

第1-1話「内部紛争勃発③」

「いやああああ……やめてっ！ やめてええええええ……」

俺はそんな悲鳴で目が覚めた。 いつの間に寝ていたのだらつ・・・

昨日あれから血室に戻つて、特にやる事も無くて寝てしまつたのか・・・。

いや、そんな事より・・・。

此処は何処だ？

俺はベットに寝ていたのだが、両手両足が何かで固定されていた。見た事の無い天井。

顔を動かすと、隣に同じ様なベットと人影が一つ。

そして悲鳴。

「いやつー、いやつー……いやああああああ……」

声には聞き覚えがあった。しかし、それがあまりに現実味の無かつたので頭がソレを理解するのを拒否しているのかも知れない。

・・・あれは・・・ちやーじっ?

そのちやーじに組み付くよつて・・・見知らぬ男が上に乗つっていた。

確かに花肩には男はほとんど居ないと聞いたが・・・それに・・・見た事の無い服・・・軍服で・・・。

・・・敵か。

そうか、段々思い出してきた。

俺達は捕まつたんだ。

「返してよー 頭を返してよー 隊長も香具羅もせんもーー 人殺しつーー！」

ちやーじは氣丈にも拘束されながらも抵抗をしていくよつだった。しかし・・・。隊長達が・・・死んだ? なんの冗談だよちやーじ・・・。

「人殺し? 俺達は戦争をしているんだよ! 甘えた事言つてんじやねえ! お前達は負けたんだ! 敗者はそれ相応な・・・」

「ひつー はぐうー」

「代償を受けるもんだ!」

何をされているのかこちらからは見えなかつたが、多分酷い事を

されているんだろ？

・・・俺は・・・何を寝ているんだ。 何で助けない!

・・・なんでもこんな事に・・・

! !

「うやうへー! ?」

俺の声に魅夜が驚いたように飛び退いた。

ん?
魅夜?

「魅夜！　生きていたのか！」

「ふみよろ～？ 何言つてるのだ？ あれあれえ～？ もしかして
私の夢でも見てたのかなあ？ いや～ん 深層心理で意識されて
るなんて・・あいされてる」

・・・・・俺の・・・部屋?」

4日目にしてやっと自室で眠る様にしたのだが、その天井さえ見慣れない俺にとって、寝惚けた頭にはその判断がすぐに出来ないで

いた。・・・ベットの隣に小さなテーブルがあつて、俺の私物が置いてある。私物と言つても支給されたような物で、俺用の軍服や、IDカード等が入った小物入れ。それと、TAMの操作マニュアル。・・・昨日はそれを読みながら寝たんだつたか・・・。

段々と思い出してきた。

さつきのはまだの夢だつたらしい。不吉な夢を見たもんだ・・・。

スパーク！

何やうさつきから手を広げて目を閉じている魅夜に私物の中からハリセンを見つけて顔面に吊きつけてやる。

「さやうー・・・・・ううー女の子をそんな凶器でパンパン殴らないでよおー。さうせなら違うモノでパンパンして欲しいのにいー」

「万年脳内ピンクかお前はうー・・・」

確認するまでもなくやうなのだうが、魅夜は珍しくそんな台詞に反応してくれる。

「冗談で・・・・・言つてるわけじゃないもん」

「・・・・・・・」

真面目に熱い視線を投げかけてきて魅夜が身体を摺り寄せてくる。

・・・俺は魅夜をまだ誤解している？

彼女の行動は・・・そのまま本性だところのか・・・。

俺はそんな魅夜を愛しく思つわけでも無く、ただ冷静に見詰めていた。

「ジュン大尉は・・・私の事・・・嫌い?」

「そんな事は無いぞ」

即答する。別に嫌いじゃない。ただ、ついていけないだけだ。

「じゃあ・・・いいよね」

「いや、良くない」

何故か魅夜は服を脱ぎだそつとしていたので、それを制して嘆息する。

「あのなあ・・・。俺とお前はまだ会つて5日目だぞ? 何をお前をそうさせんんだ?」

「え・・・ん~熱い情熱?」

「いや・・・真面目に応えて欲しいんだが・・・」

「え~お気に召さない?大尉。うーん、いや、これは言つと恥ずかしいんだけど・・・」

顔を少し赤くして、上田遣いで言つてくる魅夜。

「おっ。 なんだ？」

あまり見た事の無い表情に期待してしまったが・・・。

「身体がうずいちゃって 「

「猿かお前はつ！？」

何度も確認してしまったが、コイツは馬鹿だ・・・。 シリアスなんて言葉は彼女の辞書には掲載不備になつていてるかも知れない。

それだけ彼女の本心を読み取る事は難しい。 いや・・・やはり本心なのか・・・。

「冗談なのか、どうなのか正直良く分からなかつた。

俺は生まれてこれまでに、誰かを好きになつたという記憶は無い。だからといふわけでは無いが、異性にどう接して良いのかといふ事を考えてしまつとどうも邪険にしてしまう癖があつた。

本当は、こうして慕われるのは嬉しいのだが、それに理由を付けないと納得いかずに確認してしまつ。 本当にどう思われているかなんて・・・わかるわけがないのに・・・。

「ああ、忘れるところだつたわ。 隊長が呼んでたよ？」

「ん？ 菜乃隊長が？ ・・・魅夜。 それを言いに来ただけだったのに寝込みを襲つてたのか？ もしかして・・・」

「わ。正解」名答へ

「用件はすぐに云えひおおおつー

スパパン！

「こよろへんー？』

今日も今日とてハリセンが唸る。

もうそろそろ強度を増しておいて方がいいかもしれない。何度も使うとボロボロになってしまつたぞ魅夜。

「あ～、そうそう一人で来てなの。ううふふ隊長
だつて女なんだから大尉気を付けて～」

「お前じやあるまいし。まあ、了解。着替えるから出て行け淫
魔。ゴーアウェイ！」

手の平を返して前に払うような仕草をしてやる。Get Out
と言つたつもりだったが少し違つた単語にしてしまつた。意味
は一緒だが・・・。

「いや。当方は構わないのだよ～。といつか大尉の生着替えや
つほよい」

狂喜に踊る魅夜にテーブルに置いておいたもう一つの武器を掴む。

「淫魔よ光になれえええ！」

ピコンッ！

新装備・PIKOPIKOハンマーMk3で殴りつける。別に黄金に輝いていたりするわけではない。工作が得意になつてきたな魅夜のおかげで・・・。

女性不信になつたら魅夜のせいだ。絶対。

「はううう・・・大尉がDxiety・・・」

何やら魅夜が目を回しながら勝手な事を言つてゐるが、必要悪だ。イチイチ突っ込んでいる俺の苦労も知つてくれ。

俺は倒れている魅夜を部屋の外へ追い出し、ゆっくりと着替える。支給された軍服は新品特有の生地の匂いと、張りのある肌触りが気持ちよかつた。

着てから改めて自分の姿を見ると、なんだかコスプレをしている気分だつた。まあ、同時に支給された短銃なんかを見るとコスプレでは済まされない重みがあるが・・・。

「射撃か・・・。今度芽衣にでも指導してもらひかな」

銃の事なら芽衣に聞いた方がいいだろうという軽い気持ちだつた。その時は、それを深く考えていなかつたのだが・・・。後で考えるとそれは間違いだという事が分かる。

何故なら芽衣は特別射撃が上手いわけでは無いらしいのだ。射撃に関しては香具羅が一番上手いらしい。

後から聞いた話なのだが。ただ、何かにつけて芽衣の事を考へてしまふ自分には自覚していた。

昨日のせんの言葉では無いが、俺も芽衣に依存しているのかもしない・・・。

俺はそんな事を考えながら、隊長が待つ司令室へと足を向けるのだった。

「失礼します」

「大尉？ 入つてなの」

司令室がある部屋のドアをノックしてから俺は中に入った。

そこには俺が始めた時に通された場所だった。

この基地には司令室と、医務室と、食堂、機械室、それぞれの自室等があった。その建物の離れにT A M格納庫があり、その裏手にはちやーこが飼育している家畜の納屋があつたりする。

基地と言つても小さな訓練場があるだけで、規模としては小さい。

それも総勢11名という所からも納得が行くが・・・。そんな

基地が最前線に置かれているという状況は納得したくは無かつた。

それだけこの基地の本部・・・。本国が期待しているのか、はたまた逆に捨て駒とされているだけなのか・・・。

「起き抜けに呼び出してごめんなさいな。 大尉に話があつたな」

「いえ、昨日一日部屋に缶詰だつたんで丁度良かつたよ。 それで用件は?」

それにしても、隊長は腰が低いな。 上官なんだからもう少し強めの態度でも構わないだろうに・・・。 それが彼女の美德なのかもしけないが・・・。

「そうなの。 昨日の件。 せんがあんな事を言つたのには理由があるの。 それを大尉には知つておいて欲しいの」

「・・・俺はせんの事はまるで知らないんだがね。 まあ、他の皆も知つているという事も無いけど、彼女とはそんなに話してないしな」

「うん。 せんは内気な性格だから自分から他人に接触しようがないの。 だから誤解されやすいの」

「ほう? あの娘が内氣ねえ・・・」

「本当なの。 せんは・・・自分を表に出すのが苦手なの」

俺よりよっぽど付き合ひの長い隊長が言つのだからそうなのだろ

うが・・・。俺にはあの能天気な笑顔を浮かべる彼女がそんなに繊細に出来ているように見えなかつた。まあ、それが表面的な表情だとしても・・・彼女の言つた事で皆が傷付いたのは事実だ。それはあまり褒められた事では無いハズだし、それを諫めたのは誰でもないこの隊長のハズだが・・・。

「確かに昨日私も頭に血が上つたなの。でも、彼女の発言は・・・言葉そのままの意味では無かつたな」

「・・・といつと?」

「あの後せんを呼び出して聞いたの。あんまり信じられない事だつたから他の誰にもまだ言つてないな。大尉。これから言つ事は妄想では無い事だけ先に言つておくれ」

「なんだよ・・・脅かす氣か?」

そう思ひのも隊長の瞳が真剣そのものだつたからだ。マジになつた時のこの人の目と声はやはり苦手だ。

「こういつ恐怖といつ心理には整つた顔立ちだつたりすると余計に怖く感じてしまうものだ。どうしてだらう?」

菜乃隊長の瞳に吸い込まれそうになりながら、俺は立ちすくんでしまつた。

「大尉・・・せんはね・・・。未来が見えるな」

「...?」

ヂ「オオオン・ パロパロパロ・・・

。 そう言つた瞬間に雷が鳴つた。 外は・・・昨日に引き続き雨か・・

ザー・・・・

そう意識した瞬間に雨音が妙に聞こえてるから不思議なもんだ。

・・・・・・・・

隊長と俺。

二人しか居ない司令室に沈黙が流れた。

「・・・未来が・・・見える?」

俺は喉の奥からなんとか声を絞り出すと、「クンと睡を飲んだ。
その音が妙に響いてしまつた。 体の毛穴から汗が吹き出していく。

る。

「そう・・・。信じられないかもしないけど・・・。せんの能
力は確かなの。 それは彼女自身が語つてくれたわ」

菜乃隊長はそれを夢物語のように空虚に語る。

その内容が・・・最悪の内容だつたからだろう。

せんは言つたやうだ。

「！」のままでは全員が・・・死ぬ」と・・・。

俺は「死」とこう単語を反芻しながら今朝見た夢を思い出していた。

あれは・・・未来視だったのか！？

「せんは・・・」

「え・・・」

隊長が呟いたの一瞬氣付かずには聞き返す。少し混乱してしまつていて。いや、少しづじやないな・・・。こんな突拍子の無い事を信じるという方が・・・。

「せんはね・・・。未来を変えようとしたらしいな」

「未来を・・・変える・・・」

そう思つても、隊長の態度からそれが現実に起ころうとしている事の予言である事を物語つっていた。俺の知らない彼女だけが知つてゐる確証があるのであらう。

「せんは言つたわ。私達が軍人では無くなつていると・・・。
それが悲劇を招く事を・・・」

「そんな・・・どうすればいいんだ！ せんはどうなるのか具体的に知つてゐるのかー？」

「…………分からない」

「分からないつて！ そんな無責任な事あるかよっ！」

「バン！」

「ひつ！」

「あ・・・すまん」

つい熱くなつて思い切り床を踏み付けてしまった。衝撃に身を任せると、なんて恥だな俺……。

「隊長に言つても仕方ないか……。せんはどじだ？」

「…………自室なの」

「分かつた。直接話を聞こいつと思つ。いいよな？」

「うん。私も何が何やら分らないの……。大尉……ごめんなさい」

隊長という職位に就いているが、菜乃隊長もまだ年頃の女の子だ。耐えられなくなる事もあるだろう。だからそれを責めるような事は俺はしないつもりだった。

「だから……。

「大丈夫。こういう時こそ隊長の腕の見せ所だろ？ 頑張ってい

「うせ。 なつ？」

菜乃隊長の頭を撫でてやつた。上官に、しかも年上にそんな事をして怒られるかもとは思つたが、そうしなければ今にも泣き出しそうな感じだつたから……。

「大尉……」

田を細めて撫つたそこに微笑む隊長。

笑うと……可愛いな流石に。

軍人つて言つても元々はただの女の子だ。 人よりちょっとTA
Mなんかの操縦なんかが得意なだけの。

いくらそんな世の中だからって、彼女が全部背負わなければいけないわけでも無いハズだ。

「じゃあ、俺ちよつと行つて来る」

出来るだけ笑顔でそう言つと、隊長は何も言わずに頷いた。

俺はせんの自室へと向かつた。

「せん。 僕だ。 ちよつといいか？」

「大尉？ ちょっとまつてねー」

「UCHIYO, ROOM」と書かれた部屋の表札を見下ろしながらドアをノックする。

そういえばせんの本当の名前は「かよ」だったな。すつとせんって呼んでるので忘れがちだが・・・。

部屋の中からこまひとつ緊張感に欠ける声がして、暫くしてからドアが向こうから開かれた。

「どうぞ大尉いへ せんワールドへようこそおへ

「邪魔するだ

じうも同じようなノリにはなれずに普通に中へ入る。それにせんは少し不満な顔をしているが、知った事では無い。騒動の張本人であるせんに警戒は怠らないようじょりと想つ。

「どうしたのや～？ 怖い顔だよや～。あ～なんか腐った物でも食べちゃつたんでしょうや～？ 大尉は食い意地が張つてゐなあ～

「せん。馬鹿の真似はやめろ」

これまでの事を考えると、せんのこの態度は全て演技だと思えた。この不自然に明るい仕草は作つているんだ。その下の「顔」を隠す為の隠れ蓑なんだ。

「うぐう・・・。馬鹿じゃないもん～

なおもせんはその「演技」を辞めようとしなかった。

「こうなつたら化けの皮を剥いでやる。」

「そうだな。せんは馬鹿じゃない。それは分かった。だから話してくれないか？お前の知っている未来の事を・・・」

「なんのことお〜？」

指をくわえて小首をかしげるせん。馬鹿にしているのか！

「せん！俺の言っている事を聞け！お前は未来が見えるんだろう！？それで・・・皆が死ぬと言ったそうじゃないか！それはどういう事だと聞いているんだ！」

俺は力の限り叫ぶ。その台詞に全力を掛けていたので、その時のせんの表情がどうだったのか良く見ていなかつた。だから・・・せんの声だけを聞いて俺は顔を上げた。

・・・誰だコイツは・・・。

「・・・。隊長が喋つたんだね」

・・・せん？

せんの瞳から光が消えてしまつていた。それは猛禽類のような鋭い眼光を持ち、先程までの大きな瞳からすると全くの別人になつていた。背筋が凍るよつた視線の彼女は自嘲するよつに笑つとその瞳で俺を捉えた。

「・・・未来を他人に話すとそれだけ運命は強固になるといつてた。

・・。 軽はずみな事をしてえええつーーー

「ーーー」

「・・・どういう事だつて顔だねえ・・・。 もう知っちゃつたんだから仕方ないから教えてあげるよ。 運命というのがあるんだよ。 それは誰にも変えられないような未来への道筋なんだよ。 だけどね、そんな運命を見る事が出来るという事は、その未来の結果を変える事だつて出来ない事も無いんだよ」

「そ・・・そつか」

なんとか相槌だけは打てた。せんの気迫に言葉が出なくなつてしまつている。

「それがどうして強固になるかつて！？ 運命つていうのはねえ！ 必然の積み重ねなんだよ！ それが幾千と積み重なつて運命を形作るんだよ？ ただね、それを理解してない人にとっては・・・ 運命はどういう物になるか分かるかなあ？」

「・・・偶然？」

「そう！ 大尉は頭がいいよ！ そうやつて偶然が積み重なるんだよ。 だけどね。 偶然を偶然だと思わなくなつてしまつたら・・・ 。 それは必然になるんだよ！ それが一人や二人ならまだいいんだよ。 だけど、3人、4人と増えていくと・・・ それはもう偶然なんて呼べない。 必ず起こつてしまつ運命になつてしまつんだよおー！」

「・・・」

話が急変し過ぎて頭がついていけないが……。簡単に言えばせんは未来が見える。それが自分だけ見えているなら騙し騙して運命を変えられると言っているのだ。だけど、俺や隊長が知ってしまった事で……運命が変えられなくなってしまったと怒つているのだ。

「あんまり理解しないみたいだけど、もう駄目だよ！ 皆……皆死んじゃうんだっ！ あははははははははは……」

「せん…………」

せんは狂ったように笑い出す。もつ手遅れだと叫びながら……。

俺は……せんをやはり誤解していたようだ。

別に彼女は皆が嫌いだから暴言を吐いたわけじゃない……。

「あは……あはははははははは……」

せんは……皆が大好きだから……死なせたくなかつたから……汚れ役になろうとしていたのだ。それが運命を変える手段だったハズだったのだ。

それなのに、俺達に話してしまつたせい……せんはただのピエロに成り下がってしまった。

「あはは……はは……は……う……う……ううう……
やだよお……死にたくないよお……死なせたく

ないんだよ……」

せんの笑い声は次第に嗚咽へと変わつていつた。

俺はそれを慰める事も、声を掛けることも出来ず、ただ呆然とするしかなかつた。

「…………」

「…………」

「なあ、せん」

「…………なあに大尉い」

「本当に」……未来は変わらないのか？　お前に本当に未来を見る力があるのか？」

「大尉。今まで未来が変わつた事は一度も無かつたんだよ……。戦闘の時だつて……せんが無事なのも全部見えていたからだもん……」

「やうか……。昨日のちやー」との時もやうだつたんだな？」

「うん……。大尉。事実を確認しても結果は変わらないんだよ」

「せんか・・・

その後、せんにびりゅせつて全滅したりするのかを詳しく聞いてみた。すると、明後日中に戦闘があり、その戦闘で俺達は全滅。捕獲され・・・殺されてしまふらしい。

俺が今朝見た夢にとても似ている事をせんに話すと「それはせんが見た未来視を大尉が読み取ったかもしない」と呟つ。

「全滅しか・・・未来が無いのか・・・」

「うん・・・運命は変わらないんだよ。 どりの考へても・・・同じ結末にしかならないんだよ」

運命は変わらない・・・。 本当にやうなのだらうか・・・。俺はそれを信じくなかった。 当たり前だ。 誰だつて死にたくは無い。 何か・・・何か手は無いのか・・・。

「・・・ちやーー」の時つてその運命を思い出しながら・・・避けていたのか?」

「もちろんだよお。 大尉・・・もうこいよ・・・」

せんは記憶力が良いみたいだな。 僕だつたらそんなものを見たつて体がついていかないし、忘れてしまうだろ。 頭の回転が速いんだろうなきっと。

しかし・・・。

どうしても、全員死んでしまつ未来しか無いのなら・・・。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ん？　までよ・・・。　そうか！

ああ、なるほど。

全滅するしか無いのか！

「・・・・・・なら、いつその事全滅するか」

「・・・・・・自暴自棄だよ大尉・・・」

「いや、せん。 分かったよ。 運命つてやつが」

「大・・・・尉？」

せんがキヨトンとして俺を見てくる。 当然だ。 さつきまで同じように死んだような顔をしていた奴が全開の笑顔で笑っているんだから。

「ついでだ。 お前の呪いも解いてやる。 俺に任せろ。 セン」

「・・・・？ 大尉？？ おかしくなっちゃつたあ？」

「大丈夫だ。 そうと決まれば準備だな。 センの予言の当口は明日だつたな？ それまでには終わらせる」

「・・・・・・？」

?マークを浮かべ続けるせん。

俺は一つとある作戦を思いついた。

それが本当に効果があるのかは分からぬ。
員死ぬだけだから、駄目で元々だ。
効果が無ければ全

俺は作戦を決行するために番具羅の部屋に行くこととした。

第1-2話「内部紛争勃発4」（前書き）

せんによる「予言」によって花肩が全滅するという未来を告白された俺。皆死ぬなんて・・・絶対に嫌だ！ さてよ？ もしかしてなんとかなるかもしない・・・。俺は「作戦」を決行する為に情報を集める」とした。

第1-2話「内部紛争勃発4」

天宮院 香具羅。

花屑メンバーの一人。

醍禪 千代同様にあまり話していないのが、だからこそ知つておかないといけない事があった。

直接話をする為に俺は「KAGURA, ROOM」と書かれたプレートを眺めながら、その扉をノックしてみる。

「ンン。」

・・・・・

数秒待つたが反応が無い。

留守か?

「あら? 大尉? 何をなさつているの?」

「おっ? ああ、やつぱり居なかつたのか いい!?」

「? どうなさつたの?」

「い・・・いや、別に・・・」

「変な大尉さん。 私に用があつたのよね? 何?」

「あ・・・えーと・・・」

「イラツ！ 男だったら田を見て話しなやこよー。何処みていらつしやるのー!?」

勘弁してくれ・・・。

香具羅だったのだが、どうも彼女は浴場へ行っていたらしく、思いつきり風呂上りだつた。だからとても薄着で、田のやり場に困つてしまつただけだ。芽衣や魅夜なんかに比べて女らしげ身体つきをしているのでどう見てもいやらしい。

タンクトップにショートパンツ姿の香具羅は俺の視線が泳いでる事に腹が立つたように立正立ちしている。そんな事すると余計に・・。

「あ、あんなあ香具羅。俺も男だし・・・ちょっと気を使って欲しいんだが・・・」

「はあ？ 何を言つてこらの？ ・・・・大尉。貴方まさか・・・」

やつと香具羅は氣付いてくれたようでも自分を抱くよつて腕を組んで後ずさる。

「いや、断じていやらしげ氣持ちだったわけじゃないぞ！ 信じてくれ！」

「・・・私とした事が・・・。もう・・・大尉はエッチね！」

「理不尽だ……」

誤解満載で香具羅は頬を赤く染めていた。男として当然の反応なんだから仕方ないじゃないか。俺が悪いんじやない。悪いのは生理現象だ。……激しく自己嫌悪にかられてしまいそうだ……。

「……まあ、いいわ。」Jリド立つても仕方ないし、中に入る？少し散らかってるけど……

「あ、お、おお。そうだな。お邪魔するよ」

俺の頭の中の辞書が誤変換を繰り返していた。魅夜じゃあるまいし……。部屋の中に入るだけだって。何考えてるんだ俺は……。

何を考えたのかは言いつづもりはない。

香具羅の部屋は芽衣等に比べると大分変わっていた。なにやら少し目が痛い。

ベットやテーブルは標準で設置されているみたいだが、私物の量が絶対的に違った。

洋服等を入れるクローゼットなんかもあり、テーブルの上にはクマのぬいぐるみ。

・・・女の子の部屋だった。

「何よ大尉。 クマが気になる?」

「あ、いや・・・。 可愛いクマだなと思つてな」

テディーベアのようなクマのぬいぐるみはそれ一体だけだったが、とても大事にされているようで赤いリボンまでつけてテーブルに鎮座していた。少し少女趣味かとは思ったが、こんなぬいぐるみぐらいは普通にあるものなのだろう。香具羅の事はあまり知らないが、それが彼女の性格を物語っているわけでは無いのだろうし・・・。

「わ・・・私がヌイグルミを持つていたら悪い?」

「いや、いいと思う。 誰かからの贈り物か何かなんだろ? 香具羅の趣味じゃないんじゃないのか?」

「・・・・・そ、そりやね~。 私の趣味なんかじゃないわよね? 大尉の言う通りに貰い物。 昔父に貰つた物なのよ」

ポンポンとヌイグルミの頭を叩きながら香具羅は分かり易い反応を見せた。いや、俺には分かったというべきか・・・。最初はどもつていたが、後は自然な感じに喋つていたので最初はウソ、後は本当なのだろう。

それは分かったのだが、俺は彼女を辱める為に来たわけじゃない。ここは知らないフリをするのが得策だらう。

「そりやうか。 別に香具羅がどんな趣味があつても軽蔑はしないつもりだったけどな。まあ、そんな事より、聞きたい事がある

んだが・・・

「そり・・・なの? あ、うん。何、聞きたい事つて?」

軽蔑しないといふ言葉に反応していたのを気付かないフリをしながら、俺は香具羅の視線を指先に集中させるように田の前で左右に振った。それを「?」というマークを頭に浮かべながら田で追う香具羅。

「じゃあまずはスリーサイズから」

ドゲシッ!!

「殴るわよ大尉っ!」

「蹴つてから言わないでくらはー・・・」

ちょっととしたお茶目に容赦無く顔面に蹴りをくれる香具羅。蹴りが早すぎて仰け反ることも出来なかつた。・・・こんなのを避けていたのが魅夜は・・・。

「ああ! 大丈夫? 大尉・・・」

自分で蹴り飛ばしておきながら心配そうに覗き込んでくる香具羅。

「魅夜みたいな事言つからつい身体が動いてしまつたわよ・・・。
ああ・・・可哀相・・・」

「むぎいっ!? ムググ・・・」

涙目になつて俺の頭を抱きしてくる香具羅。俺は香具羅の胸圧（？）で圧迫されちと苦しい。

「～～～！ ふはあっ！」

少し幸せな状況だが、息が出来ないのは辛いので泣々俺は香具羅を突き放した。

「ま・・・まあ、ボケはこれぐらいにして、香具羅にTAMについてちょっと聞きたい事があるんだ」

魅夜のせいでのシリアスにならないといけない場面でもふざけてしまつ癖がついてしまったのかもしない。・・・元々じゃないんだからな？ 別にスタイルがどうとかそんなのは関係ないつもりだしな。・・・本当だぞ？

それより、そろそろ真面目に聞かないとな。

「・・・あら？ 私に聞くより整備員に聞いた方がいいのでは？」

「いや、基本的な構造とかそういうのを聞きたいんじゃなくて、それぞれの機体の特徴とか、香具羅の特技なんかを聞きたいんだ」

「ああ、そう？ TAM-01から順番に・・・。決戦用、近距離用、中距離用、調整用、長距離用、決戦機補助用、凡庸となつてるわ。大尉の機体はヒメコリ・・・隊長機の補助役ね。私の機体TAM-05キキヨウは長距離用なんで射撃等が得意な機体ですわ」

「ん？？ 芽衣の機体が長距離じゃないのか？」

「性質と装備はそうね。でも、芽衣がカスタマイズしたというだけで、実際は他の機体のスペアのような役割の機体なのよ」

「ほう・・・。それは使えるな」

「え?」

「いや、じつちの話。なるほど。ちなみに、香具羅は他の機体に乗った事はあるのか?」

「?? 大尉? 何を聞きたいのか分からぬわ? ええ、乗った事はあるけど・・・」

質問の趣旨が分からず、香具羅は困った顔をしていた。勿論分からぬように注意して質問しているのだから分かつてもらつても困る。

せんの言つていた「3・4人と偶然を知る者が増えると運命は強固になる」という言葉からの行動だが、こんな事で回避できるかは疑問だつた。

ただ、これだけは先に言つておこう。

俺は死ぬつもりは無い。もちろん、他の誰も殺させやしない。
俺の考え・・・というか勘だが、それが間違つていなければ・・・
なんとかなるかもしれない。

いや、なんとしてもそつとせる。その為には皆の協力が必要だ。
ただ、事情が話せないというのが面倒だが、離せないなら話せな

いなり」「どうにかするしかない。

今回の作戦は、芽衣、香具羅、魅夜、ちやーじの四人に掛かっている。

「良し。 とりあえずそれだけ分かれば問題無い。 後はアドリブでなんとかなるだろ」

「？？ 大尉？」

「ああ、ついでに香具羅の階級つて聞いてないけど何なんだ？」

「そ、そんなのどうでもいいでしょ…」

「お？ なんだ？ 階級は聞いちやいけなかつたのか？」

「いや、別に言いたくないならいいんだけどな。 ちょっと聞いてなかつたと思つただけだから」

「…………」

「うん。 階級なんて気にするのは男の悪い癖だな。 それがどうだろ」と香具羅は香具羅だからな」

肩書きがどうだからと言つて、人の能力が格段に違つてくる事などあるわけがない。 そんな物を気にするのは自分に自信が無い奴のする事だ。 階級という言葉を聞いた瞬間の香具羅の顔は悪戯をして見つかってしまった子供のような顔だつたから、余計そう思えてしまった。

俺だつて大尉なんて地位を『えられて』いるが、ほんの数日前まではただの学生だったのだから、人の事は言えない。

ただ、そういう肩書きによって態度が変わってしまうのは本當で、新参者の俺がこうして警戒も無く部屋の中に入れるのはその肩書きによるものだし、それが無ければ俺もこうやって偉そうに話してはいなはずだ。

特に上下関係に厳しい軍隊等だと尚更の話だつた。

今更だが、そんな傲慢な考え方反省するように俺は言ひついと、香具羅は、魅夜のような目で俺を見ていた。
ん？・・・魅夜のような？？

「さ・・・流石大尉！ 私が惚れ込んだだけの事がある男性です！」

「はい？」

「あ・・・・・えと・・・いや、違うつてば、だから、あの・・・

・・・・・なんなんだ一体。

魅夜、ちゃーこに続いて香具羅までも！？ 僕が何かしたのか！？

「さ、最初は男なんて皆一緒だと思ったのよ？ だけど、大尉は優しくて聰明でいらっしゃるから・・・。いや、何言つてるのよ私！！ たたたたた大尉！？ 変な意味じゃなくて尊敬してるって意味なんだから勘違いしないでよねつ！？」

・・・そこまで慌てんでもいいだろうに・・・。

なるほど。尊敬か・・・。それにしたってそんなに大した事はしてないつもりだし、香具羅との接点はこれまでほとんど無かつたハズなのだが・・・。もしかして、たまに感じる視線は香具羅だつたのか？

分からぬいが、今までの行動を見られていたという事だろ？
暴走しなくて良かつたぜ。まあ、別に暴走しようと思わないが。

「分かった分かった。そういう事にしどこでやる」

「な・・・何よその言い方！ わかつくわーー！」

「いや、可愛こらしこって叫つてゐるんだよ」

どうもシンデレカシンギレか分からぬいが、あまり素直になれない性格のようだ。そう思つとなんだか親近感が沸いてきてしまう。俺もどうりかと言えばあまり素直な方じやないから・・・。

「……・・・・・ば、馬鹿あ！ しょうもない事言つてないで用件はそれだけ！？ じゃあさつわと出て行つてよー」

「ふ」おうつー。

香具羅は上段回し蹴りを俺の胸に叩き込んで下さった。その威力に俺はそのまま出口まで吹っ飛ぶ。なんて脚力だおい・・・。

扉まで飛び、その反動で扉が開いた。俺はすぐに立ち上がる事も出来ないダメージを受けて床に倒れこんでしまった。それを覗き込む人影が一つ。

「…………馬鹿」

瀕死の俺にトドメの一言を吐いて、その者はその場を立ち去つてしまつた。

髪を左右に縛つて何処か生氣の無い無愛想な顔。あれは芽衣だつた。

「……アイツ何してたんだ？」

タイミング的に偶然にしてもこんな場所に芽衣が居た事に訝る。昨日謹慎を言い渡されているので皆自室から出歩かないようにしているハズだつたのに・・・。謹慎自体は昨日だけだつたが、あまり積極的に動き回るのは理由が無ければしないような気がした。

だつて、芽衣は手に何も持つていなかつたし、風呂上りだというわけでも無い。ちなみに芽衣の自室は歩いていつた方角とは反対方向だつた。

芽衣は何処に行こうとこうんだ？

「香具羅、すまん。また来る」

それだけを言い残して俺は芽衣が歩いていつた方へ後を追う事にした。

芽衣が歩いていつた先は、離れにある格納庫だつた。

――――

TAM格納庫。

TAMと呼ばれる人型のロボットがある所だつた。

体長8m程の機体が置かれているので、冗談な程に屋根が高い。初日と出撃の時に来たが、あまりゆっくり見て無かつたのでそこにある7機のTAMが並んでいる姿は改めて見ると圧巻だつた。

薄いピンク色の機体のTAM-01ヒメコリ（甘美）

赤い機体のTAM-02ボダイジュ（熱愛）

紫の機体のTAM-03モクレン（自然の愛）

黄色い機体のTAM-04キザクラ（気品ある行いは素敵）

緑の機体のTAM-05キヨウ（変わらぬ愛）

黒の機体のTAM-06オニコリ（莊厳）

白い機体のTAM-07ヒナギク（無実・優しさ）

それぞれの機体の前に花言葉が書いてあつた。

04は確かせんだったか？ 一人だけ良く分からぬ花言葉だな
・・。

それに確かにキザクルナヒ・・・・ギヨウハ「わ」てお前じやなかつた
か？ 語呂だけで付けたんだうしなきつと・・・。

そんな事より芽衣は・・・。

「・・・・・・・

いた。

芽衣はヒナギクの機体の丁度肩の辺りに登つて何かしてこぬよう
だつた。

「お～い芽衣～！

「・・・・・・・

俺の声に気付いて手を振つてゐる。 5 m程も離れていないので
そんなに大きな声を出さなくともいいだらうが、一応だ。

「そこので向してるんだあ～？」

「・・・・・・・

ハコン-

芽衣が何か手招きしたような動きを見せた。

登つて来いといふのだろうか？ ・・・いや。

「？ いつ！？」

ガシャーン！ カランカランカラ・・・

何だ！？ 何か落ちてきたぞ？ ・・・スパナ？

「・・・・・・ 残念」

「殺す気があ―――――？」

どうやら芽衣が持っていたスパナを投げつけてきたらしい。落ちているソレを拾つて見ると、中々重量があつて、こんな物が頭部にでも直撃したら無事では済まない。

・・・しかも今小声で「残念」だとか言つてなかつたか！？

「なんだよ？ 何か怒つてるのか芽衣？」

遠くに居てはラチがあかないので俺もヒナギクの肩へ登ろうと梯子か何かを探す。すると、芽衣が使つたのであらう梯子がヒナギクに立てかけてあつた。

その梯子を掴んだ瞬間、梯子が一いち方にむかつて倒れてきた。

「おわつ！？」

ガツラアアーン！-

すぐに上を見ると、芽衣が手を前に突き出した格好で俺を見下ろしていた。

「…………近づかないで」

「芽衣…………」

とても冷たく言い放たれる拒絶の言葉。 今まで若干そういう事を言われた事があるが、今日の芽衣はいつもより敵意が明確に表れていた。

・・・本当にどうしたんだってんだよ・・・。 僕は芽衣に何かしたか？ 確か昨日はそんなに話してないが、だから拗ねているとか？ いや、違うな。 そんな事を怒るような奴じやないだろう多分・・・。

知らない間に・・・芽衣に嫌われるような行動をしていた？

香具羅とは逆か・・・。

考へても答えは出ない。

仕方無いのでここから話すことにして。 梯子を落としたといつ事は芽衣は逃げられない。 此処は勝手に喋らせて貰おう。

「芽衣！ いがみ合つてる場合じゃないんだ！ お前の力が必要なんだ。 話を聞いてくれないか？」

「…………今は話したくありません」

「いや、そんな事言つてる場合じゃないんだよ！ 皆が死ぬかもしれないんだぞ！ いいから聞け！」

普通に話していたらそのまま口が暮れてしまひ。 意地悪な気が

したが、皆の命を盾に話をわたすのが手っ取り早いと踏んだ。

「…………大尉。それは本当?」

「こんな最低なウソをついてどうするってんだよ! 僕は大真面目だ!」

「…………分かった。今降りる」

「え……? わあ、芽衣! ?」

タツ!

芽衣はそう言つと、ヒナギクの肩から飛び降りてきた。5m以上の高さからだ。3階ぐらいの高さからそんな事をすれば硬いコンクリートに赤い血の花を咲かせてしまう事になつてしまつ。

俺は着地地点へ駆けて芽衣を受け止める為に手を広げて待つた。

「つわつー?」

「ー?」

それをどうにか受け止める事が出来たが、その反動で倒れこんでしまつ。

「あたたた・・・芽衣。怪我は無いか?」

「・・・・・・大尉・・・必要なかつた・・・・・んう・・・・

「何?」

「『れぐら』の高やは無問題……むしろ大尉邪魔……は
ふつ……」

「モーマンタイって……。一応俺は心配してだな……」

「つう……大尉ワザとやつてる?」

「何がだ?」

「…………触つてる」

「? つてうわああつ!?」

倒れこんだ拍子に芽衣の胸を驚掴みにしていたらしい手の平を、
言われて初めて気が付いたなんて言い訳は通用するだろうか?
とんでもなく不幸な事故だという事を声を大にして言いたい。
起き上がるうとしていて手を突いた所が芽衣の胸だっただけの話
だ。

「…………やつぱり女の敵」

「やつぱりつて何だ!?」

怒りか照れからか分からないが、顔を赤くして涙目になつて恨み
がましく言つてくる芽衣。

確かに手がとても幸せな感じだつたが、断じて故意じゃないので
すよ芽衣さん?

「魅夜もちゃー」も香具羅も……大尉は節操を知つた方がいい

「え……いや、なんの事だよ」

「…………無自覚……。天然ジゴロ……」

どうやら芽衣は俺が魅夜達に色目を使っていると言いたいらしい。
全くもって誤解だ。

そんな器用な事が俺は出来ないぞ？

「スマン。 静かに俺を評価するのはやめて欲しいんだが……。
魅夜とかは勝手に言つてるだけだろ？ 俺は何もしてないんだか
ら」

「…………それを絶対に魅夜達に言つたら駄目。 大尉……
・・最低」

最低。

芽衣に失望したように見られて俺は言葉の意味に気が付いた。

どんな理由にせよ、好意をもつてくれている相手に「勝手に」は
無いだろう……。少し増長していたか……。

「……なるほど。 失言だった……」

俺は素直に頭を下げる。 それで失言が消えるわけでは無いだろうが、自覚した事は分かつて欲しかった。

「うん。 大尉の美德はその柔軟性だと思つ

そう言つと芽衣は頷いてくれた。柔軟性か・・・。

成り行きで軍隊に編成され、成り行きで実戦を経験し、成り行きで死に向かう運命に抗おうとしている。芽衣の言つ「柔軟性」が無ければ何処で錯乱してもおかしくなかつただろつ。

だが、俺はそやはならなかつた。何故なら俺にとつてこの世界はどこまで行つても夢のような感覚で、現実味が今一つ沸いてない。夢では無いのは色々と明白なのだが、心の何処かで元の世界に戻れる事を諦め切れていないのだろう。初日に菊池女史には「戻れない」とは言われたが、それを信じる・・・勇気が無いんだと思う。

「・・・・・でも、魅夜達がああなつたのは大尉の責任。だから責任を取つて誰かと付き合つて欲しい」

「いい！？」

突然何を言い出すんだこの娘は！？

「・・・・・大尉は魅夜達が嫌い？」

「いや、嫌いじゃないが・・・。それはちょっと・・・」

芽衣の言つ責任といつのはなんとなく分かるが、それは違うだろ。

生まれてこの方、女性と付き合つた事等一度も無い俺にはそんなに軽はずみな事はしたくない。

「大尉。 無責任」

だが、そんな事をいつとドン・ドン芽衣の中で俺は最低な男になつていぐらし。

仕方ない・・・・。いつなつたら・・・・

「あ～そんな事言われても、俺には好きな女アーティストが居るしなあ・・・・」

「・・・・・・・・ホント?」

ホントなわけが無い。 口からでまかせだつた。 今は誰かを好きになるなんて想像も出来ない。

「ああ、もし今回の作戦が終わつたらそつて告白してもいいぞ」

だからこんな事だつて逆に言えりやうわけだ。

「・・・・・・誰?」

「教えるかつて。 作戦が終わるまでな」

誰でも無いなんて言つたら俺の体面は底辺まで落ちるんだろうな。
・
・
・

だが、後になつて気が付いたが、この言い回しも余計に自分の首を絞めている事にその時は気づかなかつた。

「・・・・・・やつ。 ヒカルで作戦つて何?」

「ああ、やつと本筋に入れた・・・・。 あのな、実は・・・・」

俺は芽衣に事の事情を話す事にした。

香具羅と違つて芽衣に話したのは相談役が欲しかったからだ。

俺の考えが間違つていなか。 それと技術的に可能なのかが知りたかったからだ。

俺の立てた作戦はある種無謀な作戦だったから、少しでも成功率を上げたかったというのもある。 それに、芽衣には話しておきたかった。 隊の中で一番信頼しても良いと思っているからだ。

芽衣の考え方は俺に似ている所があると感じていた。 俺の考えは彼女には否定されない。 そんな理由も無いのに安心してしまつような感じが不思議としてしまつ。

拠り所だな。 一種の。

「…………どうだ？」

「…………大尉。 それは危険過ぎると思うし根拠が無い。
だけど……やってみる価値はあるんだと思つ

思つた通りといふか、芽衣は俺の考えに賛成してくれた。 後は・
・ 実行する為の準備が必要だ。

俺と芽衣は「生き残るための作戦」を実行するため、花肩の基地内に駆け回るのだった。

俺達の・・・花屑の運命の日は明後日だった。

第1-3話「内部紛争勃発5」（前書き）

全滅予定日まで後2日。 それまでの準備は少しづつ整ってきた。

後は、最終調整だけだ。

運命なんて俺が塗り替えてやる！

第1-3話「内部紛争勃発5」

深層心理とか良くな言つヤツがいるが、それを自分で説明出来るようなのは実際は違う気がする。無意識でやつてしまふ事と意識的にやつてしまふ事は実は同じ事だ。何故ならどちらも自分が行動してやつた事には変わりが無いからだ。

だから「無意識」を言い訳にするヤツは気を付けた方がいい。もしそれが、身体が勝手に動いてしまったレベルでも、結果は同じなのだから、四の五言わずに謝るか挽回るべきなんだ。

まあ、それが単なる事故で済ませれるような事なら笑つて許せるんだがな……

一つ一つ装備を確認しながらTAMI-01を起動させる。^{タム}

流石は隊長機というか、コックピット内部が他の機体には無いボタンやらレバーが幾つかあった。操縦桿等は変わらないが、その操縦桿の前部に『やつちやえすいつち1』と白い文字で書かれた赤いボタンがあった。

「……手書きかよ!」とか突っ込んだら負けなんだろうな。

今更だが、俺は菜乃隊長の姫百合に乗り込んでいた。もちろん隊長の残り香を嗅ぐ為だと何んどかでは無い。

まあ、最終チェックみたいなもんだな。
他の機体が問題無く動かせればいい。

隊長曰く、機体それに搭乗者の癖が付いてしまっている事もあるらしいが、姫百合は素直に指示を聞く。オペレーションシステムは変わったが。

「ヒメコリ。 残り稼動時間は？」

「ハイ、大尉イ。 ラスト1500秒、ナノ」

これである。オペレーションシステムの音声が菜乃隊長の音声を使っているようだ。少し音の繋ぎが悪くて違和感があるが、気にしないでいると隊長が一緒に乗っているかのようで落ち着かない。「音声編集ソフトの応用か…。 簡単に出来るっぽいな」

ある一定の音域を登録するだけで後は自動で設定されるらしい。だから、今流れてる音声は菜乃隊長が俺用に登録したのだろう。遊び心が過ぎるんじゃないのか隊長？

なんだか隊長の声は落ち着いているというか、緊張感が無い。それだけで隊長として、上高としてはマイナスなんじゃないかと思う。話を聞くと皆命令無視が多いらしいので間違いでも無いだろう。

偉そうに言つつもりは無いのだが、それが文字通り命取りになってしまふかもしれないのならば仕方無い。調整させて貰おうと思う。

上高やら、立場なんてのは知つたこっちゃない。 それより生きる事が大事なのだから、その後に処罰があるっていうならいくらでも受けてやる。

俺はせんの行動や言動を観察して、自分なりの仮説を立ててみた。

それは、彼女の能力が「眞実」では無いという事と仮定した仮説だ。

普通に考えれば「予言」なんてものはこの世に存在するわけが無い。

だから、せんが考えた事が実際に起こるという事は・・・、それだけ彼女の頭脳が優れているというだけの話だった。彼女自身それを理解していない。それだけ頭の回転速度が速いのにも関わらず、それを自覚できていないというわけだ。

そして、そんな事柄を事細かく覚えているという記憶力。それだけ見ても常人とは言い難い。

ただ、そんな彼女の予想を上回るような事が起こらない程、正確な予言（予想）であるので、誰も疑問に思わないという事みたいだが・・・。それを出し抜くのは簡単だった。

彼女の予想不可能な事をすれば良い。

俺はまず、TAMのパイロットの特徴に目をつけた。

芽衣は長距離射撃が得意なのに、彼女の機体はその専用の機体では無いという事。

香具羅の機体は長距離射撃用ではあるが、彼女の性格上、それよりは接近戦の方が良いという事。

「ちやー！」は性格と機体の相性は良さそうだが、どうも突貫する癖があるので、少し後ろに下がっていた方がいいだろ？と思つ。

せんは、そのままでいい。むしろ、そのまま無こと出し抜けない。

魅夜は・・・、ある意味オールマイティな感じがするのでビリーハン配置ができるだらう。

一番重要なのは隊長と俺だ。隊長機に俺が乗る事により、戦況を操作させてもらおうかと思つたのだが、何分実戦はまだ一度きりで、今日動かしてみてどうなるかという問題がある。

ついでに、それを隊長が承認するかという事もあるので、とりあえず今日中になんとかしたいと思つ。

ピーンピーンピーン！

【緊急指令緊急指令！ 本基地に未確認の機体が10機接近中！ 敵国の物の可能性が高い！ 各TAM搭乗者は出撃してください。繰り返す】

「な・・・!? 襲撃の予定は明日じゃなかつたのか！？」

警報が鳴り響くのを聞きながら、内心少し喜んでしまつてゐる俺が居た。その時点でせんの予想は裏切られてしまつたのだ。こちらが何もしなくて、運命は変わつたらしい。

・・・後はこれを殲滅すれば・・・！

暫くすると格納庫にみんながやってきてTAMに乗り込む。

それを確認してから俺は隊長機に乗ったままスピーカーを使って号令した。

「皆！ 敵は正体不明なの！ 気をつけて行くなの！」

『了解！』

・・・先程の音声編集ソフトの応用で、俺の声を菜乃隊長の声に変えてみた。乗る機体が無くて俺のTAM-06に乗ったハズの菜乃隊長が吹き出してなければいいが・・・。

ちなみに、次に出撃がある場合は各自乗る機体を変えて欲しいと言つてある。

だから多分

TAM-02には香具羅が、TAM-03にはチャーニーが、TAM-04はそのまませんが、TAM-05には芽衣が、TAM-06には隊長が、TAM-07には魅夜が乗っているハズだ。

それと、各自には通信をする場合はバレないようにして欲しいとは言つてある。・・・そこは演技力だが、別に期待していない。出撃してしまえば後はそれで良いと思っているからだ。

「芽衣、大丈夫なの？」

隊長の音声で”〇フヒナギク”の機体に乗る魅夜に話しかける。

「・・・問題無い」

その返答が「問題有り」だが、良い演技だ。これでこれを聞いた他の者は〇フヒナギクには芽衣が乗っていると想ひだらう。

「あつれえ～？ ヒナギクはそのままなの？」

〇三モクレンに乗るちやーこがそんな事を口走った。「コイツ・・・空気んでくれよ・・・。

「・・・魅夜。モクレンに乗りながらそんな事言つてもすぐバレる・・・」

「あ、あはは～そうだね。これは私とした事が失敗したみたいだよお～」

魅夜、ナイスフォロー。すぐ様ちやーこも魅夜の音声に切り替えて言い直した。

・・・まつたく、先が思いやられるぞ。

そうして暫く〇機まとまつて編制しながら飛んでいくと、未確認の機体がこちらに接近してきた。

未確認機なのは、新型だからだ。オペレーションシステムのデータには無いので、敵の出方を知る必要がある。

「〇五、〇三機は牽制で射撃を開始。他の機体はその援護をして

なの！

『了解』

中距離の〇三機と長距離の〇五機に牽制でどう動くか見ようと思つた。

敵は10体、適当に撃てばどれかに当たるかもしれない。

だが、敵は素早くそれを避けて、すぐに進撃して来た。

運動性能が格段に違う。前回の戦闘で敵の新型機が現れた事が布石になっていたのか、それと同等か、それ以上……。そんな敵が10体も現れた事になる。

戦力差が違すぎる！？

だが、戦力の差が戦局を左右するわけでは無い事を教えてやる。

・・・ゲームのやりすぎだが、ゲームも、現実も戦術さえしつかりしていれば覆すことが出来るはずだ。

後は、それをどう実行するかだが・・・。

「空中戦は不利なの！ 各自地上に降りて障害物の陰へ隠れて！ 捕捉されたら全機でそちらへフォロー！ それまでは牽制を続けてなの！」

『了解』

相手のサーチ能力がどれほどなのか分からぬが、物影に隠れて奇襲するのは常套手段だ。

全機が地上へ降り、岩陰等に身を潜めると、敵も地上へ降りてきた。

「ワイドスラスター・・・シューート！」

05キキョウに乗る芽衣がそこへ発砲する。一筋の光線が途中で幾本の光線に分かれ、数機を襲う。

油断したのかその攻撃で4体の敵が撃墜された。

一気に物量ではこちらが勝つた。だが、敵の機体の方が性能は上なので油断はまだ出来ない。

前回の戦闘のような馬鹿が乗つていれば話は早いのだが、今回はそういう相手ではないらしい。黙々と徐々に距離を詰めて来る。

「！不味い！？大尉！」

02ボダイジュから香具羅の通信。この場合06オニコリへの通信かと思ったが、咄嗟の事なのでどうやらこちらへの通信らしい。

シユボツ！！

「！？」

一瞬何が起こったのか分からなかつた。

俺の隠れていた岩壁が一瞬にして根っこをぎゅくなつて、高
出力の砲撃だつたらしい。

幸い機体にはダメージは無かつたが、次に同じ攻撃を食らつたら
無事では済まないだろ？

・・・なんて反則な攻撃だよまつたく・・・。

それにしても、こちに向かつて「大尉」なんて言つたら駄目だ
ろ香具羅・・・。

まあ、そろそろ潮時か。

「こちらは大丈夫だ！ もういいぞ！ 各自好きに発言しよう。
あんまり悠長な事を言つてられないらしいからな」

『了解！』

「え・・・？ 大尉！？ 隊長機に乗つてゐるの！？」

バレて無かつたらしく、せんが驚いたような声を上げた。

「そういう事だ。 未来は変わつただろ？ セン」

「え・・・と・・・。 分からぬよ・・・」

せんの口から「不明」と出た。 それだけで未来は変わつてゐる。

なら・・・後はがんばり次第さ。

「つて事で菜乃隊長！ 後は指揮権を任せや！ 花肩の本領発揮させてくれ！」

「了解なの…………と言いたい所だけじ、辞退するなの。指揮は引き続き大尉がやつてほしいな」

オニコリに乗る隊長がとんでも無い事を言つ出した。俺がそのまま指揮！？

「さつきまでの指示は的確だつたの。私より上手く旨を使えてるの。嫌だつて言つなら命令なの。指揮してなのー！」

「・・・・隊長・・・・。くそつー、どうなつても知らんぞー？」

俺はせつ言いながら意味を無くした垣壁から出る。やつすると敵から丸見えになつてしまつが、それは誘いだ。乗つてくれよ・・・。

「大尉！ 出ちや駄目だよー！」

せんが叫ぶ。……………」こでせんがそんな事を云つのはとつとも不吉なんだが・・・。

だが、俺は俺自身に誓つていた。

運命なんて塗り替えてやるー。

「つねおおおおおおおおおおおおおつーー。」

俺が現れた事で敵の6機が一斉に俺に狙いを定めてくる。後数

秒

秒で俺は消し炭になつてゐるだろ。」

だが・・・

「今だ！　芽衣、香具羅ー・ちやー・」・魅夜！」

「・・・・・了解」

「分かつたわ！　大尉！」

「おおおし！　いくぜええ！」

「うつふふ」　チェックメイトお　」

「ひそり移動していた4機が側面から奇襲をかける。

俺に注意を逸らされていた敵はその奇襲に反応できず各自直撃を食らつて撃沈した。

残りは後2機になつた。

「よし！　後は・・・任せた！」

だが、残り2機は無傷で俺へ攻撃して來ていたの・・・。俺はそれを避ける事も出来そうもなかつた。

これだけ減れば、後は大丈夫だろ。　ここで俺は退場させてもらおうかな。

「そんな事！　許さないのっ！」

06オニコリのグリーンインバリットシステムを使って隊長は俺と敵の間に割つて入つてきた。

グリーンインバリットシステムはその緑の膜による絶対防御が出来るが、こんな使い方が出来るのは熟練の者である隊長ぐらいかもしない。

「勿体無い・・・。有効利用しようか！ 皆後ろへ着けえ！！
グラビティブラストウェーブ発射！」

グリーンイッシュバリットシステムの効果が残っている間に俺は超兵器を発動する。

効果が現れる間までに芽衣達が後ろへ下がるのを確認してから「やつちやえボタン」をぶん殴る。

そして、その絶望的爆発は敵の機体を捉えて殲滅。

・・・・・とか、そう簡単には済まなかつた。

「何！？」

芽衣達が下がった事を察してそひひに敵も着いて來ていたようだつた。

そして、敵の攻撃が芽衣達へ向けられた。

「あやー！ 何よコイツー あひり行きなさいよー。」

近くまで接近してきた敵へ近距離専用機体の〇二ボダイジュが応戦するが、その攻撃を敵は難なく避けてしまつ。

「香具羅ー！ ひひに任せろおー。」

そこへちゃーこが加勢するが、それも予期していたのか一気に距離を取つて牽制射撃して逃げられてしまつ。

「くそつー、後2体なのにちよこまかとおー。」

「ひちらが完全に戦力で勝つているのだが、動きが早すぎてしまつに戰うと全く攻撃が当たらない。」

「・・・大尉いー」

「ん? なんだ? せん・・・か?」

そんな状況でせんが話しかけてきた。

「恥ずかしいんだけど、やつと分かつたよおー。」の戦闘、私達の勝ちだよおー」

「お・・・・・勝利の女神さんのお墨付きかー。」

最初に否定していたが、せんが語り台詞にはそれだけの力がある。物理的に可能でなければせんは「全滅」と言つていたハズなのだから。

そういえば、せんの機体の性能つて良く知らなかつたのだが、この後にそれを知る事になる。

チュードーンー!

急に敵の1体が爆発した。

誰かが攻撃したわけでは無い。 ただ、回避運動をして地上へ着地しただけだ。

着地して爆発・・・地雷か！

「私の機体は、トラップ専門だよおお」

「・・・お前がそんな機体に乗つてたら最強だらうがオイ・・・」

先を読む事に長けたせんが設置するトラップなのだ。 それを避けるには常識で考え得ない行動でもしない限り回避不可能だらう。 残り1体になつた敵はその事で動搖したのか、動く事が出来ないでいるようだつた。

チェックメイト。

「よし！ 皆 集中攻撃いゝ！」

『了解――』

後は動けなくなつた敵には可哀相だが手加減無しにリンチで終了だつた。いくら動きが早くても全員の攻撃をまともに食らつて耐えれるなんて事は無かつたようだつた。

「・・・なんとかなつたな」

0-1ヒメコロの「シックピット」で包丁反つて大きく息を吐いた。

急な戦闘だつたが、結果は全員無事に帰還。

せんが予言した運命に打ち勝てたよつだ。

俺達は勝利を噛み締めるように喜びながらはしゃぎ通信をしながら基地へと帰還するのだった。

「それにしても、最初話を聞いた時はどういつ事かと思つたりそういう事だつたのね」

基地に戻つて香具羅達に事情を説明すると、皆すぐに納得したようになつててくれた。

「私は、最初から大尉を信頼してたのだよ。 香具羅ちゃんはまだまだ愛が足りないのだねえホホホのホ〜」

魅夜は香具羅にチヨークスリーパーを決めるように後ろから羽交い絞めにして 実際は抱き着いているだけだが 自慢氣にいっている。

「だけど、大尉も水臭いよな。 そんな事なら最初から言ってくれれば良かつたのに」

ちゃーこがそんな事を言うが、ちゃーこの性格上隠すような器用な事は出来るとは思つてなかつたからなんだが・・・。 それは言わないでおいてやろう。 怒られそうだし。

「大尉には大尉の考えがあつたなの。 分かつてあげてちゃーこ」

事情を知る一人の隊長がフォローしてくれる。 隊長機を譲つてくれただけで無く、そんな事まで言ってくれるなんて隊長は出来た人だなまつたく・・・。

「結局・・・私には予知能力は無かつたんだねえ」 ふふう
「そうだつたんだあ」 ふふう

せんは帰つてきてからずつと笑顔だった。 自分の予知が間違つていた事にショックを受けるかと思つたら、どうやら逆だったようだ。 後で聞いた話によると、彼女はその力から忌み嫌われていたらしい。 彼女自身もそんな力を嫌つて花屑ではずつと秘密にしていたらしい。 自分が予知した結果が良い結果ならまだいいが、今回下した予知のように「全滅」なんて言われて本当に全滅してしまつたら、そりや忌み嫌われるだろうが・・・。 実際はそういう事では無く、ただ先見能力が人並みはずれているだけだつたというわけだ。

それも今回までは無自覚だったのが、今回の作戦で自分の能力に気が付いてそれを使うという事を覚えた彼女は、もはや無敵かもしない。

そういう意味で戦力は大幅にUPしたんだと思つ。

良かつた良かつた・・・。これで終わればな。

「・・・。そういえば大尉。今回の戦闘が終わったら、好きな人に告白するって言つてた」

「いいい！？」

『！？』

芽衣の咳きに俺と他の一同が騒然とする。

「あ・・・えーと・・・」

「何、何！？ どういう事！？」
「大尉好きな人が居るなの！？」
「ちょ・・・そんな話聞いてないよ！」
「もしかして・・・私かなあ？」
「絶対違うわよ！ で、でも・・・私じゃないわよね？」
「・・・。大尉。誰？」

「う・・・」

おやか口から吐せなんて言える雰囲気じゃなかつた。

「Jは嘘でも誰かの名前を言わないと……。

……いや、昨日芽衣が「責任を取つて」と言つてなかつたか?

軽はずみな発言は出来ない。

となると、少なくとも一番好きだと言える奴の名前を言わなければならぬ。

俺もこんな事をふざけて言いたくないしな。

・・・・・

隊長は・・・、いい人だけど、そういう粗手では無こと思つ。

ちやーーーも同じだ。

魅夜は・・・どちらかと言えば男友達に近いイメージだしな。

香具羅は・・・違うな。

せんは、俺は口っこんじゃないから論外だ。・・・一応な。

芽衣は・・・なんとなく好かれている気がしないからなあ・・・。

やっぱよく考えたら俺自身にそういう感情が芽生えてないんだ

からどうしようも無い。

「……は……仕方無い。お茶を濁すか。

「俺が好きなのは……芽衣だよ」

「……は？」

自分で自分の言葉に突っ込みを入れたかった。今……なんて言つた？

「ええ――――――!?」

「芽衣ちゃんかえ！ やっぱり大尉は大人しい方が好きだったのねえ～ガクーン！」

「…………残念なの」

「うわ～ん芽衣きらい～」

「…………芽衣、恐ろしい子」

残った5人が各自に騒いでいる。しかし、言われた芽衣は……

「…………」

何も言わずに俯いていた。

「あ、いや……芽衣。今のは冗談だ。すまん

すぐに謝罪するが……

「あ、やっぱり嘘だつたんだ～」

と他の5人だけ反応した。

芽衣は・・・動かない。

「芽衣？ 芽衣？？」

「あら？ フリーーズしてるわこの子」

魅夜が芽衣を覗き込むと真っ赤な顔のまま固まっていた。どうやらオーバーロードしてしまっているらしい。

「それじゃ、やっぱり大尉は誰が好きだとか無いのよね？」

魅夜が率先してそんな事を聞いてきた。他の4人もそれに従つよつに聞き耳を立てている。

「あ、まあ・・・そうなるな」

『オッケエエー！』

芽衣を覗く全員が何故かガツツポーズをして叫んでいた。

・・・芽衣。確かにこれは・・・責任取る必要あるみた
いだな・・・。

魅夜やちやーこだけかと思つたら香具羅も隊長もせんも同じよう
にしているって事は・・・。

俺は・・・もしかしてファイナルジャッジの時を迎えてはな

らない？

「…………大尉」

「お。 気がついたか芽衣。 あのな、やつそのはな……」

芽衣が気がついたのでさつきの発言を取り消そうとするが、芽衣の目が何故か潤んでいた。

嫌な予感がしてしまった。

「…………私も…………好きです」

「ういー!?」

その後、花肩内に、俺を取り巻いての内部紛争勃発。

渦中の人である俺は……。

「ハーレムハーレム…………なんて言えるレベルじゃねえぞー！」

魅夜はどうか知らないが、全員が真剣に慕ってくれているようだつたから、俺はそれにどう答えて言いが分からなかつた。

自分の気持ちがどうなのかと言われば、皆嫌いじゃない。

だから……、どうこう結果であつても傷つけてしまつのではないかと思つてしまつて余計に答えを出せないでいた。

それにしても・・・。どうしてあの時俺は「芽衣」の名前を言ったのだろう・・・。

一番冗談にしても良いと思つたから?

そうじゃない。そんな酷い事をしたいとは思わないハズだ。
無意識でも・・・。

無意識といつ言葉を俺は嫌いだつた。どんな行動も自分の思つてこる事で説明出来ないだけなんだ。

なら、答えは・・・。

・・・・・

「菊池女史に相談してみるか・・・」

俺は渦中では無い唯一の女性の菊池女史に話を聞く事にした。
そして有難い言葉を頂いた。

「知らんわ。自業自得じやううが」

一言で切り捨てられた。

俺が多分同じ立場でも同じ事を言つたとは思つが・・・。菊池女史厳しつス。

それでも、菊池女史はそう言つながらも話を聞いてくれた。

そして、最後に「お前さんの中で決まつとるんじゃろうが。なら、どんな結果でも誰も文句言わんわい。そんな奴等じや監」と言つてくれた。それがどんな言葉より嬉しく思つたのは俺の今までの環境がそうじやなかつたからだろう。

俺は家で家族とあまり話をしない奴だつた。

学校には・・・実は行つてなかつた。在籍はしていたが、自主不登校・・・まあ、引きこもりつてやつだ。

学校に友達も居なかつた。ただ、灰色の毎日を過ごしていただけで、そんな毎日が嫌になつて俺は自分の部屋に籠つていた。

何が悪いわけじゃない。俺が悪いといつのは分かつていたのだが、そんな現実に目を向ける事が出来なかつた。

両親もそんな俺を叱る事も無く、多分諦めていたんだと思つ。毎日食事が俺の部屋の前に置かれ、それを摂取してインターネットの世界へ遊びに行く毎日だつた。

そんな俺にも幼馴染が居た。

そういえば、名前・・・なんだつたつけな・・・。

思い出せないが、確か俺がこの世界に来る前の日は会つていたような・・・・・。

ああ、そつか。

だから俺はあんな事を・・・・・。

俺の幼馴染の名前。

岩倉 莘衣子。

そう。 莘衣だ。

今までずっと莘衣の苗字を知らなかつたから考えもしなかつたが
・
・
・

同じ名前だつたから咄嗟に名前が出てしまつたんだな。

そう納得して俺はその口、そのまま床へ就いたのだが・・・。

血口満足しただけで、なんの解決にもなつていなかつたのを失念
していたんだ。

第1-3話「内部紛争勃発5」（後書き）

内部紛争勃発の最終話です。

次回から話が段々核心へと向かっていくのか、それとも全くゆるい展開になるのか・・・それは作者にも分からないです（おい）

次回も大尉のハリセンがうなります（違）

第1-4話『花の肩を手の平』（前書き）

俺は芽衣の事が好きなのか？ それとも・・・

悩める少年と少女のミリタリー・ラブストーリー
これよりクライマックスまで一直線。

第14話『花の脣を手の平に』

時間の流れてるというのを感じた事はあるだろ？

いつも感じていると答えたヤツはちょっと待つて欲しい。それは「生きている」という実感があるかどうか問題で、実際は時間が止まっているかもしないんじゃないかな？

時間の流れなんて肌で感じる物でも無いが、確かに時間が止まっているなんてあるわけが無いから答えは出ないのが本音なんだが……。

俺自身有り得ない時間の流れを体験したので、それを否定し切れなくなつたつてわけさ。

時間を飛んだ俺。

平和だった街の面影も欠片も無く、俺はたった一人で知らない世界に投げ出されたんだ。

あの時……

俺を発見したのが芽衣では無かつたら……

今頃俺は生きて居なかつたかもしれない。

だから、俺はあの日芽衣に告白したんだ。
だから、彼女を愛したんだ。

ずっと傍に居る為に……

茶色いミリタリーブーツに、茶色い軍服。
薄汚れた懐中時計に、油の入った缶。

塩、アミーナイフ、方位磁石。

それと洒落で銀の容器に琥珀色の酒が入っていた。
一応まだ未成年だからな。 老けてるわけじゃないぞ？

確か… 未来なんだよなこの世界って…？

俺はそんな装備を確認してそれを一つのリュックへ詰め込んだ。
食料に該当するのは塩と油ぐらいか？
両方それだけでどうにか出来る物では無いが……。

「……ジュン、それは食べる為の調味料じゃない」

塩等をリュックに詰めようとすると、それを覗き込んでくる少女
が一人。

俺はソイツの頭を撫でながら油と塩を投げよこした。

「んあ？ ジャあ何に使うんだ？」

俺の愛称で呼ぶのは勿論、芽衣だ。

可愛い俺の……いや、流石に照れるな…。

「これは大尉に付けるワセリンとプロテイン」

「・・・・・はつ？」

ワセリンニアロテイン?? 何を言っているんだ芽衣は・・・。

芽衣は塩と油だと思っていた物を両手に持ちながら怪しい笑みを浮かべていた。

「ふふふ・・・。男子と産まれたからには・・・黒光りするのが本願でしょう～ ねえ、ミーデ ジュンペイ君」

芽衣・・・に見える者が俺の本当の名前を呼ぶ。

氣がつくとやいはいつもの俺の部屋だった。いつものと並んで元の世界ではなく、花屑の基地の中の兵舎だった。

「夢か・・・。昨日あんな事があつたからな・・・。混乱してるのかもしけんが・・・酷い夢だ」

あの芽衣が俺を「ジュンペイ」等と呼ぶわけがない。まだ、そんな仲になつたつもりは無いし、昨日告白したのも冗談だつたのだ

から・・・。

しかし、冗談だったにしては先程の夢の中で俺は芽衣と恋人のようないい雰囲気だった。夢は心の深層心理だとか言うが・・・。

俺は本当に芽衣が好きなのか？

確かに芽衣は俺の恩人だと思っている。だが、感謝はすれど、それとこれとは話は別だ。俺は別に芽衣と・・・・・・。

・・・・・・・

いや、逆に考えて芽衣を好きだとして何か不都合があるだろ？

芽衣は俺から見れば、美少女だと思つ。顔は問題ない。性格は・・・少し暗いかもしれないが、落ち着きがあつていいと思う。プロポーションなんかはどうでもいい。・・・前に抱きしめた時があつたのだが、ちょっと気持ちよかつたがな。
そして、芽衣は俺を慕つてくれていたらしい。

・・・・・問題があるのだろうか？

いや、何も問題は無い。無問題。モーマンタイだ。

「だけど・・・もし芽衣と付き合つたりしたとして・・・俺は何をすればいいんだ？ 女の子と付き合つた事なんて産まれてこの方一度も無いんだが・・・」

「やっしゃえぱこいのだよ」

「や・・・つて。 それは・・・」

「何を恥ずかしがるう？ 好き同士だつたらそれぐらいは当たり前だしょ？ むしろ、私が代わりたいぐらいなのに」

「いや・・・、だからそれは・・・。 ・・・・・・つて何処から入つた！ 魅夜！！」

いつの間にか魅夜が俺のベットの横に座り込んでいた。 ホントに神出鬼没だなコイツは・・・。

俺はいつもの挨拶代わりにいつもの武器を手に魅夜の頭部を捉えようとした。

ヒュッ！

「！？」

しかし、いつものようにそれは命中しなかった。

「大尉。 別に[冗談で言つてるわけじゃない。 むしろ、本氣で言つてるのだよ。 芽衣は私達にとつて大事な子だから大尉が好きなら、本氣で愛して欲しいの」

いつもと違う態度でいつもと違う台詞を言つ魅夜。 これがいつも魅夜ならもう一発殴ろうとしていたが、その日の彼女は違っていた。 [冗談以外口に出来ない奴だと思っていたので、その態度にめんを食らつてしまつて言葉を返せなかつた。

「…………大尉。 貴方は眞面目過ぎる。 それが貴方のいい所だし、皆もそれだから好きになつたんだと思つけど……この際でその女々しさは頂けないね」

「め、女々しいだつ！？」

女々しい等と言われて流石に俺は声を上げたが、内心は自分でも分かつてゐる。 ただ、分かつてゐるから言われると腹が立つてしまつたのだ。

「これだけは言つておくわ。 芽衣を泣かせたら私は絶対に大尉を許さない。 ううん。 私だけじゃない。 皆同じ気持ちだと思う。 昨日大尉は冗談にしようとしたけど、皆本当は分かつてた。 分かつていなければ……大尉だけなのだよ」

「…………」

何も言い返せなかつた。 言い返す事など出来るはずが無かつた。 俺は皆を傷付けないようだと思つていたのに、結局は傷付けて、失望させていたのだ。

穴があつたら入りたいだけじゃなく、そのまま消えてしまいたい・
・・。

「自分で気付いてないみたいだから言つけど、大尉は最初から芽衣しか見てなかつた。 私がいくらアプローチしたつてそりや無理に決まつてるわよね。 最初から気付いてたのは私だけみたいだつたけど」

「…………そうだったのか……。 だ、だったらお前はな

んで何度も・・・

「私はね・・・悪い女なのよ。夜を魅了すると書いて魅夜。ぴつたりでしょ?」

そう言つと魅夜は俺のベットに登ってきた。普段と雰囲気が違う。

彼女の息が少し荒い。

「気付いてない間に・・・私に振り向いて欲しかった。・・・・・ただ、それだけよ」

「!?

そう言つと魅夜は俺の・・・唇を奪つた。

ファーストキスだつた。

初めて異性としたキスだつた。

それは想像した以上に恥ずかしかつたが・・・、

何故かとても・・・

とても悲しいキスだつた。

「私と・・・最初で最後にでいいから・・・・・・・・

その後の言葉がどう続くのか、いくら鈍感な俺でも分かつてしま

つ
た。

魅夜は俺と

「だ・・・だけど・・・」

「いいの。 私を好きになつてくれなくとも・・・。
貴方を覚えておきたい。 それだけ・・・」

— !

魅夜の手が俺の衣服の中に入ってきた。
るわけでは無い。 本気だった。

「…分かつた」

だから、俺も本気で応える事にした。

大尉

魅夜の潤んだ瞳が俺を見つめる。

俺もその瞳を見つめて・・・

その肩を押した。

「え」

「サンキュ魅夜。」
踏ん切りがついたぜ！」

俺はそのままベットから滑り降りて、いつもの軍服を着る。

そして呆けている魅夜に向き直り、その気持ちを告げた。

「ん……いつてらつしゃい……。…………大尉っ！」

『ウニット』

魅夜は泣き笑いのような顔で、それでも決して泣く事は無く笑顔で見送つてくれた。

俺は・・・今から芽衣の部屋に行く。
そして思いをもう一度伝
えに行く。

将来や未来がどうだとか、そういう事はどうでもいい。

ただ・・・芽衣の傍に居たいと本気で思えた。

魅夜のおかげだな。
サンキュ・・・魅夜。

バタン。

俺は自室を後にした。

部屋を出て、すぐに芽衣の部屋に行こうと迷つたが、少し気になつて俺は自室の扉に耳を当てる。

そこから聞こえてくる魅夜の声・・・。

「本当に世話が焼けるわ二人とも・・・。これでやつとどうにかなりそうだわ・・・。こんなボランティア今回限りにして欲しいわまつたぐ・・・」

主が居なくなつた部屋で、呆れた様に魅夜は呟いていた。 とても軽い感じな口調だったので、俺は一瞬勘違いしそうになつたが、その後の台詞で魅夜の行動の事が確信に変わつた。

「本当にやられちゃうかと思ったわよ・・・。これでも生娘なんですからね~ 夜を魅了すると書いて魅夜つて・・・我ながらウケるわ・・・」

彼女の真意は彼女自身にしか分からなかつたが、もし、この場に俺が残つていたなら逆に魅夜を抱きしめていたかもしれない。 自己犠牲が過ぎるんだよ魅夜・・・。

本当に。

「へっ・・・」

情けない。 そうさせてまで気付かせよつとしていたのに・・・。
俺はなんで気付かなかつたんだ!

俺は今度こそ振り返らずに芽衣の部屋へ駆け出して行った。

ポツリ・・・

「・・・・・」

ポトリ・・・

「・・・」

何かが落ちる音がした。

また一つ。落ちてこき、そして弾けるよつた音。

「・・・・・・・・・・・・

ポツリポツリ・・・

一粒、一粒・・・

「・・・・・・・・・・・・

ポツポツポツポツ・・・

・・・・・・・・・・・・
「・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・

薄暗い部屋の中で、動くものは一つ。

声も立てずにベットに腰をかけている少女。

少女の膝に何処からか糞が落ちてきた。ポタリ、ポタリと。

次第にその感覚が短くなり、少女が履いているズボンの色がそこだけ濃い色に染まつっていく・・・。

「・・・・・・今日だけは・・・女の子に・・・・・・なりたかつたな・・・・・・」

その言葉を最後に少女は一切喋らなくなつた。

後は静寂だけが闇を支配していく。

だが、それも少しの間で、急に闇が晴れるように少女は立ち上がつた。

「・・・・なあんてシリアルな感じもたまにはアリよね？　あつはつははは～」

そして「いつもの彼女」へ戻る少女。

・・・・・

そう、「いつもの偽りの彼女」へと・・・。

第15話『花の屑を覚えてくれますか?』(前書き)

想いに気付いた私。

そんな想いは初めてで・・・。どうしたらいいか分からない・・・。

第15話『花の屑を覚えてくれますか?』

まさか、こんな事になるとは夢にも思わなかつた。

私は昨晩は一睡もする事が出来ず、布団の中に潜り込んで光から逃げるだけだつた。

あの大尉が・・・、私を好きだと言つた。後で聞いたら「冗談だ」という事だつたが・・・、私は大尉に言われてやつと氣付いた。

私は大尉の事が好きなんだと・・・。

その事を気付かせてくれた大尉には感謝している。だからこそ、彼を困らせてしまつわけには行かないので、私は彼を想うだけでいい。それだけで、とても幸せな気分になつてしまつ。

こんな時代だから・・・誰かを思えるといつのは初めて知つたがとても大事な事なんだと想つ。

ただ思うだけ・・・

・・・・・あれ? そういえば・・・私昨日大尉に言つちゃつたんだつけ?

・・・・・

うわーうわー思つだけなんて格好いい事言つておいて私つたら・・・

相手が自分が好きだと思つてゐる事を知つてゐる。それを考えてしまつともう頭の中が混乱してしまつて……「わやーむきゅーな感じです。

「…………芽衣が故障…………なの」

ポツリと呟く声に私は飛び起きた。見るとそこには菜乃隊長が居た。

「可愛い動きしてたからつい見入っちゃつたなの 芽衣、どうしたの? 何か悪い物でも食べちゃつたなの?」

「…………いえ、大尉問題ありますん」

「…………重症みたいなの」

「…………え? 何が?」

「芽衣。今、貴女私を「大尉」って言つてたの」

「…………」

なんという事だろ? 私は無意識にどんなにもない間違いをしてしまつたらしい。

顔が熱くなるのが触らなくても分かつた。

「芽衣…………魅夜じゃなければ抱きしめたくなるな」

「え・・・? エ・・・?」

隊長は田を輝かせて私をハグしてきた。 隊長の胸に押し込まれるような形でグリグリされる。 私はぬいぐるみじゃないんだけど・。

でも、隊長にいたずらるのは嫌いじゃない。 逆に安心するかも
しれない・・・。

「・・・・・・・・」

「わやー 可愛い可愛い ん? あれ? 莜衣?」

「・・・・・・・・」

「ありやだ!」の子・・・。 寝ちゃったなの?」

「・・・・・・・・ひひ。起きる」

ちよつと氣持ち良くて確かに寝そうだったが、そんなにすぐに寝れるような特技はもっていない。 それでも隊長の胸が柔らかくて心地良かったのは確かだ。 少し羨ましいと思ってしまったけど・。

「 莜衣。 そのまま聞いてくれる?」

「・・・・・・・?」

私は隊長の言葉に顔を上げようつとめるが、そいつると更に抱きし

める力を強くされる。

「そのまま」とは、この状態の事を言つのか。ちょっと苦しいのだけど……。

「芽衣は……、大尉と一緒にになりたいなの？」

「…………」

「うん。 答えなくていいなの。 ただ、もしさう思つていいなら、後1日待つて欲しいの」

「…………？」

「後一日？ 1日経つたら何があるというのだ？ 隊長の言葉の真意が分からなかつたが「答えなくていい」らしいので何も言わないで聞いていた。

「なんとかつて言えば……。 後1日でTAMの換装パーツが完成するなの。 それで一気に攻める準備は整うなの。 そして、その作戦が終われば……、一人だけは隊を抜けてもいいなの」

「！？」

「芽衣。 良く考えて。 このまま貴女がここに居ても、大尉との未来は無いなの。 この後の作戦が終わった後……、本軍を率いて総攻撃が始まる予定なの。 そうなつたら……、誰かが死ぬかもし

「芽衣。 良く考えて。 このまま貴女がここに居ても、大尉との未来は無いなの。 この後の作戦が終わった後……、本軍を率いて総攻撃が始まる予定なの。 そうなつたら……、誰かが死ぬかもし

れない・・・。それが大尉かもしれないし、芽衣かもしれないなの。そんな事は私は嫌なの。芽衣。これは皆も同じ意見なの」

「・・・・・隊長」

私がこの花屑に残っている理由は皆が居るからだ。だけど、新しい気持ちを知つて、それを考える間も無く、皆の中では答えが出てしまつてゐるらしい。

大尉は初めて私を女にする存在だけど・・・。だからって今まで一緒だった皆と別れなくてはいけない理由になるだろうか？

隊長は良く考えてと言つたが、私には自分がどうすればいいか分からなかつた。

隊長が言つ「この後の作戦が終わつた後の総攻撃」が決行されれば、こちらの軍は・・・多分負けるだろう。

それだけ戦力差があるのは知つていた。

花屑が所属する国家は「ウエストサン」は、国力だけ見れば敵国の「イーストサン」の3分の1も無い。これまで圧倒的な技術差で戦闘では勝つていたが、ここ最近の敵の主力TAMを見るとその力のバランスも大きく崩れてしまつたようだ。

兵力も、質も負けている状態で、最後に出した答えが全軍による玉砕なんて・・・馬鹿げている。

「私達の花屑が最前線に居る理由は芽衣も知つてゐる通り、TAMの性能テストと共に敵の戦力を測る物差しなの。ここ最近の敵の戦力は今の私達ではもうお手上げなぐらいの差がついてきて・・・

そろそろ潮時つてこのなの」

「…………それで、換装パートでマイナーチェンジ……。
それだけで埋められる戦力差じやない……」

「そうね。でも、やるしか無いなの。それに、私達は歴戦の覇者なの。簡単にはやられないなの」

「…………でも、大尉は……」

「…………そう。大尉は確かに実戦を2回経験したけれど……。操縦なんかではまだまだ荒削りなの。この前の戦闘で自分を犠牲にしないといけないぐらいに……。オトリになるという作戦は良かつたけど、その後の回避も何も無かつた大尉には……個人的にこれ以上TAMに乗つて欲しく無いの」

「…………2回とも成功してしまつたから……。大尉
は挫折を知らない」

「そう。それが怖いの。もし一度でも失敗をしてしまつたら……。彼はただの一般人になつてしまふ可能性があるなの。元々私達のような軍人じゃないから」

「…………その通りだと思う。だけど、隊長……。それで私も同じ扱いにされる理由にはならないと思う」

段々隊長が言つている事が分かつてきたり、「私達の為」という理由をつけて厄介扱いされているようで少し腹が立つた。大尉はともかく、私はどんな危険な作戦でも元々死ぬ覚悟も出来ている。もちろん死ぬつもりは無いが、それをさせてくれずに、私だ

け除け者なんて・・・。

「・・・。芽衣。貴女は忘れているみたいだけど、貴女は

「・・・え」

今なんと言つた?

「だから、貴女は。。。混乱しているみたいだけど、事実なの。だから忘れているなの」

肝心な所が頭に入つてこない。だけど、隊長が言つてゐる事は頭で理解していた。ただ、具体的な言葉にならないだけで、分かってしまった。

「貴女達「3人」がそういう存在だという事なの。思い出して。。。芽衣は、ずっと一人じやなかつたなの」

隊長が話す度に段々と言葉が形になつていいく。私が忘れていた記憶。思い出してきた。

「私も・・・飛んだ者・・・」

菊池女史や大尉のように、時を飛んだ者。それが私だった。

でも、だつたら、私がちやー「」や隊長と過ごした日々は何だつたの?あれは偽りの記憶?

そんな事は無い。私は確かに・・・一緒に過ごしたハズだ・・・

。なら、私は大分前に飛んで来た事になる。

「だから、芽衣にはもう一度大尉と飛ぶといつ選択肢もある。良く考えて欲しいの」

「…………私は……」

「どうしたらいいのだろうか？ 時を飛ぶというが、その手段も分からぬのに……。

いや、それはもしかしたら菊池女史が知っているかも知れない。彼女は「戻る方法は知らない」と言っていた。では、「飛ぶ方法」は？ 聞いてみないことには分からない。

「大丈夫なの。芽衣がどんな選択をしたって、皆恨んだりしないの。それは花肩隊長である私が保証するなの」

「私は……私は……」

何か答えなくてはならないのに私は頭が真っ白になつたように何も答える事が出来なかつた。

期限は明日。

明日までには私は選ばなくてはならない。未来を……。

「後、「めんなさい」。芽衣に謝る」とあるの」

「…………あやまち…………」…………と？」

頭の中がぐちゃぐちゃになつてゐる最中に隊長が頭を下げる。それすら意味が分からぬ。上官が部下に頭を下げる等……考えられない行為だつた。でも、それは菜乃隊長だからこそ行動だつたのかも知れない。

「私達は……ずっと芽衣に依存してた……。貴女のように自分の殻に籠つてゐる姿を見て……皆自分を重ねていたな。そして、無意識に自分は芽衣のようにならない為に……、そんな芽衣が壊れてしまわないように……見守つていたなの」

「…………なんのこと?」

「…………本当に申し訳ないと思つてるなの……。皆が芽衣に優しくしてゐたのは……自己防衛だつたの……」

「…………」

「芽衣…………私達を…………許して欲しいの…………ごめんなさい」

隊長が何を言つてゐるのか分からなかつたが……。それは個人の勝手な思想でしか無いでは無いか。それを謝られても……。それを……今言われて困る。

「隊長。何が言いたいのか分かりません。だけど、私がそう思われていたというのがそんなど大事な事ですか?」

「皆……自分を偽つてゐるな。だから、その姿が壊れていつ芽衣のようになるか分からずおびえてゐる。私もそうなの。

だから 「

「もういいですっ！」

「 ……」

隊長の口からそんな言葉は聞きたくない！ 意味が分からない！
私に何を求めているの！？

「「めんなさい。 隊長……一人にしてください……」

「…………分かつたなの。 莺衣、本当にごめんなさい……」

隊長は頭を下げる、私の部屋から出て行った。

菜乃隊長が何を言おうとしていたのか、本当は分かつていた。
彼女は私が人としての感情が乏しい事を自分達の責任だと思つて
るらしい。 それを必要以上に悩んでしまっているようだった。
だが、それは菜乃隊長達個人の妄想でしか無く、私自身に何かした
という事では無いハズだ。 まだ何か隠しているなら分からぬが、
私に謝る必要は無いハズなのに……。

先程まで仲間だと思っていた人達が……急に遠くに感じてしま
つた。

しかも、自分から一人にして欲しいなんて言つてしまつた……。

「…………何が……何だか分からぬ……」

一度に色々な事を言われて、それを頭で理解する事が出来なかつた。

私は一体何者なのか。 私は一体どうすればいいのか・・・。

「会いたい・・・大尉に・・・会いたい」

そう思うと、一人では不安で胸が潰れそうになつてきた。 実際吐き気までしてくる。

大尉に会いたい。

そう思つたのは、彼が同じような境遇だからか。

私は、大尉に相談するか、菊池女史に話を聞くか悩みながら部屋から出る事にした。

その後の事は、一生忘れられないだろう。

「・・・・・何・・・コレ・・・・?」

外に出た私の目に飛び込んできたのは・・・、あちこちで火の手が上がる基地だった。

第1-6話『花の肩をつかうと覚えてこぬ』（前書き）

俺は芽衣に想いを伝えるために芽衣の部屋に向かう。

『気付いたことがある。思い出した事があるんだ。

ずっと忘れていた事だつたけど・・・。

それは芽衣子の記憶だった。

第1-6話『花の肩をつかと覚えてこぬ』

俺は芽衣の所に行いつひ、兵舎の廊下を歩いていた。

「芽衣が・・・俺達と同じ飛んだ者ーー?」

「やうじや」

そこで菊池女史に呼び止められた。

そして、イキナリそんな事をカミングアウトされてしまった。

菊池女史は真剣な面持ちでその事実を語る。

「イキナリですまんの。じゃが、もう時間が無いんじや。ワシから言える事は全て話したいと思つ」

「な・・・意味分からぬが、了解。物分りは悪い方じやないからな、続けてくれ」

菊池女史の様子にただ事では無い事が分かったのでおとなしく聞くことにする。それを聞いた後で判断すればいいだけだ。今は、慌てるべきじやない。

「・・・流石ジユン大尉じや。落ち着きすゞじやと最初は訝つておつたが、その落ち着きが今は助かるの。いいか、一度しか言わん。そして、全て事実じや」

「ああ、時間が無いんだろ？早く話してくれ。」口も急いでいるしな」

「ふむ。分かった。話そつか」

・・・・・

菊池女史が話した内容はとても信じられない事だった。

だが、それを聞くと全てが辻褄が合つた。そして、それを聞いた結論としてハツキリしているのは「俺はビリヤツても元の世界には戻れない」という事だ。

もう一つ分かったのは「不思議な体験をしたわけじゃない」事だった。

「時間を飛ぶところのは・・・。『ロールドスリープ』の事だったのか！」

「そうじゃ。ワシも大尉も同じ研究所で眠られたのじゃ。そして、事故によって我々は起きてしまった・・・。大尉とワシと芽衣じゃ。最初に記憶があるか聞いたじやろ？『ロールドスリープ』には記憶弊害の恐れがあつたのじゃが・・・。ワシも肝心の事を思い出すのに時間が掛かつてしまつた。芽衣は全く覚えてないみたいじゃがの」

「じゃ・・・じゃあ俺はなんで眠らないといけなかつたんだ？それは芽衣も菊池女史もだが・・・」

「何を言つとる。お前さんが一番最初に眠つたんじゃねつが」

「え？」

「お前さん……やはり覚えてないんじゃな……。生活に疲れ
て、未来へ飛ぶ事を望んだのは他でもないお前さんじゃないか」

「…………俺が…………望んだ…………」

「やうじや。後、ワシは関係者じゅうたから試験で眠ったのじや
が……。その後に芽衣が眠った経緯は知らん。芽衣の事も思
い出せないんじゅう？ 幼馴染じゅうたのにな」

「…………思ひ出せつて方が無理だな。だってアイツ
は……まだ小学生だつたんだぞ！？」

「しつかり覚えとるんじゃないか……」

俺は家族とは接触しないようにしていた。

あの頃、両親が離婚するところの話で家の中が荒れていたところの
もあった。

親父は俺が引き籠もつているのを自分のせいだと言つて、母は俺が
引き籠もるのを俺のせいだと言つた。

「どうでも理解だった。

学校が嫌で、家庭が嫌で、全てから逃げ出していた俺。 そんな俺には何も無かつた。

だから、ずっと逃げ出していくもいいと思つていた。

インターネットの中に逃げていれば楽しことは一杯ある。

だから、それでいいと思っていたんだ。

そんなある日、従姉妹の岩倉つて人が家に来た。

なんでも研究所に勤めているらしく、その業績がなんとか平和賞を貰つたとか言って、その挨拶回りだつたらしい。 興味は無かつたが。

岩倉 紋治つて爺さんを知つたのはその時だつた。

その紋治さんはとても気持ちが良い人で、引き籠もつてゐる俺を認めてくれた。

ただ、そんな良い人でも世間からは逃げているらしく、何かシンパシーのような物を感じたものだ。

「モンジさんは、どうしてそんなに言われながら研究を続けるんですか？」

俺の問いに紋治さんは、少し困ったように笑うと、しかし、自信

たっぷりに言った。

「私の研究が、いつか世界を救うと思っているんだよ。恥ずかしいだろう？　たつた一人の小さな思想で世界が変わるなんてあるわけが無いのだがね。私が作っているのは兵器じゃない。人が優しくなるための補助器みたいなもんなんだ」

「へえ・・・いいですね。なんだか分かりませんが素敵だと思いません」

「おお！　そつまつてくれるか！　君なら分かってくれると思つていた。どうだ？　私の研究を手伝つてはくれないだらうか？」

「俺が・・・何か出来るんですか？」

「そうだなあ・・・。君はゲームが得意だったな。よし、それを元にしてみようかと思つ。テストプレイをしてくれればいい」「テストプレイ・・・なんだかゲームとかで最後のクレジットに出てくるスペシャルサンクスみたいな感じですね」

「おお！　そんな感じだな。勿論君の名前を登録しておくからもしかしたら世界一有名な高校生になるかもしれないぞ」

「わ・・・それはやめてくださいよ。恥ずかしい・・・」

そんなこんなで意氣投合した俺達はその「研究」とこいつのを進める事になった。

そうして一週間ぐらいが経つた頃には両親は離婚していた。

俺は母親に引き取られた。

それでも紋治さんとの研究は続いていた。

「ジュンペイ君。君がプログラムした所なんだが・・・少し遊びすぎじゃないか? このグリーンインバリットシステムは物理的に難しいぞ?」

「そ、うなんですか? こ、うゲームでシールドは必需だと思つんですが・・・」

「まあ・・・検討してみるがな。ジュンペイ君、後でテストプレイの続きをお願ひするよ」

俺は研究といいながらゲームを作っているんだと思つていた。

それが本当に実物大の兵器の製作だなんて思つてなかつたけど・・・

プログラムはインターネットから拾つてきた物を独学でいじつた物に、専門家に頼んでチェックしてもらつた物だった。

「ジュンペイ君。大体の基本プログラムは完成したよ。後は実際に物を作るわけだが・・・それは大分時間がかかりそうだ」

「どれぐらいかかるんですか?」

「そ、うだな・・・半世紀は後になるかも知れないね」

「えへ。早く実際にやってみたいなあ」

俺は何気なしに言つたのだが、それに紋治さんは田を輝かせて俺の肩を掴んできた。

ちょっとその顔が怖い。

「…………ジョンペイ君。君が良かつたら当田まで飛ばす事は可能だよ。平行して研究していた冷凍保存の研究のテストも兼ねていいのけどね」

「れ、冷凍保存…………それって危なくは無いんですか？」

「それ自体はね。ただ、人権的な問題があるが……」

考え込むように視線をそらす紋治さん。確かに勝手に眠らせるとなると、俺の両親も、国も黙つていらないかも知れないが……。

「ひいづものは個人の意思だ。俺も実はこいつに興味があつた。

本当にこれで未来にいけるといづなら……やつてみたいと思つだろ？

「だったら、俺はそれにもつてこいじゃないですか。なんたつて自宅警備員ですからね」

「上手い事を言つね。そつか……」ひつひつとしてほお願いしてみたいが……」

紋治さんは泣っていたが、俺は世界に何の未練も無かつたのでお願いした。

そして、「ワールドスリープ器がある部屋まで行き、俺はその装置の中に入った。

「ジョンペイ君。君に未来を託そう。君は知らないかもしれないが、世界は確実に壊れていく予兆がある。・・・目が覚めたら全く変わっている世界が広がっているかも知れないが・・・。君が不自由なく暮らせるように手は打つつもりだ。それは安心してくれ」

「・・・未来がどう変わるか分からぬのに安心してくれって無責任ですね紋治さんは・・・」

「あっはっは〜！これは一本取られたな。だが、手を打つのは本当だよ。私はこれでも政府に影響力を持っているんだよ？」

茶目っ氣たつふりに笑う紋治さんは若いと思つ。その時彼はもう60を越す高齢だつたなんて信じられないぐらいだ。

「はいはい。信じますよ。紋治さんはとてもエロイ人なんですもんね」

勿論「偉い人」って言おうとしたんだけど、口が滑ってしまった。まあ意味は一緒か。

「何を！？ もうと寝てしまえ小僧めがつ！」

怒つて「ワールドスリープの装置を作動させる紋治さん。それが

彼の笑顔を見た最後の瞬間だった。

「はいはい。じゃあまた、紋治さん」

「…………またな。ジュンペイ君……」

少し寂しそうに装置に横たわる俺を見つめる紋治さん。

その時は、俺はまさかもう彼に会えないなんて思っても見なかつた。

「なんで!? なんでそんな事したのおじいちゃん!..」

少女が初老の研究者に詰め寄つた。

「おじいちゃん」と呼ばれた人は、寂しそうに自分の孫娘の頭を撫でて答えた。

「彼が…………望んだからだよ」

「そんな…………ジョン君は…………私のお兄ちゃんだったのつ！ ずっとずっと一緒に約束したのにー、ジョン君も酷いよ！ 私を…………私を置いて行くなんて！」

「お…………落ち着け芽衣子。お前はまだ小学生だろ？ 小学生は学校へ行つて多くを学ばないといけない」

「学校なんて楽しくないもんつ！ それに学校で勉強してもおじいちゃんみたいになっちゃうんでしょ！？ そんなの嫌だよー！」

「芽衣子・・・」

「大好きなおにこちゃんを奪つちゃうような研究者に私はなりたくない！ お兄ちゃんの居なここの世界なんていらない！ いらないんだよおおおー！」

「・・・・・・芽衣子はそんなにジュンペイ君が好きなのか？」

「う・う・うえつー？ あうあう・・・・す、好きとか・・・・じゃなくて・・・・ううん。違う。大好き。将来はジュン君のお嫁さんになるって言つたんだもんー！」

「・・・・・・会える手は一つだけあるよ」

「！ 本当ー？ おじいちゃん私をするー どんなことがあっても後悔しないからー お願ひおじいちゃんー！」

「装置は後一つしかないんだが・・・。私は無理だな。 芽衣子。ジュンペイ君と菊池君の三人で未来へ行ってくれるか？」

「ふええ？ どうこう事？..」

少女は意味が分かつていいわけではなかった。

ただ、大好きな「お兄ちゃん」に会いたかっただけだった。

「おじこちやん」は装置を使ってしまつたらもう戻る事は出来ない事を説明するが、そんな事は頭に入つて来なかつた。

ただ・・・

少女は「お兄ちゃん」に会いたかつた。

それだけなのだ。

「芽衣子・・・。 達者で・・・。」

「うそー めじこちやんおやすみなさいー。」

少女は・・・若倉 芽衣子は「ホールドスリープ装置に入つていつた。

「・・・・・・その未来が・・・・」の世界・・・

あらましは菊池女史が話してくれた。 そういう記憶媒体があつたのか、それとも単なる彼女の妄想なのか分からなかつたが・・・。 芽衣子のフリをして可愛らしく叫ぶ菊池女史を見ると、少し「痛い」と思つてしまつた。 いくつだアンタ・・・。

「わうじゅ。 まあ、芽衣は自分の名前さえも覚えてないし、ジユ

ン君の事も覚えてないが。お前さんがワシを覚えてなかつたのも同じ事じやろつが……」

といふか、俺は菊池女史に会つた事はあんまり無くて本当に忘れていただけなんだがな。

紋治さんとは話していたが、他の研究員とはあまり話したくなかっただけだ。

「……芽衣子の事は最近思い出したんだ。だけど……あの子供が……あんなに成長するつていう事は芽衣子は先に田が覚めていたんだな？」

「芽衣」になつた芽衣子を思い出して、幼少の頃の彼女と照りし合わせてみるが、あの頃の少女と今の「芽衣」では違い過ぎる。

…………いい体になつたもんだ。いや、性的な意味で。

「やつじやな。設定は同じ田だつたみたいなのじやが……。研究所があつた場所が襲撃にあつたみたいでの。ワシとお前さんとの装置は無事だつたようじやが……。装置自体が壊れてしまつた芽衣子は田覚めてしまつたよつじや」

「…………まだちょつと分からぬ事ばかりだけど……。紋治さんはどうなつたんだ？ この時代には生きてないのか？」

生きていれば80を越す妙齡なのだろうから、むづ苦しいと思つていた。ちょっと失礼な話だが。

だけど、菊池女史が語る歴史は想像とは違つていた。

「…………大尉が手伝つた研究はな、TAMの基本設計じゃつたんじや。それを完成させた業績で一時は高名な研究者として名を馳せたんじやが……。その後時代が変わり、紋治名誉教授は・・・第一級戦犯として処刑されてしまつたわい」

「！？ はあ！？ 戦犯！？ それを運用したのは国家の勝手じやないのか！？」

「そうじやな。だが、世間はそうは思わなかつたようじや。彼がこんな物を作つたから世界は混乱した！ 彼こそが諸悪の権化だ！ という声が世界中で広まつてな。そして今じや。そういうて批判していく世間はそれを使って戦争なんぞ始めよつた……。阿呆じや・・・本当に阿呆じや・・・」

「紋修さん・・・。好きだつたのにな・・・。俺を認めてくれただ一人の人だつたのに・・・」

引き籠もつていた俺にとつて、目を見て話してくれるただ一人の大人の人だつた。

そんな紋治さんが居ないといつのは・・・とても寂しい氣がしてしまつた。

「しかし大尉。感傷に浸つている場合じやないぞい。今基地は危険な状態なのじや」

「？ どういう事だよ？」

菊池文史はチラチラと窓の外を見ながら、額から汗が流れていった。

「最初の作戦からこの前の作戦の相手の行動を考えれば簡単な事じや。彼等は数でも勝てない。質でも勝てないと学んだ。そうすると次に彼等が打つてくる手は自然にそうなるじゃろうって……」

「何を……？」

ビーンビーンビーン!!

【緊急指令！ 緊急指令！ 基地内部に侵入者！ 戰闘員は直ちにこれを殲滅してください！ 敵の数は不明！ 非戦闘員は速やかに非難してください！ 繰り返す！ 基地内部に】

「な、なんだ！？」

警報が鳴った。 侵入者！？ 戰闘員つてもしかして俺も含まれるのか！？

「来たか・・・。 兵器で勝てないなら・・・人海戦術でバイロットを殺せばいいだけの話じや。 簡単な話じや」

「な・・・。 何を落ち着いてるんだよ！？ 此処も危険じゃないのか！？」

TAMの操縦は少し慣れてきたが、実戦の白兵戦なんて俺には出来る自信は無かつた。

銃は持っているが・・・。

「 うなつてしまつてはの。 慌てももう手遅れじゃ。 多分格納庫まで行くまでに撃たれて終わりじゃうつな・・・」

「 ・・・」

「 大尉。 未来がこんな世界ですまんかった・・・。 全ては大人の我々の責任じゃ・・・。 本当にすまんかった・・・」

涙を流して菊池女史は崩れ落ちた。 だが、そんな事をしていると余計に殺されてしまつ。

俺は菊池女史の腕を掴んで叱責する。

「 くつ・・・！ 謹めるなよ！ まだ、足があるだろう！？ 手があるだろ！ 単なる歩兵が来ただけだろ！ そんな奴等に花屑が負けるかよつ！」

「 大尉・・・じゃが・・・」

俺だつてこんな戦闘は恐ろしい。 痛いのは嫌だ。 死ぬのは嫌だ。

だけど・・・、諦めてしまつたらそれで終わりじゃないか！

生きて・・・生きて未来を掴むんだ。

俺も、菊池女史も、芽衣だつて・・・紋治さんに未来を託されたんじやないか！

「 紋治さんは言つた！ 俺が平和に暮らせるように手を打つてある

ヒー、だから、こんな状況になつても大丈夫な手があるはずだ！」

「…………強いの大尉。お前さんはこの世界に合つてゐた
いじやの。やつぱりワシも惚れそつじやわい」

「なつ！？ こんな時に何を言つて 」

菊池女史はとんでも無い事を言つた。既に引き続いて菊池女史
も！？

ああ、そんな事言つてゐる場合じやなかつたな。

「分かつた！ とつあえずざつにかして格納庫へ急ぐぞい！ 大尉
！ 純はもつとるな！？」

「ん？ ああ、ちゃんと支給されたのがあるぞ」

俺は軍服のポケットから一つの短銃を取り出した。だが、武器
はそれとアミーナイフだけで、菊池女史の分が無い。

だつたら、俺はこんなちつぽけな銃で菊池女史を守らなといけ
ないのか・・・。

大変だな。

「よし。ワシは・・・コレジヤ」

メス？

「ワシがコレを持つたら・・・無敵じやといつ事を教えてやるつか

の・・・ハビ・・・

「菊池女史が怖い・・・」

キラリと光るメスを片手に菊池女史は格納庫まで走っていく。

その姿は凶器だけに狂気に満ちていた。

マシマシ下がる・・・。

俺と菊池女史は警戒しながら格納庫までの道を疾走するのだった。

第16話『花の肩をつかと覚えてこむ』（後書き）

http://9922.at.webry.info/2008
02/article_13.html

にて

番外編を公開中～

・・・ストーリーと全く関係無い話なのでこちらに投稿はしません。
この（http://9922.at.webry.in
fo/）ブログ内ではこちらには無いイラストや番外編が少し
合つたりするので興味がある方がこちらをチェックしてみると良い
かもしませんw

第17話『花の屑は咲き乱れた後に散る』（前書き）

敵が基地へ侵入してきた。

私はそれを迎え撃ちながら歸と合流する為に走る。

銃声と悲鳴が響く兵舎の中で、私が見たのは・・・

第17話『花の屑は咲き乱れた後に散る』

走る。走る。

右左右左右左右ミニギヒダリ・・・・・

交互に足を投げ出して、ただ、私は走る。

基地が燃えていた。

襲撃があつたと先程警報が鳴っていた。

私や、ちゃーこ達は訓練を受けているから大丈夫だけど・・・。

大尉や菊池女史は危ない。

先程大尉の部屋を覗いたが、誰も居なかつた。

何処に行つたの！？ 大尉！

「ちよ・・・なんなのよアナタ達は！」

「！・・・これは香具羅の声！」

声のした方へ向き直ると、香具羅と知らない者が対峙していた。

あれは・・・敵の兵！

「イキナリ乙女に向かつて銃を向けるなんて失礼じゃない！ 早く
その銃を」

パン！

「！」

敵の兵は躊躇無く発砲した。

香具羅は、その刹那撃たれた反動で後ろへ倒れしていく。

「！」

香具羅ーと叫びたかったが、敵はこちりに氣付いていない。

私がするべき事は、彼女の死を無駄にしない事だ。

今は感情を捨てるべきだった。

私は手に短銃を取り出して・・・

敵の頭を狙つて発砲した。

パン！

その銃弾は見事命中して。 敵の兵は「あらに氣付く」となく絶

命した。

流石に肩を狙おうとは思わなかつた。 だつて、香具羅を殺した相手だ。

手加減なんて出来ない。

「勝手に殺すなあ————！」

香具羅の亡靈が何か叫んでいる。 「めんなさい。 私がもっと早く気付いていれば……。」

成仏して。 香具羅……。

「肩を打たれただけっ！ ちょっと芽衣、助けてくれたのは感謝するけど無視は酷いんじゃない！？」

「香具羅…………。 貴女の事は忘れない……。」

花屑で初めて戦死者が出てしまつた……。

私の判断が遅かつたせいで……。

こんな私は軍人失格だ……。

「いや～……。 いいからアンタは私の話を聞きなさい。 人を美しい思い出にしないでくださいませんか？」

そうだ。今は悲しんでいる暇は無い。彼女の死が後々に美しい思い出になるかどうかは生き延びてからだ。

それまで……貴女を忘れておく。わよつなら……。

「私……怒つていいのかしら……」

実は香具羅が言つて居る事が聞こえないわけでは無いのだが、私は本当にショックだつた。

今回はたまたま外れただけで、タイミング的には間に合つて居なかつた。本当なら今頃、私の田の前には血溜まりに横たわる屍があつただけだろう。糸の切れたマリオネットのように役目を終えた人形は、捨てられるだけだ。

「所詮は駒の一つでしか無いのね……。戦いは空しい……」

「聞きなさい——！」

「スパー——ン！」

「…………カグちゃん痛い」

「誰がカグちゃんだ——？」「冗談はおいといて、ヤバいわ芽衣。せん達は無事かしら……」

「皆はそんな命乞いして撃たれるようなへマしない……」

「ちよつとー？ アンタ実は性格悪いでしょー？」

とにかく基地に敵が何人も侵入しているのは確かのようだつた。少し離れた場所で銃声や爆発音が聞こえて来る。

誰か戦っているのか……。

「とにかく皆と合流する事が先決」

「そうね。私も肩を撃たれたけどまだ動けるわ。 魅夜に見られたくない状態だけど、そもそも言つてられないわね」

香具羅はズボンのポケットから白い布を取り出して肩の付け根をキツく縛つた。

少しでもそれで止血になるだろうが、激しく動かす事は無理のようだった。

「……完全にお荷物」

「容赦無しかオイっ！？ ……つづつ……いたひ……」

「やつぱり痛いのね」

「痛いよー 痛いさー 痛いだろひさー」

よく分からぬ三段活用だったが、とにかく痛い事は分かつた。

「……香具羅。緊急時にふざけ過ぎ。血重した方がいい」

「……後で絶対泣かせるから覚えてなさいよー」

そこまで元気に叫ぶ香具羅は心配しなくてもいいようなので、私は銃声が聞こえた方へ進んでいく。 それに仮頂面で着いて来る香具羅。

暫く歩いていると、敵の兵と思われる者が銃を構えて通路で仁王

立ちしていた。

撃つてくれと言わんばかりの体制だったので私達は一人で銃口をその適へ向けた。

「おつと。お嬢さんたち。撃つてもいいのかな?」

敵が田の前に居るのだ。撃たないわけが無いだろう。だが、敵の自信満々な態度が気になつた。何故そんなに落ち着いているのか?

答えは彼の足元で崩れている者のせいだった。

一瞬それが誰だか分からなかつたが、薄汚れた茶色いツナギを來た「男」だったので、すぐに分かつた。この基地に男は大尉以外は「彼等」しか居ない。

「整備員さん・・・」

「・・・・・アンタ本当に名前覚えるのが苦手なのねえ・・・。
タケシ君でしょアレ・・・」

「・・・・・・・・そんな名前だつたんだ・・・」

「芽衣さんは冷血女だという事でファイナルジャッジ。タケシ君・
・・」

香具羅が何か言つているが、普段ほとんど顔を合わせていない整備員の名前を覚えていないというのは別に悪い事では無いはずだ。彼等にはいつもヒナギク達を整備して貰つて居るので感謝してい

る。

だが・・・人質という事なのだろうか？確かに非戦闘員だが、彼も軍人だ。覚悟は出来て居るハズである。

「おいおい。なんだその反抗的な目は？『コイツの命が惜しくないのか？』

敵兵はショットガンタイプの銃を持っていて、その銃口を整備員に突きつけていた。

警備員は気を失っているのか微動だにしなかつたが。

「・・・・下衆・・・・」

「あん？ 何か言つたか？」

「なんでもない。これでいい？」

いくら名前を覚えていないからと言つても、彼も大事な仲間だ。見捨てるわけには行かない。香具羅も同様に思つたようで、私とほぼ同時に持つていた銃を床に捨てた。

「よし。それでいい。じゃあ・・・・死ね」

「ドン！」

敵兵はこちらに向かつて躊躇無く発砲した。その弾道を見切ることも出来ずに私と香具羅は全身に無数の傷を負つ。散弾銃なので、距離があれば威力は小さいが、細かい傷が体中に出来て、私も香具

羅もその為の傷で真っ赤に染まってしまった。

「おほり・・・。遠すぎたか。今度は外さねえぞ・・・。」

銃を両手に持ち替えて、近づいてくる敵兵。アレを至近距離で食らつたら・・・粉々に吹き飛んでしまつだろひ。私達に武器は無い。そして、逃げる場所も無い。

万事休すだつた。

「芽衣さんつ！ 香具羅さんつ！ 逃げてください！」

「な、てめえ！？」

そこで整備員のタケシは気がついたのか、敵兵の足を掴んで叫んだ。

駄目 そんな事したらつ！

「邪魔・・・なんだよつ！」

ドン！

重い衝撃が響き渡つた。敵兵は足元の整備員に発砲。整備員は・・・その一瞬でもつ一度と動かなくなつてしまつた。

・・・・・・あの距離からでは万が一でも助かる見込みは無かつた。

死んだ。

今度こそ。

私の目の前で。

私の仲間が死んだ。

私の目の前で。

私は何も出来なくて

私のせいで殺してしまった。

パンパン！

私は床に落とした短銃を素早く拾うと1発、2発と連続で発砲。一発目で敵の銃を落とし、二発目で敵の肩を打ち抜いた。

そして

死ね

「ぐあああああああああ！」

パンパン！

私は敵の胸に向かつて更に2発打ち込んだ。

狙いは一発も外さない。
この距離で外すわけが無い。

パンパン！

更に2発。

今度は両膝を狙つた。
崩れ落ちる敵兵。

ハンハン！

更に2発

その軌道は正確に両手の手の平を打せ抜いていた

「ああああああああ！」

何度も繰り返される悲鳴。一発で仕留める事をせず、いたぶる様に狙つた銃撃に、後ろの香具羅は青い顔をしていたようだつた。

「……………悪趣味だつた。
『めん』

パン！

「それが敵の額に風穴を開けて敵を完全に沈黙させた。」

「……………キレると怖いわ……………芽衣は……………」

そんな事を香具羅は呟いていたようだが、私自身こんな事が平気で出来るとは思わなかつたのだ。

整備員を助ける事が出来なかつた。

こんな調子では誰も助けることなんて出来ない。

シユル・・・。

私は髪留めを外した。 左右に垂れる髪が自由に流れるウエーブを作る。 どっちかと言えば癖毛なので、それ自体には意味は無い。

髪留めはリボン状になつていた。 それを額に巻く。

なんて事も無い。 ただ気合を入れる為だ。

古い言葉で「ハチマキを締める」という言葉があつたような気がしたからだ。 ・・・アレは本当にハチマキだつたか？ 正しいか間違つているかは問題ではない。

「行け。 香具羅」

「OK。 いぢりもダメージは軽いよ」

腕をやられてゐる香具羅は氣丈にもやつぱり着いて着いてきた。 彼女も他でもない花肩の一人だ。 こんな事で脱落するような弱い心は持つていない。

私と香具羅は無言で顎を合ひ、他の喧騒がする方へと駆けていつ

た。

「ひとつー、二つー、三つー、四つー。」それで終わりだあーー！」

「アホなやつらが何をやっているのかわからん。」

「わあ～ちやー！」絶好調・・・」

「敵じゃなくてよかつたなの・・・えいつ」

パン！ パン！ パン！ パン！ パン！ パン！

丁度同じ頃、ちやーいとせんと菜乃隊長は会流して、各々に敵を殲滅していた。

その中でもこういう戦闘をもつとも得意とするひやーーは本領発揮と言わんばかりに暴れていた。

敵の兵が一人、二人と倒れていき、周囲に動くものは殆どいなくなっていた。

せんは
ちやーこが戦闘不能にして、菜乃隊長がトドメを指す。
敵が来る方角をちやーこへ教えていた。

見事な連携プレーだった。

「芽衣達は大丈夫かねえ・・・。まあ、あの子は個人レベルでは心配無いだろうが・・・誰かが一緒に極端に油断しちまうからなあ・・・」

ちやーこの心配は的中していたのだが、それは後で合流してからという分かった事なので、その時の彼女達はまず田の前の敵に集中していた。

「そういえば、魅夜は見つかったなの？」

「ううん。部屋には居なかつたみたいだよお~。」ついにつ時魅夜は行動早いから一番最初に応戦してると思つたけど、基地の中にはいないっぽいよ~」

隊長の問いにせんが答えるが、その台詞が「本当に基地の中に居ない」とは思わなかつただろう。

後になつて気付いたが、その時には彼女の愛機のTAM-03モクレンも無くなつていたらしかつた。

隊長達は基地の中の味方の生存を確認するために基地の中を散策するのだった。

「・・・・TAMの発信音?」

「え？ そんなの聞こえた？」

「うん。 間違いない。 今のは・・・誰かがTAMを動かしたみたい」

「うわ・・・敵じゃないことを祈るばかりね」

同じ頃、私と香具羅はそんな音を聞いた。

基地の通路には敵の兵が何人も倒されていた。 この屍の先に味方が居るのだろう。

私は急ぐ事無く、警戒しながら歩いていく。

先程の失敗を無駄にしない為にも細心の注意を払って歩く。

足元に倒されている敵の兵は全て絶命しているようだった。 だが、死体に紛れて襲つてこないとも限らないので動く物が居ないか慎重に目で追いながら歩いた。

幸い、そんな者も居ないようで、私達は屍を作った張本人達と合流する事に成功するのだった。

「隊長！」

「芽衣！ 無事だったなの？ あらあら・・・香具羅はひょっとやられちゃってるなの？ 可哀相・・・」

隊長達は流石にほとんど無傷で居てくれた。何だかその後ろで
ちやーー」がふてくされていく。

「むー。『イツら弱過ぎだぜー！　たのしくないつー』

「ちやーー」・・・・不謹慎・・・・

戒めるように言つてみるが、そんな台詞も眞に入らないと言わんばかりにちやーーは拳を突き上げて叫んだ。

「しゃーーひっぷー！　私は楽しく無い戦いはしたくないのー！　強敵と書いてトモと読むー　そんな相手は居ないのかしらねー」

「・・・・・・・・山に登つてクマとでも戦つて来なさい。ええと、あれ？　魅夜は居ないの？　大尉とかも居ないのね」

香具羅がそんなちやーーを無視してキョロキョロと見渡した。
その場に居るのは隊長と、私と、ちやーーと、せんと、香具羅だけ
だった。

非戦闘員の菊池女史も居ない。

「見てないなの。進入してきた敵はそんなに多くなかつたみたい
だけど、彼等だけでは危険なの。探しましょー」

どうやらちやーーが大抵の敵を片付けたらしく、基地の中に進入
した敵の数はもう数人になつてゐるらしかった。

進入した数はおよそ100人程だったらしいが・・・。

「ちやー」達はその8割を倒したそうだ。

私は2人だけだったのだが・・・。

つづづく敵、じやなくて良かつたと思つ。

「でも、敵の数が少なすぎるねえ。まだ来ると思うよお～」

「いっ！？」

せんが不吉な事を言つてくれる。

せんの言葉は色々な事象を元に発言されるので、不吉なんでものじやない。

どういうわけか、彼女が言つた事は現実に起つてしまつという事だ。

ビーンビーンビーン！

ほら、警報だ。

【戦闘員各位へ！ 格納庫に敵が侵入した模様！ 繰り返す格納庫へ敵が侵入した模様！ 直ちにこれを殲滅してください！】

「はいはい。 次は格納庫ね～」

「ちやー」はシャドーボクシングしながら格納庫への道を先導していく。

兵舎から格納庫はそんなに離れていない。

私達はすぐに目的地へたどり着く事が出来た。

格納庫の前で、黒衣の女性と、軍服の男が座り込んでいるのが見えた。

あれは・・・大尉と菊池女史?

「おーい！ 大尉！ 菊池女史！」

ちゃーこがそちらに歩み寄ると、菊池女史は何故かメスを手にちやーこに駆け寄つて行く。

「！？」

「カットカットカットカットオオーー！」

煌くメス。それを生身で防御するのは危険とちやーこは後ろへ飛び退いた。

菊池女史はトランス状態だった。

「ちや、ちやーこ逃げろ！ ソイツはバーサーカーだ！」

地面に座り込んでいた大尉が叫ぶ。こんな状態の女史に振り回されていたのか・・・。そりやへたり込んでしまうわけだ。

「我が剣に・・・・・断てぬ物無しじや！」

「それ剣じゃないじゃん！？」

突つ込みながらも、ちゃー」は菊池女史の攻撃範囲の外から一気に詰め寄ると首筋に手刀を叩き込む。

「きよほつ！？」

その一撃で菊池女史は電池切れしたようにパタリと倒れた。

「はあはあはあ・・・・。敵の兵よつよつぽど骨があつたぜ菊池女史・・・・」

「なんだかなあ・・・・」

狂戦士となつた菊池女子を静める事に成功したが、格納庫に敵が侵入したという事はまだ解決していない。

私達は格納庫の扉が開け放たれているのを見て戦慄した。

もし、敵がT A M を使ってこちらを攻撃してきたら・・・・・・生身の私達に成す術は無い。

「大尉。敵は何人入つていったなの！？」

先に来ていた大尉に状況を説明して貰おうとしたが、大尉達もさつき来たばかりらしく、中の状況は分からいらしかつた。

動くに動けない。だが、どうにかして中を確認しなければ……

第二波が来れば流石に危ない。

「ここに居ても仕方無いな。 皆、注意しながら中に入るな」

判断が遅ければこの後どんな惨劇が待つてはいるか分からぬ。

そういう意味では菜乃隊長の判断は早かつた。

だが、そんな命令はすぐに意味を無くす。

格納庫から敵が10名程出てきたからだ。

「ちっ！ 中のポンコツ動きやしねえじゃねえか！ テメエら整備
ぐらいしやがれっ！」

敵のリーダーのような奴がそんな事を叫んできた。

動かない？ そんな事は無いハズだけど……。 TAMは誰でも動かせるハズだし……。

という事は誰かがロックを掛けた？

いや、そんなロックなんてあつたか？

私は操縦は得意だが、そういうプログラム系統には弱かつた。

だから、その後TAMが一人で動いているのを見て目を疑つてしまつた。

「な、なんだコイツ！？ 誰が乗つてやがるんだ！？」

そのTAMの搭乗者達は目の前に居る。この場に居ない魅夜が動かしているのかと思つたが、格納庫から出てきたのは6体のTAMだった。

TAM-03モクレンだけ出てきていない。

「オートで動いてるっぽいな。こんな事出来るのは魅夜だけなの」

隊長の咳きに、TAM達は敵に向かつて攻撃を開始した。
生身の相手にTAMの攻撃は一たまりも無く、一瞬にして敵は掃討された。

「ち・・・ちくしょう・・・せめて・・・一人だけでも・・・」

「ま、まだソイツ息があるの！」

隊長が叫ぶ。敵の一人が虫の息でありながら銃口を向けて撃とうとしていた。その銃口の先には・・・大尉！

「死ねつ！」

「うわっ！？」

パン！ カン！

発砲音と同時に何か金属が弾かれる様な音がした。

大尉の前にTAMの手があつた。

TAMが人を守つた！？

「おー・・・オニコリ。 サンキュー・・・」

大尉はその手の先の黒い機体を見上げながら笑つた。 TAM-06オニコリはそれに応える様に眼光を光らせた。

TAMには・・・心でもあるのか？

いや、 そうプログラムされているだけだろ？。 設計者の茶目つ氣・・・。

これを製作したものは中々ユニークな思想の持ち主のようだ。

「皆！ 早く乗り込んで！ この後に波状攻撃がくる可能性が高いの！ 迎え撃つ準備をして！」

『ラジヤー！』

なんにせよ、 私達はTAMに乗る事が出来た。

ロックが掛かっていたのは敵からアクセスがあつた場合のみで、 私達が乗り込もうとするとすんなりと「ロックピットへ乗り込む事が出来た。

「よし。乗り込んだなの？」

「まーはーへやーー！」
「だぜ」

「せとむーいよ～」

「香具羅問題無し」

「OKだ。隊長」

「…………問題無い」

隊長へ5人が答えた。

先に乗り込んでいると思われた魅夜の返答は無かった。

「あれ～？ 魅夜？ 格納庫に居るなの？ 応答してなの」

…………

しかし、その通信には何の応答も無かつた。

私も、TAM-03にて通信しようとするとアクセス拒否を受けてしまった。

「おーい。モクレンが無いぞ？ 魅夜どつか行つたんじやないか
？」

大尉のTAM-06オーユリが格納庫を覗き込みながら通信してきた。

魅夜が居ない？ 機体ごと？

「…………嫌な予感がするよ……。もう、魅夜には会えない気がする……。」

せんが悲しそうに呟いていた。

どういう事？ 魅夜は何処に行つたの？

「まつて！ 通信が入ったなの。これは……ファイル転送？ 添付動画？ ……皆、今から送るのを見て欲しいなの。 魅夜からみたいなの」

「？？ 動画ファイル？」

「クピットのディスプレイに隊長の期待から動画ファイルが転送されてきた。 送信者はTAM-03モクレン。」

魅夜が何か送つてきたらしい。

「これは…………」

それは魅夜のラストレターだった。

第1-8話『花の肩が語りかけてくる』（前書き）

TAM-06モクレンから送られてきたのは、居なくなっていた魅夜からのメッセージだった。

第18話『花の脣が語りかけてくる』

「…………なんのつもりだよ…………。 魅夜っ！」

転送してきたファイルを開いてコックピットのディスプレイに映し出される魅夜を見て俺は叫んでいた。 こんなタイミングで送りつけてくるものだ。 ただの洒落じゃないハズだ。

俺の予想は辛くも的中してしまった。

『嘘、見えてるかな？ えーと…………。 こんな物を送りつけてしまってごめんね～。 すぐ終わるから聞いちゃって欲しいの』

ファイルは動画ファイルだった。 魅夜の映像が映し出されている。 口調はとても軽いが、魅夜の表情が少し硬い。 だから、俺はそれを茶化す事は出来なかつた。

『これ見てるつて事は敵さんあらかた倒しちゃつたかな？ まさか全滅した一人が見てるつて事は無いわよね～？ お姉さん信じてるからね ええと・・・・察しの通り、私は基地に居ないのだよ。

今は敵国の制空圏まで来てるのかな？ 先日敵の本拠地が分かつてね～。 お姉さん特攻なのだよ』

「な・・・何を馬鹿な事を！」

俺はディスプレイを叩き割りたい衝動に駆られたが、それを抑えてディスプレイを食い見る。 これは動画なので、こいつに文句を言つても仕方ない。 動画の中の魅夜の話は続いた。

『TAMにはね。みんなの知らない機能がいっぱいあるのだよ。隊長の超兵器もそうだけど、それぞれにとんでもない兵器が組み込まれていたりするのだよ。出力の問題で乱発は出来ないだろうけど、芽衣の機体にも隊長の機体ぐらいの火力があつたりするよ。お試しあれ』

「……………そうなの？」

『うん。今芽衣が「そうなの？」って聞いてくるのが目に浮かぶわ。まあ、そのあたりのリミッターは解除しておいたから存分に使ってね。メカニックじゃないのにそんな事が出来るってあたりは突っ込んじゃ駄目よ？私に突っ込んでいいのは大尉の男の子だけなのだよ』

「ちつ……ハリセンの届かない所でボケるんじゃねえよまつたく……」

それを見越して言つているのだろうが、俺はディスプレイに「写る魅夜に向かつてハリセンをたたきつけた。その衝撃でディスプレイに写る魅夜が一瞬ブレる。

『そして、私の機体には……。とんでも無い量の火薬が搭載されていたのだよ。そして、それを使う方法は……自爆』

『……………というわけで、最後の通信なのだよ。せん聞こえるかな？』

「！？」

「う……うん！ 聞こえるよお！」

動画の中の魅夜に答えるせん。『あれ?』と魅夜が居るよつに動画を見ているのだろう。

『せんは困った能力でずっと悩んでたみたいだけど、今回大尉に救われたね。この前の作戦の後、自然に笑ってるせんを見てお姉さん安心しちゃつたよ~』

「うん! 大尉のおかげだよ」

『本当に良かつたね。』これからも・・・花肩を守つてあげてね。私の分まで・・・』

「・・・・・・魅夜・・・。『うん! 分かつたよおー!』

せんの声は一瞬震えていたが、最後には元気に答えていた。

『次は、ちやーー!』

「お、おうーー!」

『多分とっても男らしく答えてくれてるんだろうね~。ちやーー!』
は自分の性格に悩んでたみたいだけど、それを気にしない人に出来て良かつたね。本当に大尉様々だよね』

「・・・・・・。

『でもね、私は知ってるよ。本当にちやーー! も女の子らしきって事はね。今度その所を大尉に分からせてあげたらどうかな?
楽しみだね~』

「・・・魅夜・・・」

ちやーーの女らしいとこ? ちやーーは元々女じゃないか。魅夜は分からぬ事を言つなあ・・・。

『次に香具羅。貴女とは長い付き合いだつたね。いつも困らせちゃつてごめんね? でも、私香具羅の事とつても大好きだつたんだよ?』

「ちょ、何恥ずかしい事言つてるのよアンタは!」

香具羅は恥ずかしそうに叫んでいたが、まんざらでもない様だった。この一人つて仲が良かつたんだな。そういえば俺が見た初日にもじやれ合つていたけど・・・。

『香具羅。貴女は強い子だからもう一人でも大丈夫だよね? ううん。大尉が居てくれるから大丈夫かな? それに皆も居てくれるしね。 私から卒業する時が来たのだよ!』

「・・・何よそれ・・・何勝手な事言つてるのよアンタは! ! ホントに勝手過ぎるわよ!」

そうだ。 魅夜は勝手過ぎる。

誰にも相談せずに一人で特攻するなんて・・・。

『次は~隊長かな? 隊長~今までありがとうございました~』

「・・・・うん」

動画の中でペコリと頭を下げる魅夜。 多分隊長も同じように頭を下げているんだろうな。

『ここ最近の戦闘で大尉に出し抜かれちゃったね。 でも、隊長はそれで自分の欠点を知ったハズだよ。 欠点を知った隊長は、もう同じ過ちを犯す事は無いハズだから花屑も安泰だと思つ。 もう、花屑は無敵だね！』

「も、もちろんなの！ 花屑の隊長は私なの！ 任せて欲しいの！」

『つて、偉そうな事言つちゃつたけど、隊長は気にしないよね？ 私、隊長のそんな寛容な所大好きだつたよ。 花屑に配属されて本当に良かったと思つてる。 ありがとう隊長』

「魅夜・・・・・・」

通信の先から隊長の声が途切れ途切れになつて聞こえてくるのが分かつた。 隊長は、多分泣いていた。 他の者も多分泣いているのかもしれない。 僕だって・・・

『後、芽衣。 アンタには一言言つておきたかったのだよ』

「・・・・・・何？」

『この泥棒猫ー。』

「・・・・・・うん」

『多分「・・・・・・うん」とか薄情な事言つてるんだろうけど、

まあ許してあげるよ。私は玉砕しちゃったからね～。大尉とお幸せに～。いやいや～どうなるか分からぬけどね～』

「・・・・・・・・・・」

『でも、大尉のおかげで芽衣も感情を出せるようになつたんだからそれは嬉しかつたよ。ずっと見守つてたかいがあつたつてもんだよ～。皆も同じだらうけどね。芽衣、もう忘れちや駄目だよ？

貴女はとつても素敵な女の子なんだから・

絶対、幸せになるんだよ？ お姉さんからの命令つー』

「・・・・・・魅夜」

『じゃあ、取りをつとめるのはやつぱり大尉！ 大尉～見てる～？』

「今更何言つてんだお前は・・・」

見てなかつたらこの映像も見えてないだろ？が・・・。

『いや～大尉が来て花屑も変わつたね～。色々言いたい事はあるけど、あんまり時間が無いからちやつちやと済ますよ～。大尉、今までありがと～』

「ああ。」[ちらり]そな。お前が騒いでたから緊張感なんて無かつたのかもしれないから助かつたぞ』

『駄目よ～。本当はお前が好きだなんて！ 私は散りゆく花・・・』

スパーク～！

俺はハリセンをディスプレイに叩き付けた。もちろん映像の魅夜にダメージを与える事は出来なかつたが、つい体が動いてしまつた。

『なんて。もう言えないのは寂しいね……』

「…………まあな」

『でも、大尉が居るから花屑は大丈夫だと思ったからなのだよ。多分これが成功すれば・・・当分敵さんは動けないか、もしかしたら終戦なんて事にもなるかもね〜』

「……！ だつたら！ 皆で行けばいいじゃないか！ お前一人で行く意味が分からぬぞ俺は！」

『チツチツチ。 敵の本拠地なんだよ？ 皆で行つたらそれだけ危険でしょう？ 私一人だから搅乱させてダメージを与える事が出来るのだよ』

「…………ちつ。 こちらの反応は予想済みか」

本当は途中からライブ映像なのかと訝つたが、確認するとやはりそれは動画ファイルだった。

『あーなんか最後つて感じがしないなあ。 でも、もうすぐ着くみたいだから言っちゃうね。 大尉・・・』

映像が少しづつ乱れてきた。 画面の向こうでは、もう攻撃を受けてしまっているのかもしれない。 だが、魅夜は最後までこちらを見つめていた。

「ああ・・・」

『大好きだったよ。本当に愛してた・・・。だから・・・生き
て大尉・・・。私はもう居なくなっちゃうけど・・・大尉には未
来を掘んで笑つて欲しい・・・。それだけが』

私の望み

ブチン！

そこで魅夜のラストレターは終わっていた。

「なんだよ・・・何カツコつけんだよお前はっ！　お前は本当に
自己犠牲が過すぎるんだよオイ！！」

ディスプレイに拳を思い切り叩きつける。

その衝撃でディスプレイが大きく揺れた。

「オニユリ内部に激しい衝撃を確認。内部センサー部を確認中・・
・・・異常無し」

TAM-06オニユリのオペレーションシステムが衝撃を異常と
誤認してメッセージを流した。

「魅夜・・・・・・」

誰ともなしに「彼女」の名前を呼んだ。

皆動画を見終わったのだな。

誰も他に通信しようとするものは居なかつた。

そこに隊長機へ通信が入つた。

「はい。 本部？ え・・・敵国の本部が・・・全滅？ はいはい。
・・・・停戦協定？？ それって・・・了解しました」

隊長は何処かとの通信を終えて、皆に向かつて一言だけ言った。

「皆・・・お疲れ様なの。 ・・・ 戰争は終わったなの」

その通信を最後にTAMは活動を停止した。

俺は今度こそディスプレイを割る勢いで拳を叩き付けた。

だが、意外に強固で俺の手が赤く腫れ上がつただけだった。

いりして俺達の戦いは終わった。

せんの一戦目の予言が外れてしまつたが、それは良い事だつた。

彼女は「この後敵が攻めてくる」と予言したのだが……。

停戦協定が結ばれたのに攻めてくる馬鹿は一人も居なかつた。

いや、運命が変わつたのか。

こうなる経緯には色々な分岐点があつたハズだ。

敵が打つて出てくる前に攻め込んでいたら何か変わつたのかもしれない。

それより、魅夜をあの時受け入れていたら……何か変わつたのかもしれない。

何かをしていたら……魅夜は生きていたのかもしれない。

アイツが死んだなんて……信じられない。

つい朝方には……笑つて話していたのに……。

昨日だつてハリセンを振るいながら一緒に勝利を噛み締めていた

ハズだつたのに・・・。

戦争は終わつた。

だけど、それを一緒に祝う・・・魅夜が居ない。

俺は魅夜を女としては見なかつたが・・・大切な仲間だと思っていた。それに友達だとも思えていた。

胸が・・・・苦しい。

「大尉・・・もう、終わつたなの・・・」

自分の部屋で塞ぎ込んでいた俺に隊長が話しかけてきた。

「何が終わつたんだ？ 魅夜の人生がか？」

「！！」

隊長は衝撃を受けたように仰け反ると、無言で部屋を出て行つた。

俺はその日、誰とも会わずに自室で塞ぎ込んでしまつた。

第1-9話『花の肩は桜の花』（前書き）

魅夜のおかげで戦争は終わった・・・。
だけど、本当にこれでよかつたのか？

俺は納得いかないまま自分の部屋に引きこもってしまった。

第19話『花の脣は桜の花』

戦争が終わったからって、それがなんだといつのだらう？

残つたのは・・・こんなにも悲しい事実だけじゃないか！

俺はその日から誰とも会わなくなつた。

誰が来ても答える氣力が沸いて来なかつた。

「結局・・・世界が変わつても俺はこんなになつてるんだな」

自嘲氣味に笑う。 過去の俺も、今の俺も結局は引き籠もつてしまつてゐる。

未来を託してくれた紋治さんが見たらどう思つだろうな・・・。

「・・・そんな大尉を魅夜が見たら、どう思つ？」

「！？ 芽衣？」

いつの間にか芽衣が居た。 部屋に入つて來た氣配は感じなかつたが・・・。

それだけ俺が参つてしまつていたのか。

「大尉。 本当に戦争が終わつてしまつたわけじゃない。 多分敵

国は戦力が回復したらまた攻めて来る。 そんな時に大尉がそんな状態だと困る」

「何を言つてるんだよ！ 僕なんかどうしたって、皆強いから大丈夫だろ？ 僕はもう戦いたくない。 放つておいてくれ」

「…………嫌。 私は大尉が大好き。だから、何もしないで死んで欲しくない」

「…………芽衣」

芽衣は強い。 僕の様に魅夜の死を引き摺つているなんて事は無いのかも知れない。

その強さが今は羨ましく思えた。

「私は気付いた。 大尉が好きだつて事を……。 それを大尉に言えるのは、もしかしたら魅夜のおかげかも知れない」

「…………」

違つた。

芽衣だつて魅夜を思つていた。 僕だけがこうやって塞ぎ込んでいるわけじゃない。 皆、心に大きな穴を開けてしまったのだろう。

ただ、それをどう引き摺つていいかの問題だ。

俺の様に、何もしたくないと思つて塞ぎ込んでいるのはちょっと恥ずかしく思えてきた。

「そうだよな。俺がネガティブになるなんてうらしくないよな」

「……うん。大尉はいつだって私達に勇気をくれた。大尉は強い人」

「いや、あんまり物事を深く考えないだけなんだけどな？おっしつ！元気が出たらちよつと思い出した事があるぞ。芽衣、イキナリだが聞いてくれるか？」

「うん。元気な大尉の方が好き。…………何を？」

「芽衣。いや、芽衣子。お前と俺は過去から來たって話や」

俺は菊池女史に聞いた話を芽衣に話した。といつより、俺自身思い出した事だつたのだが、芽衣が岩倉 芽衣子で、TAMは俺と芽衣子のお爺さんが紋治さんが基本設計した物だといつ事、そして、紋治さんが俺達に未来を託した事を話した。

すると芽衣は最初は困惑顔だったが、次第に何かを思い出すように首をひねっていた。

そして、俺の顔をじっと見たと思うと、ポツリと呟いた。

「おに……い……ちゃん？」

「そうだ。ジュンペイ兄ちゃんだぞ。芽衣子」

小さかつた頃の芽衣子の面影が目の前の芽衣と重なった気がした。

昔からずつと着いてきていた幼馴染の女の子。確かに六つは離れていたハズだったが、田の前の芽衣は少女から女になるいつという成長振りだった。

「…………お兄ちゃん！　お兄ちゃん！　会いたかったっ！」

一気に感情が溢れる様に抱きついてくる芽衣。

だから……そんな体つきのまま子供みたいに抱きついてくるなつて！

困った事に、俺は芽衣を意識しまくってしまっていた。端的に言えば煩惱全開だった。

芽衣の髪が頬を撫でる。芽衣の柔らかな腕が俺の背中に回る。控えめな膨らみが俺の胸に当たる。鼻腔に芽衣の匂いが……、芽衣の体温を感じた。

なんだ。俺って意外に元気じゃないか。

「芽衣……」

芽衣の体を両手で抱きしめながら、その存在を確かめるように俺は繋がりを求めた。

俺の唇が芽衣の小さな唇に重なり、近づくと、芽衣はそれを見て静かに目を閉じた。

・・・・・

いいのか？

「・・・・・・・・・・・・」

芽衣は何も言わずにただこれから来るであろう接接近を待っていた。

キスだ。接吻だ。ベーゼだ。

頭の中はそれだけになってしまった。

鼻息が少し荒くなってしまっていたかも知れない。

だが、此處で怖氣づいてしまっては男として名が廃る。

いざ・・・いただきます。

バン！

「大尉！ 大変だ敵が攻めてきたぜ！ ・・・つてアレ？ ・・・
・・・・お邪魔だったかなあ？」

急に入つて来たちゃーこが、俺達の様子を見て仰け反つて後ずさりしていた。

ちゃーこ・・・空氣読んでくれ・・・。

じゃない、敵襲！？

「はあ！？ なんでだよ！ 停戦したんじゃなかつたのかー？」

「そのハズだよー。だけど、実際に敵が攻めてきたんだつてばー。」

その後、司令室へ行くと、ちやーじが言つ通りに敵の部隊がこの基地に迫つてゐるようだつた。

その数は・・・数え切れない程だつた。

「どうこいつ事だよ隊長！ 戰争は終わつたんじやないのかよー。」

司令室でモニターを見ていた隊長に詰め寄ると、彼女は険しい顔をして頭振つた。

「・・・ええ。表向き上は終わつてゐるハズなの・・・。多分これは非公式な部隊なの。確認したら、イーストサン側もそんな命令を出してないといふ回答なの」

「なんだ・・・つて？」

俺は司令部のモニターに映し出される敵の映像を食い見た。 T A M が旧式と新型が入り混じつて100や200では済まない数がゆっくりと進軍してゐるのが映つてゐた。

「声明が出たみたいだよおー。 ええと”我々は散つていった同

胞達の無念を晴らす為、鬼畜国家へ鉄槌を下す者。イーストサン
国家万歳”だつてさ。要は逆恨みつてヤツだねえ。戦争して
てそんな事言い出したらキリ無いじゃん~」

「国際問題がどうとか悠長な事は言つてられそつも無いみたいね」

何を馬鹿な事を言つているのかと思ったが、戦争なんてそんな馬
鹿な理由で起こつてしまうものだ。一人の危険な思想に賛同して
しまつたりして起こつたりするんだ。

その証拠にモニターには一体のTAMが先導しているのが映つて
いた。

多分、そいつが首謀者だわ。

「丁度いいぜ~」しつちは魅夜の仇を討ちたくてウズウズしてたん
だ！ 大暴れさせてもらつぜっ！」

「ちやー」は気合十分に拳を打ち合わせていた。

だが、モニターを見る限り数が違いすぎると。こんな中に突っ込
んでいつたら大死もいいとこだ。

それに、俺はもう戦いたくない。

もう魅夜のような犠牲者は一人も出したくない。

「隊長。・・・後退は出来ないのか？」

俺の発言にみんなの視線が集中する。

「それは・・・」

隊長が言いよどんでいる。まあ、聞きながら答えは分かつていたけどな。

「敵前逃亡は銃殺刑は基本だよお～」

せんがサラッと怖い事を言つ。

うん。笑顔で言われると逆に迫力があるぞ、せん。

「それ以前に大尉は悔しくないのかよ！ ヤツラせつかく魅夜が命をかけてやつた事を台無しにしようとしてるんだぜーー？」

「いや、ちやーー。お前の言いたい事は分かるが・・・。危険過ぎるだろ。それに、魅夜がどうとか言つたが、魅夜は俺達に未来を託したんだ。それを犬死なんとしてみろよ。天国で魅夜になんて言われるか分かったもんじゃないぞ？」

魅夜は俺達を命を掛けて守ろうとしたんだ。それを無駄にしてしまうのは許されない事だ。魅夜の分まで生き続ける事が、俺達のやるべきことじゃないのか？

「いいえ。大尉、そんな事は無いわ」

「香具羅・・・」

「大尉はまだまだ魅夜の事をまるで知らないのね。あの子ならもしおれが討ち死にしても「あ～大変だったみたいだね～」って笑つ

て迎えてくれるわよ。それに、魅夜が天国なんて行ける訳無いわ。
私達もだけど」

「地獄で会おうぜ・・・か

覚悟を決めるしかないのか・・・。全く・・・こんな時代に送
つた紋治さんを俺は恨むぞ。

「そう。 じうなつたらトコトコやるしか無いわ。 はじめから選
択肢なんて無かったのよ」

「そうの大尉。 もう逃げ場なんて何処にも無いの。 つづん。

「私達はね」

「私達は」という所を隊長は強調して言った。

その中には隊長と、せんとちやーー、そして香具羅が居る。 だが、隊長の視線には俺と芽衣は映っていなかった。

「こんな作戦は私達だけで十分なの。 芽衣と大尉は・・・飛んで
欲しいなの」

「な・・・

「隊長!」

飛んで欲しい。

隊長は俺達に未来へ飛べと言っていた。

それは俺達と一緒に戦うなと言つてると同じ事、このまま逃げると言つてると同じ事だつた。

「いいから聞けなの！　これは上官命令なの」

「そんな・・・言つてる事が滅茶苦茶だろ！？　さつき敵前逃亡は銃殺刑つて言つたばかりじゃないか！」

「大尉・・・これは花屑隊長、樟葉菜乃華の最後の命令なの。　お願いだから聞いて欲しいの・・・」

「隊長・・・」

隊長は涙を浮かべて叱責した。　樟葉・・・菜乃華？　隊長の名前は菜乃じやなかつたのか？

「私の本当の名前なの。　皆大尉が知つてゐる名前では無いな。そんな事はいいの。　もう時間が無いなの！　行つて大尉！」

「・・・大丈夫だよお。　大尉と芽衣が居なくともこっちには魅夜がリミッター外してくれた無敵のTAMが4体も居るんだから勝利は確定だよ～」

せんがブイサインをしながら言つた。　彼女が言つのだから間違いないのかもしない。

「・・・・分かりました。　隊長、皆。　お達者で・・・」

「芽衣！？」

俺が答えを渋つていると、芽衣は短くそつと俺の手を引いて来た。

「ジュン君。 皆の意志を無駄にしちゃ駄目……」

「芽衣……」

芽衣はこちらを見ずに俺の手を引き続けた。

彼女は涙をこらえているのか震えていた。

「分かった。 皆、元気で……。 絶対生き残れよ！ ジュンペイ大尉からの命令だからな！」

「当つたり前だろ！」

「私は負けないわ。 魅夜の分まで！」

「絶対大丈夫だよ〜」

「スクラップドフラーの力を見せてやるなの！」

俺は最後に一人一人の顔を目に焼き付けてから、司令室を後にする。

カラーン

もう、此処には帰つてこないだろ？と思ひ、軍服のボタンを一つ外して廊下に転がした。

さよなら花肩。

この一週間楽しかつたで。

ありがとう・・・。

最終話『花の肩は・・・』（前書き）

未来へ飛ぶ決意をした芽衣と大尉。そして花肩へと迫り来る敵の大軍。

二人は、花肩はどうなつてしまふのか！？

最終話『花の肩は・・・』

大尉と芽衣の二人が去った後、花肩の隊員達は全部で4人。

TAM - 01に乗る 樟葉 菜乃

TAM - 02に乗る 久々知 智亞子

TAM - 04に乗る 醒禪 千代

TAM - 05に乗る 天宮院 香具羅

TAM - 03とTAM - 06とTAM - 07は欠番となっていた。

4人は自分達の機体へ乗り込みながら、それぞれに表情は硬く、そして口数は少なくなっていた。

「せん。 もう少し黙っていた事は本当なの?」

花肩の隊長の菜乃是薄いピンク色の機体TAM - 01ヒナギクからTAM - 04キザクラへ乗っていた千代、通称「せん」に通信した。

「あ～絶対に勝つって事か? 「めん~ホントは自信無い~」

「ごめんと言ひながらも明るい声で答えるせん。 いつでも笑顔を忘れないという彼女の心情がそうさせるのだろうが、しさか今回

ばかりは声に霸気が無かつた。

「だらうなつ！ だけど、大尉の期待に応えなくちやならないからなつ！ 私達は絶対に負けないぜ！」

「やつは言つても戦力がほぼ半減したつていつのはやつぱりツライわね・・・」

「やつは言つが、香具羅も不安さつに声を上げていた。

「とにかく！ やるしかないな！ 私達は無敗のウエストサン国最強の部隊「花肩」なの！」

隊長である菜乃の号令で各々の機体の駆動音が鳴り響く。

決戦が始まつとしていた。

木々が生い茂る森の上空に白と黒の機体が飛んでいた。

TAM-06オーネコとTAM-07ヒナギク。

その人型ロボットに乗っているのは芽衣と呼ばれる少女と、ジュンペイと呼ばれる青年だった。ジュンペイは階級が大尉なのでその

まま「大尉」と呼ばれる。

そんな二人は2機のTAMで基地から少し離れた森へとやつてきていた。

「」の森の奥に「ワールドスリープ装置」がある研究所跡があるといつのだ。

「・・・・・・・ジュン君、」

「ああ、芽衣子。」の辺りだつて思つぞ。記憶が確かならな」

一人が注意しながら森を探してみると、丁度森の中には似つかわしくない小さな鉄筋コンクリートの一階建ての建物があるのを発見した。

「・・・あれだ！」

「・・・・・・・分かつた。ジュン君降下して」

その建物の横にTAMを降ろして一人は「古倉研究所」と書かれた看板がある建物へ入つていった。

「やっぱり数が・・・・ちやーーー・香具羅！せんを守つてあげてなのー！」

「そんな事言つたつて！」

「くつそおおおお！　てめえら邪魔なんだよー　どけえええ！」

「うわあー・・・　囮まれちゃつたよお・・・」

花屑隊員達が敵の大群と対峙して数分で、その圧倒的数に押されようとしていた。

せんの乗るTAM-04キザクラは戦闘に特化していない工作用の機体なので囮まれば一たまりも無かつた。彼女の機体は数々のトラップ装置が内臓されているが、それも設置する暇が無ければ意味が無い。

奮闘するちやーー」のTAM-02ボダイジュや香具羅のTAM-05キキョウは一撃一撃で敵を確実に仕留めていたが、敵は湯水のように沸いて出て思うように動けなくなっていた。

隊長機のTAM-01ヒメユリは強力な兵器を搭載しているが、サポートするTAM-06オニコリが居なければ発射することは自爆行為に過ぎなかつた。元々の性能は悪くないのだが、いかんせん火力不足だつた。

「不味いなの・・・。　リミッターが外れて運動性能も火力も上がつていいけど・・・　キリが無い！」

敵側の新型TAMも混じつていたのだが、それすらも雑魚のように個々を圧倒しているが、それでも敵はいくらでも次々に来る。こちらのTAMの燃料が切れるのが先か、相手がこちらを打ち落とすのが先か・・・　そんな状況だつた。勝ち目があるのかと言われば、どう見ても未来が見えない。

だが・・・。

「くわーい。攻撃はたいした」と無ごつての元。虫みたいに次から次へと…」

前方に對峙する3体のTAMを同時に蹴り倒してちやーーは息を吐いた。

操縦技術と運動神経は花屑一なのだが、そんな彼女にもすでに疲れが出来ていた。

一瞬動きが止まってしまい、そこを狙って撃とうとしていたTAMを香具羅が打ち落とす。

「ちやーーー。油断しないで！　まだ来るわー。」

助けてくれた香具羅に通信モニター越しにサムアップしながら、ちやーーは自分の頬を両手で挟むように呟く。

「わかったー。おっしゃあー。てめえらりまじめてかかってー」おおいー！

「うさもーー！　地面や海中だけが魚雷じゃないんだよー。」

うつ言ひて敵から距離を取つたと思つとTAM-04キザクラは両手を左右に広げた。

そこから何か光るもののが飛び出る。

しかし、それでは何も起こらなかつた。

敵のTAMが「けおどし」と思いキザクラに近づいた瞬間

チュードーン！

敵のTAMが爆発。

「空中魚雷だよお」近付けるものなら近付いてよお！」

「超兵器だけがヒメコリじゃないなの！ ブレイズブレードお！」

TAM-01ヒメコリは光状の剣のような武器を取り出し振り回す。一太刀する毎に真っ二つになっていく敵TAM。

皆、各個撃破ならば負けはしなかつた。

しかし

「あはははは！ やりますわね！ 花屑！ だけどこのG-TAMには勝てませんわよ！」

敵のTAMから外部スピーカーにてそんな笑い声が聞こえてきた。

その音声の出所には金色に光ったTAMが一体。

「の大群を率いていたTAMだつた。

「私の金月がお相手いたしますわ！ 銀月の仇・・・取らせて頂きます！」

超スピードで迫り来る敵の隊長機。

「な、なんだ前の馬鹿みたいなのが居るぜ！？」

ちゃーこはそれを見つけて挑みかかる。彼女の性格上強そうな相手がいると真っ先に飛び出してしまうのだが・・・。

「遅いですわ！ ・・・・まづ一体」

ドゴーンー！

金色のTAMがちゃーこTAM-02と交差したと思つとTAM-02はそのまま地面に倒れてしまった。

「ちゃーこー？」

「ちゃーこー 大丈夫なの！？」

「ちゃーこー！ 反応してつ！」

赤いペインティングのTAM-02は通信を返してこなかつた。

岩倉研究所。

「・・・・」

そこには何度も来た事があつた彼は、その内部で懐かしさと同時に何か焦燥感にかられていた。

「…………ジョン君…………の奥がそつだつたね」

安息室と書かれたプレートが掛かっていた部屋を指して芽衣が言った。

「安息」という文字にちよつと不謹慎な気がしたが、眠るのには変わりは無い。

だが・・・

「なあ・・・・・芽衣子。　このまま本当に眠つてしまつていいのか?」

「・・・・・」

芽衣は答えなかつた。　その手が安息室の扉の取つ手を握る。

「さつきせんは大丈夫つて言つたが・・・・。　大丈夫なら俺達が飛ぶ必要なんて無いだろ?　そりぢやないのか?」

「…………ジョン君…………」

「俺は確かに幸せな世界で暮らしたい。　だけば、このま飛んで・・・逃げたら絶対に後悔すると思つんだ。　魅夜が体を張つてくれた事、皆が逃がしてくれた事・・・それを後悔すると思つんだ」

「…………でも、それは・・・皆の意志・・・」

弱々しく芽衣は言いながら、ドアノブを回す。

「だったら！　俺達の意志は！？」

芽衣の肩がピクンと震えた。

「俺達は・・・いや、芽衣は皆を見捨てていいのかよ？　お前は」

大尉の言葉はそこで止まった。

止められた。

芽衣がドアノブを握る反対の手でハンドガンをこちらに構えていた。

「ジュン君・・・。もう手遅れ。私と一緒に飛んで・・・」

「芽衣・・・子・・・お前・・・」

「このままもし戻つても・・・多分無駄。私はジュン君に死んで欲しくない。だから戻るって言つなら・・・ジュン君を撃つて私も死ぬ」

銃口は間違いなく大尉の胸元を捉えていた。後は引き金を引くだけで済んでしまう。

彼女は中途半端な気持ちで此処まで来たわけでは無い。その意志の強さがそのまま行動に現れていた。

「…………」
「…………大尉。 よしと書いて欲しい……。 私は撃ちたくない」

芽衣の銃を握る手が震えている。 その瞳にも涙が零れていた。

そんな芽衣を見て、大尉は一呼吸してからまっすぐに芽衣の目を見て言った。

「撃てよ。 芽衣」

「!？」

「今、大尉って言つたな？ お前だつてやつぱりこのまま飛ぶのを躊躇つているんだよ。 だつたら、撃つて二人で此処で死ぬか、戻つて玉碎するかどちらでも同じ事だろ？」

「…………そんな…………。 私は…………私はやつとジュン君を思い出しても…………」

「…………だからって花園での事は忘れてしまうのか？」

「…………そんな事無い……」

「だつたら…………。 やつぱり答えは始めから決まってたんじゃねえか。 時間を無駄にしたな」

「…………ジュン君…………うつん大尉。 「ごめんなさい」

「いや、俺も此処に来るまで決心が付かなかつたんだ。良かつたよ。最後に此処が見れて」

「…………最後じゃない。私は死ぬつもりは無い」

親指を立ててサムアップしていく芽衣。

それに大尉も応えるように親指を立てる。

「おっ！ そうだよな！ 僕達で全部ぶつた倒してやるつざー！」

「うん！」

数分後、白と黒の機体は最大全速で戦場へと向かうのだった。

「あははははははははは！ 弱い！ こんなヤツラに私達が負け
ていたなんてちやんちやら可笑しいですわ！」

「くうう・・・頭悪そうなのにあの機体の運動性能ってヤバいんだ
けど・・・」

「確かに前の銀月並みの脳細胞っぽいの。だけど、実力が裏付け

されてるから余計に悔しいなの

「・・・コミッター外して動いている分」いつの機体はもつ持たないよー」

花屑隊員はちゃーこを失つて更に戦況が苦しくなつていた。ちやーこの機体は不時着していて、その機体自体は攻撃を受け無かつた事が幸いして形は保っていたが、香具羅、せん、菜乃隊長に守られながらやつと無事でいるというだけという状況だった。

生死は分からぬが、まだ大破したわけじゃない。

「せめて援軍が来てくれれば・・・本国に援軍要請はしたなの。だけど・・・いつ到着するか・・・」

「はあ！？今まで私達だけを戦わせてた本国に何が出来るつてのよ！ 当てになんないじゃない！」

「！ ううん！ そんな事無いよー！ しかりに接近してくる機体があるよー！」

せんのTAM-04キザクラが索敵範囲に新しい反応があるのを発見した。

皆は一瞬味方の援軍かと思つたが

「！？ 敵のTAMの反応だよー！ まだ来るのー！？」

味方のTAMならデーターがあるのですぐに分かるのだが、飛んで来たTAMは識別不能の機体だった。 という事は敵の新型の可能性が強かつた。

「・・・でも、たつた1体？ ？ まつて！ 反対方向から2体の

TAMが・・・これはつー?」

「大尉と芽衣なの!ー!」

香具羅と菜乃隊長の策敵レーダーに味方機の反応。

TAM-06とTAM-07だつた。

「待たせたな隊長! 派手にやつてるみたいだな!」

「・・・ただいま。 皆」

「芽衣! 大尉! 貴方達なんで戻ってきたなの! ・・・ そう言つてる場合じやないの! もう、後でお説教なの!」

「了解だ!」

「了解」

そう言いながらも菜乃隊長の声は震えていた。

本国の援軍よりも心強い援軍だつたのかもしれない。

「大尉! ちやー!」が墜ちたなの! 守りながらだけ頑張つてな
の!」

「ちつ! また特攻しやがつたな!? 世話の焼けるやつだ

その時、動かなかつたTAM-02が静かに駆動音を鳴らしだした。

「ん・・・。 あれ? 私・・・げつ! ? 墜ちたのか! ?」

「お田覓めか？　お姫様。　早く体勢を立て直せ馬鹿！」

「お、おうーって大尉！？　・・・・ちっくしょー！　かつこ
悪いところ見せちまつたぜ！　名誉挽回といきますか！」

チャーリの機体はダメージを受けていたが、まだ動けるようだつ
た。

そこに寄つて来る敵TAMをまた次々に蹴散らし始める。

「皆、少し伏せて・・・ リミッターキャンセル確認。　ライトブ
ラストウェーブ発射」

芽衣の機体のヒナギクから高出力のビーム兵器が飛び出した。

その光線に触れた敵は次々に爆碎していく。

「おお～バスター！って感じだな　俺も俺も！」

芽衣の攻勢に嬉々としながらTAM-06オーネゴリも発砲する。
一発一発は他の機体よりは弱かつたが、その射撃は的確に敵を捉
えていた。

「ガンシユーティングワンコインクリアの実力なんだよ実は」

この時代の人間の菜乃隊長達には分からなかつたが、芽衣には分
かつたようでクスリと笑うのが聞こえてきた。

「ええい！ 2体増えただけで何を押されているんですのー。あんなのは一捻りなんですわよ！」

外部スピーカーを最大音量にして叫ぶ金色のTAM。

「なんだ？ 前の銀月つて馬鹿みたいなヤツみたいのが居るな？」

「そうなの！ 他のTAMとは比べ物にならないのー。大尉、芽衣！ 気を付けてなの！」

「ラジヤつた！」

「了解」

「こいつらは数で勝ってるのよー。押して押して押しまりなさいですわ！ キヤー！」

大声で叫び続ける金月は急に衝撃を受けたように前のめりになつた。

大尉や花肩誰も金月を狙つて居ない。

金月の後ろからの発砲だつた。

「何ですかー？ どこの馬鹿が間違えましたのー？」

外部スピーカーのままそんな事を叫ぶ金月のパイロット。やはり頭は悪そうだった。

「間違えてないよー。狙つたのよウフフ

金月の後ろから一体のTAM。それは先程飛んで来た敵の援軍だと思っていた機体だった。金月と同じように外部スピーカーを使って答えていた。

「…………おいおい。隊長あれって……」

「ええ、間違いないなの……」

ちやーこと隊長は呆然とそれを見ていた。

金月に反抗したTAMの外部スピーカーから流れた音声に聞き覚えがあった。

「…………あの馬鹿…………まあ最高の援軍つて事なのは確かだな

「わあ～い 援軍援軍」

「…………馬鹿…………」

そのTAMに乗っていた者を皆が確信して同時にその者の名前を呼ぶ。

『魅夜！』

「はああ～い 皆元気だつたかなあ？」

外部スピーカーから聞こえてくる声は死んだと思っていた魅夜の声だった。

その後金月のパイロットと魅夜の口論が始まった。

「あ、貴様！　お前はあの特攻してきた TAM のパイロットですか！？　捕まえておいたハズなのにどうやって…？」

「あ～ら、レイラ少将？　あの程度の牢が破れない私だと思つてたのかなあ？　舐められたもんだわ。私も」

「あ、気安くわたくしの名を呼ばないで頂戴！　名乗つた覚えはありませんわよ！？」

「だから舐めないでつてば～。貴女を舐めさせてくれるなら別にそれはそれでいいけどねえ～　そうそう。TAM の制御システムに穴があるなんて知つてた？」

「制御システムに穴あ！？　何を言つてますの！？　誰が早く口イツを落しなさい！」

「もう遅いのだよレイラちゃん～。まあら、ポチッとい

「な・・・何をしたの…？」

「全TAMの活動停止＆脱出不能ボタン押しただけなのだよレイラ！」

「むきーーー！　そんなものがあるなんて聞いてませんわー…？」

なにやら次々に動きを止める敵TAM達。

戦場は一気に静寂に包まれていった。

「もちろん。私の乗せて貰つてるヤツにはそのシステムは適応されないけどね。後、この機能は敵味方関係なくTAMつて形式の兵器は全部動かなくなるのだよ。まあ、ウチの花肩の機体は元々改造してあるから大丈夫だけ」

魅夜の言葉通り、こちらの機体はどれも動きを止める機体は無かつた。

それより魅夜がここまでTAMについて詳しい事に驚いたが、それと同時に込みあがつてくる感情を大尉は自覚した。

「…………魅夜つていいとこ取りし過ぎだよな」

「…………うん」

…………

その後、動く事が出来ず、脱出も出来ない敵TAMを大量に戦地に残したまま、花肩隊員達は無事に基地に戻る事が出来た。

その後現れた本国の援軍により敵のTAM達は、解体され、全員捕虜となつたらしい。

大将格のレイラ少将はイーストサン、ウエストサン両国により裁判にかけられるらしい。

だが、そんな事は花屑・・・彼等こまびらでも良い事だった。

皆が無事に生き残ることが出来た。

それだけが大事だったから・・・。

花屑基地内にて

「ウチの司令室のコンピューターに岩倉モンジって人のデーターベースが残つてたのによ」

「は?」

「それを解析したら色々分かってね。で、今回の行動に出たわけ

「・・・特攻したってウソついてまで?」

「いや、それはウソじゃないのだよ。脱出装置が働くとは思わなかつたのだ。で、敵国に捕まつたんだけど、敵国の方にもデータベースがあつて、そっちにはより詳しい情報があつたので利用させて貰つたよ。ほら、最後に発動したアレね。アレって二度と解除出来ないタイプらしいよ」

「じゃあ・・・もう戦争は終わつたの?」

「いやあ～。私達みたいにあつちも改造していくだらうね。
暫くは開発とかで無理だらうけど・・・」

「それまでは、休戦つて事だあ やつたあ 」

「はいはい。でも、今回の事で最前線から本国を防衛する方へ編成されるような通達があつたなの」

「え～。本国嫌い～」

「うそ。もうこいつと思ったなの。キッパリお断りしたなの」

「せつすが隊長 んで、大尉、芽衣は」のまま残るつて？」

「ああ？ それは一人に聞いてみたいと・・・」

基地付近の荒野

「まつたく・・・。あのまま戻らなくともなんとかなつたんじゃないか・・・」

大尉はうなだれたように呟いた。それに同意するよつこに頷いて芽衣は微笑んだ。

「・・・・うん。だけど、私達が戻った時皆嬉しそうだった

ね

「…………だな」

「……これからどうしようか。」

「やつだな……。しばらく戦闘も無いだろうからこのままこの時代に居てもいいかもしないが……」

「時間はたっぷりある」

「そいつ。ゆっくり答えを出せばいいんじゃないかと思うんだ。紋治さんが「平和に暮らせるように」ってあのTAM停止機能をつけてくれたけど、それは解決策になつてないからなあ……」

「うん……」

「それ……」

「? ?」

「芽衣に言つてなかつた事があるしな」

「いや……改めて言つてなかつたって事で……。一度は言つたんだが……あの……そのな?」

言ひよどんで何度も咳払いをしながら大尉は顔を赤くして芽衣から視線を逸らした。

「うん。何?」

その視線を追いかけるように芽衣が大尉の周りを回る。

そうされて観念したように大尉は芽衣に向き直ると、真剣な眼差しを向けて呟いた。

「芽衣・・・あの・・・俺はお前を」

一陣の風が吹いた。

その風が何処からか花びらを携えて宙を舞わせていた。

その花は桜の花。

それを昔の人は花屑と呼んだ・・・。

最終話『花の脣は・・・』（後書き）

これにして「花脣」は終了です。

これまで呼んでくださった方々、本当にありがとうございました。

文法や色々なところに至らない所はあったと思いますが、それでも応援してくださった多数の方々に感謝したいと思います。

次回があるか分かりませんが、その時がありましたらよろしくお願ひします。

では、お疲れ様でした。

花脣 作者：霧香 陸徒

実はエピローグがありますがこちりでは公開しません。 ご了承下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3891d/>

花屑

2010年10月16日01時49分発行